

# 針 葉 樹



第 十 一 號

一橋大學一橋山岳部







# 針 葉 樹



第 十 一 號

1953—1955





前穂高北尾根にて

山本健一郎





針 葉 樹 第 十 一 號 目 次

卷 頭 言	.....	(一)
部長に就任して	.....	(二)
新制學年に依る部の基礎について	.....	(三)
◇	.....	
二つの春山合宿	.....	
☆岳川よりコブ尾根・疊岩尾根・奥穂・前穂・西穂稜線	.....	(六)
☆横尾、涸澤より前穂高北尾根	.....	(三〇)
『十號』以後の歩み	.....	(五)
大塚武、山田亮三、小林茂雄	.....	
石井左右平、小泉三好	.....	
記 録	.....	
☆昭和二十八年度	.....	(六)
☆昭和二十九年度	.....	(八)
◇	.....	
山 小 屋	.....	(一〇)
部 誌 (昭和二十八年四月—三十年三月)	.....	(一三)
寫 真 說 明	.....	(四)



## 卷 頭 言

戦後十年——ということばのひびきは、何よりも世の中の落ちつきを反映しているもののように思われる。山岳部が再び或る程度恵まれた条件の中に成長することを許されるようになるまでには、暗い谷間の時代から尾を引いた種々の悪条件を一つ一つ克服してゆくための長い時間と努力が費されねばならなかつた。たまたま四學年制への切り換えは部の内容構成を多少とも變え、それによつてまた我々の山登りの方法、部の存続と新たな充實への方策について改めて検討されねばならぬこととなつた。このことはかえつて、それまでに積み上げられて來たものを基にして、自分達の総合的な力を、一舉に新しい合宿體系の中に實現させてゆくべき一つの轉換點となつた。我々は今や部が進むべき方向についてのある程度の見通しを得る段階に漸く漕ぎつけたところであると言えようか。外的發展に伴う内的充實こそ今後の問題であらう。

『針葉樹』十號が出されてから今日まで十五年以上の歳月が經過しているが、我々の山登りも時代の移りと共に多少の變遷を経験して來ているように思われる。又最近とみに高揚しつつある遠征熱の只中にあつて、ここに纏められた記録の一卷に、いかなる評價がなされるものであるかは、かの時代と今では大分趣を異にしていることであらう。ただ我々は現在自分たちに許される条件の中で最善の努力を盡して自己の道を切り拓いてゆくということ、そしてそこに一つの部としての人間的融和を求めてゆくことに、今も昔も變らない一つの流れが存在していることを知るのである。

記録はもとより一つの結果である。しかしその一つ一つには、我々の眞摯な意志と情熱がこめられている。一つの結果は又よりよき發展のために他山の石ともなるらう。

## 部長になつて

太田可夫

みんなが山へ入つた後で、うれしそうに盃をあげながら、しかし心配そうにラジオニュースに耳をかたむける山へ入らないやまだ山へはつれてゆけない、老人の新部員がいる。實力はあるかもしれぬが、どこでも見せたことがないから、部員はかれをかもつているけれども、口だけは實に達者だ。ちよつと變つた部員だから、おいておくことにする。しかし山へ入らぬ部員は統制上困りものだから、部長にしておく。部長は名前だから無視していい。というわけで、この老人は山岳部長にされました。山のしろうとです。山男といわれる友人や、病妻にうそをいつて、出張と稱して山へ出かける友人をもつているので、いじめられたら助けにきてもらうつもりです。

ながいあいだこの部は部長なしでした。それで十分でした。いまさら部長を作るのはつまらんことだし、わたくしとしてもなくてもよいものになるのはなおさら氣の進まないことですが、老人の部員をおいておくことに、老人に對するある思いやりもあり、老人の部員がいることで、また、たいくつなときに、いいこともあると考えています。

これからいつまで部員でいられるか分りませんが、そのあいだに、いかなるときでも、理性的に行動できる一人前の山岳部員となり、時をみて黒部の奥をきわめたいと思つています。そのときはすぐれた、若くたくましい部員がきつとついてきてくれることと思います。これがわたくしの一生の大望です。白髪の老人が黒部の源流で茶をたて、盃をあげ、詩をつくる光景を想像してみして下さい。ともあれ、このたびの『針葉樹』復刊を心から喜び、山岳部の健全な成長を皆と共に祈るものです。

# 新制學年に依る部の基礎について

## 一、新しい出發點

昭和二十八年卒業生と共に旧制部員は部室を去り、四學年制の新制現役のみとなつた。

我々は他校山岳部に於ても非常な關心と努力の拂われた旧制と新制のギャップの乗り越えに全力を盡すべき時點におかれていた。新制大學山岳部の登山、それは旧制高校の登山により近づいたと云えよう。四學年の登山が如何に不安定なものであるかを先ず考えてかからねばならない。

第一に表面に現れる事柄は技術・經驗そして人員の弱體化、弱小化である。當部に於ては、高校時代よりの有經驗者を多く新入生に期待出来ない。近時益々此の傾向は著るしい。積雪期についてのみ考えるならば、此の新入部員の前には十二月と三月の年二回、四ヶ年間に八回の雪山合宿が待つのみであり、合宿規模が大きくなりつつある現在、冬期の個人山行は困難であり又個人山行では習得出来ぬ要素が多い。

最初の十二月の合宿に於て一年部員は特例者を除き、スキー合宿の域を大きく出る事は難かしい。最後の四年生の三月合宿は就職その他の都合で完全の参加は望み得べくもない。残された六回の機會の内、三年の三月合宿にチーフリーダー、又アタックパーティーのトップになる者にとつては以前に四回の機會が、そして技術斷續を避ける爲必ず二年生をアタックパーティー中に含めねばならぬが、その二年生は以前に僅々二回の經驗を持つのみである。

一シーズンの怠慢、一回の事故が部活動の流れに與える影響は旧制に於けるものの比ではない。人員についても同様の事が云われ得る。一學年實動メンバーに缺員を出す事は困難を生む事は勿論だが、それよりも從來多く見られた個人の力量中心に

依る登山に陥らぬ様改められねばならぬ。それは必ずや次の時代に悪影響を及ぼすであろう。スポーツアルピニズムの理解を必要とされる第一のものであろう。

第二に内面的にはリーダーシップ徹底の困難がある。リーダーシップをとる事は比較的容易である。理解させる事、実施させる事が難かしい。此れは登山には密接不可分のものであるが、前述の如き部の内容の上から、特に考えられねばならない。然るに新制になつてより改悪の方向に向いているのではあるまいか。早晚此の問題を解決せぬ時はより困難な合宿中に於ける事故を惹起する可能性が大きい。

前置きが長くなつたが、次いで如何なる経路をとつて、後述の二つの春合宿の記録が生み出されたかを述べる。記録は二十七年度を除き、全て後に誌されているので、その背景を主とする。

二十七年度——二十名を越える新入部員が殆んど缺員を見せずに夏合宿まで引き繼がれ、夏期に於ける大規模な縦走、合宿への端緒が見られたが、此れは前年度の遠見・五龍合宿が冬山への道を指し示した事と共に、我々新制部員に與えた影響の最たるものであつた。此の内どちらか一つが缺けていても、我々の立ち直りは一年遅れたに違いない。此の年の夏合宿は涸澤で行われ、十四名が合宿後烏帽子岳迄縦走、四名が奥又白池畔に生活した。チーフリーダー中村正司、リーダー澁谷一郎・南昌宏。

十月——此れより新制部員のみ山の山行が始まる。時に新制三年部員は缺員で、旧制本科三年及新制四年は同時の卒業の爲、就職試験等に忙殺されて居り、爲に新制二年部員が雪山への準備をする。此の時の部の可動人員は二年六名、一年十七名、雪山の経験者は其の内四名であつたが、各々一二度の経験で荷上げの方法も、ベ이스キャンプの重要性も、まして己れの實力の程を知る術とてなかつた。

先ず登る事であり、その第一要件は雪山のリーダーとして自らを養成して行く事にあつた。當初西穂より奥穂へと云う當時としては無暴極まる計画をもつて、上高地に荷上げに行き、己れの未熟を知り、針葉樹會の席上で實狀を説明し意見を乞ひ、

其の結果岳澤生活に切りかえる事となつた。併し十二月はスキー合宿を乗鞍岳位ヶ原にて行い（八名）、三月に二年三名、一年一名計四名にてリーダー養成合宿を岳澤に行う事となつたのである。此の合宿の成果は測り知れぬものがあつたがその中でも、ベ이스キャンプ完成に主力が注がれた。この実施と反省が翌年の飛躍的進歩の原動力を作つた事は否めない。今後雪山の沈滞を盛り返えさんとする時、常に第一段階として考慮されねばならぬ問題である。

だが此の間他の部員の活動分野は無く、合宿中、西穂、ジャンダルムに登頂したとは云え、前穂直下でサングラスの不備から風に眼をやられて引き返し、雪崩に二人流され、古いラジウスを扱い切れず燃料をアルコールに切り替えて辛くも生命だけ保つて歸つて來た事を恥を忍んで付け加える。それは斯様な状態に部を追い込む事が第一に避けられねばならぬ事を示す爲である。

二十八年度——此の年には第一に人員補強、第二に合宿體系の確立、第三に資金の裏付けに主眼がおかれた。

一學年その儘に繰り上り、新たに一年生を加えて部員數も夏合宿當時實動人員三十名を突破した。又マネージャーの努力によつて先輩よりの資金繰りも明確となり、年間十一万圓を越える豫算を建て得る様になつた事は新制の部の根本的建設に大きな力となつた事は否めない。

合宿は谷川合宿（五月）、夏合宿（劍澤より上高地まで）、スキー合宿（十二月）、春合宿（岳澤—三月）と變化は大きくないが、其の一つ一つの充實には、個々の技術よりも、より大きな規模に對する順應に主力を注いだ。個々の技術については前年秋より引き續いて岩登りに力點をおいたが、夏合宿、谷川合宿共雨に禍いされた爲充分の成果は得られなかつた。併し二年生の、秋口よりの活躍は此れを補つて余りあり、後述の二十八年度春合宿の躍進を可能ならしめた事は特筆に値する。

以上の三者一體の成果は部力の急激な上昇線を描かせ、新制部確立も第二段階に入つた。

二十九年度——此の年は先ず二十八年度の反省より始まる。我々もすでに四年となり次の時代を考えねばならなかつた。三年生にサブリーダーを一名指名し徐々に部の中心の移行を圖り、次いで前二年間の行動から缺けている點を拾つてみた。

夏期の最大の缺點は大きな岩場への不馴れであつた。小規模な岩場での訓練生活は、自然にアクロバットな小手先の業に走り易い。記述の如き我々の登山に於て必要とされるものは、あくまでも綜合力の結晶たる合宿乃至登山様式であつて、細かいテクニクも無論其の前提として必要であるが、究極は大規模な登攀（それは大規模な準備を教える）に慣れたリーダーを數多く有する事である。此の夏の合宿に於て、中堅の二・三年部員が殆んど分れて奥又白生活を送つた事は、此の要求を充す爲の第一段階であつた。併し此れは變則例であつて、基礎の出來上つた後の夏合宿にては行ふべきケースではない。

冬期に於ける最大缺陷は、悪天候と強風への順應力及び耐久力に乏しい事であつた。急造の技術・經驗所有者の最大缺陷であり、此の缺陷の暴露は致命的である。この對策は十二月下旬、足場も良く、經驗もある所から、白岳を中心とする後立山の稜線歩きとなつて現れ、豫想以上の悪天候とドカ雪に十二分の効果を挙げたのである。

一年間の總決算は春山（三月）に於て行わるべきで、冬山（十二月）は四年生の行動出來る間の後へのつなぎの役割からクローズアップさるべきと結論された事も此の年の一つの重大な成果であつた。

終りに、——以上我々の任務は終つた。多くの缺點もあつたと思われるが顧みれば部の存續、新制部の合宿體系に一應の礎石を置き乍ら行動したと云われるのではなからうか。此の上に如何様に積み上げていくかを我々は興味深く見守る事であるう。

我々の在學中志して結果を得られなかつた事に、夏期の縦走システム（パーティーの分け方等）、冬期合宿の爲の偵察形式、その時期の考慮（秋では遅すぎる）、ポーター・システムに於ける連絡方法（其の長所の取り入れ）、合宿時に於ける部員間の意志の連絡（コール・サインによる）、雪中天幕生活時間延長にもつていく爲の合宿變型乃至新設（四・五・六月）、此れに關連した一年生のアイゼン訓練への過程、そして最後に一橋独自のリーダーシップの徹底がある。

此れ等の事柄は一見形式に過ぎる感を人に與えるかも知れない。併し我々の對象は自然であり、我々の失敗による結末は死である。我々はまず自らの足許の氷にスタンスを切り、然る後次の動作に移らねばならない。付け加えて云う。現在我々の目



指す山登りは、個人山行では出来ぬもの、そして究極は一橋山岳部独自の山に登る事である。我々一人々々は山に浸り切り、山の興えて呉れる全ての要素を五感で吸収し、且つ其の足取りの一步步を確實にするべく経験と技術を習得する。だが此處までは個人山行に必要とされる要素であり、部の前提に過ぎぬ。一つの部室に集う以上更に其の上に築かれねばならぬものがある筈だ。此の様に考える時こそ全ての者にとつてリーダーシップの理解がより必要とせられ、これまで縷々拙言を費やしてきた事柄が幾何かの効果を見せて呉れるであらう。

最後に我々の年代が部が安定した歩みを見せる爲の必須事項として結論する所は、一、絶えざる人員の補強。二、資金の裏付け。三、二年生への教育（技術）集中、の三つである。

上昇線にある部に適度のブレーキを加えて安定を保つ事は難かしい。限界近くまで来た部力を支え続ける事は更に難かしい。そして下降時期の部を支え、盛り返す事は最も困難である。當部は部力の下降初期に必ず事故を伴っている事を忘れずに行動しよう。常に二年先を考えよう。此れが底の浅くなつた部にとつて最も必要な事である。

（石原 脩）

## 二、過ぎし一年を顧みて

昭和二十九年度前半までに於ては人員、技術、資金といつた最も根本的な三つの要素を中心として、新制部確立の爲の基礎工作に力が注がれて来たわけであるが、同年度後半以後の課題は、或る程度出来上つた礎石の上に部の力の集中的表現としての個々の合宿がどの様な形で行われて行くべきかという一歩進んだ問題であつたと言えよう。同時にそれは今までに作り上げられて来た部の基礎がどれだけ確かなものであつたかを試すものでもあり、又さまざまの新しい問題も提起されて来ることであつた。

二十九年度の冬山合宿はあらゆる意味で一つの試みであつた。それは漸く出来かかつて来た春山の技術経験を基礎とした我々の行動が、嚴冬の稜線に如何に展開できるかということであり、そこでは登頂そのものよりも先ず出来るだけ多くの者が冬

山にとび込んで行つて、それがもつあらゆる条件の中に身を置いて、雪山に對する經驗と順應力を養うということが第一の目的とされたのである。遠見尾根は豫想に違わず、ドカ雪のラッセルにさんざ悩まされ、その上、一たび稜線に出たら連日風雪又風雪で、まる一週間荒れ狂う小屋に頑張つたが結局敗退の憂き目に逢つた。

しかしこの合宿によつて、まことに貴重な經驗と示唆を得たことを考えれば、合宿そのものの意義が零に近いものでは決してなかつたようである。即ち、頭までも没する深雪のラッセル、荒天と寒さの中に強いられる忍従等々、春山では得難い、しかもより大きな見地から、雪山にあつては不可欠な要素を身をもつて經驗しえたことは大きな收穫であつたと言わねばなるまい。豫期以上の悪条件の中に置かれても、内に或る程度の余裕をもつて悠々頑張るだけのねばり、それを支える精神的基盤がどれだけ出来ていたか。多少なりとも自己の缺點を見極めることが、次の段階へ進む前提であるならば、その意味に於て目的の一半は達せられたとしてもよいであろう。又この合宿を通して、我々が今後専ら重點をおいてゆくべきは寧ろ春山合宿の充實であるという一つの結論が得られたのであつた。

それにはいろんな理由が考えられるが、實際には技術的な面よりも、どちらかと言えば比較的多くのメンバーを、長期間に亘つて動員出来るという事に重點がおかれたことは否めない。ただこの場合、春山合宿は時期的に四年生の卒業期と重なり、必然的に三年生のリードに任せられなければならないことになるが、それは一應止むを得ぬこととされた。

一年生にとつては春山が最初の雪山の經驗となる場合が多く、技術的には何ら期待出来ないし、寧ろこの合宿の目的の一つとして常に新人の技術的訓練が考えられねばならない位である。又二年生の或るものは進んでアタックのメンバーとして行動の最先端を自ら擔ねばならない。最高學年の四年生は就職の四月を眞近に控えてあたふたと山を下りてゆく。山に残つたりリーダーは自己の技術の小手試めしといったものとはほど遠く、ベースを固め、新人の教育にも當らねばならない。これが新制部としての春山合宿の現段階のすがたである。そこでは何かせつかちに事が運ばれているといった感じを受けないでもないが、我々が置かれている新しい条件の中で少くとも我々の見出した最善の方法がぶつからねばならない問題とも考えられる。

暗中摸索の中からさがし求めたこの行き方も、初めは苦しみの連続でしかなかつたが、それも経験を重ねることによつていくらかずつでも報いられて來ているのではないかと思う。現在でも尙、春山合宿の存続とその充實を目指す努力の中には苦しい方の要素が多い。しかしそれを克服して今後數年の努力を續けて行くならば、現在よりははるかに余裕のある、しかも一層充實した春山合宿が我々のものとなることを信じている。

前後三學年しかないメンバー構成に於ては、人員の確保、技術の保存ということに格別の考慮が拂われねばならないのは寧ろ當然の運命であるが、その點から、ともすれば無理の生じ易いことも考えられる。これに鑑みて我々が今まで行つて來た春（五月）、秋の技術鍊成合宿についてはその時期及び方法が再検討される必要が生じて來ると思われるのである。例えば昔はなかつた五月初旬の所謂ゴールデン・ウィークの活用など、今のところ部としてきまつた方法は考えられていない状態である。

ここで三十年三月に行われた春山合宿の方法と経過を簡單にふりかえつて見たい。先ず第一に合宿規模が前年よりはるかに擴大されたにも拘わらず、比較的スムーズに事を運ぶことが出來たのは、一年は一年と、いくらかずつでもそこに経験に基く馴れと自信、そして客觀的にも部全體として多少の實力が具わつて來たことの結果によるものと考えられる。初めから考慮された新人の、技術的向上という點では豫想以上の結果が得られた。

ただ合宿計画の實施に當つては思わぬつまづきがあつたりして（別記、春山の項参照）合宿形式そのものの缺點についてはいろいろと反省の材料が提供された。我々にとつてポーター・メソッドのみが形式として最良のものであるとは考えないし、又ラッシュ・タクティクスが常に有利であると考えられるものでもないが、或る一つの目標が置かれたとき、それに對して自分達のもつ技術的、その他の條件に照して如何なる形式によるべきかについて、我々は十分な判斷力を養わなければならぬ。

ともあれ合宿の形式的成功不成功ということよりも、この合宿に参加したメンバーの個々の技術的、精神的充實、部全體としての成長が見られたという點に、より大きな意義が認められねばならないと思うのである。それまで、精神的にもどちらか

というふうらふらしていた一年生が、その後は押しも押されぬ部の中堅として成長して來ていることは、寧ろすべてに於て成功したに等しいとさえ言えるのではなからうか。

昭和三十年度に入つてからは、例によつて新部員の大量獲得が先ず最初の仕事だつた。これに對する前景氣は近來にないもので、實際募集に當つては、入部希望者として名を連ねるもの實に三十名をこえた。狭い部室に膝つき合わせての歡迎會はこれまでにないにぎやかなものであつた。しかしこの人數は勿論夏山までも持ちこたえず、かえつて一年生の夏合宿參加者の少なさをかこつこととなつたのは、皮肉どころのさわぎではなく、我々にとつては寧ろ深刻に考えさせられる問題であつた。ともあれこの年は全體的に部員數の増加を見、その點からのみ言うならばたしかに前年より一まわり大きな部となつたのであるが、それは直ちに部全體としてそれだけ強力になつたことにはならない。人員の増加に伴つて資金支出の膨脹、器具の不足、ひいては全體的な統制の困難等々、その他もろもろの雑事がますます煩雜化して來るといつた新らたな負擔がかかつて來た。それらの仕事は組織的に分化されて、全體としてスムーズに處理されて行くことがなければ、我々は次の段階に進むことが出來ない。量的擴大に伴う基礎の掘り下げが必要である。このことは本年度中を通じて痛感され、尙未解決のまま三十一年度に持ち越されようとしている。

部員募集が一段落した四月下旬、早くも三名の一年生を加えて十數名が上高地と鹿島へ入つた。穂高では春山候補地として考えられた明神東稜等の残雪期偵察が主目的ではあつたが、それを含めて前穂、西穂等の稜線を歩き、結果的にはかなりの技術訓練にもなつたようである。特に春山で鍛えられたばかりの二年生にとつては、五月初旬の山で、ある程度の余裕をもつて行動できる程に成長していた。

五月下旬の谷川岳合宿は三十二名の參加を見て、マチガ澤出合には五張りのテントが威勢よく立ち並んだ。天候には恵まれた方ではなかつたが、第一日目、一の倉烏帽子南稜へ二パーティー、同一の澤から東尾根へ一パーティー、他はグリセード練習の後、全員がマチガ澤をつめて頂上へ登つた。二日目は雨の中を半日、一の倉でグリセードの練習に終始した。

技術訓練は、廣く山登りそのものの立場からすればあくまで一つの手段であろう。しかし、技術訓練成合宿という切り離された形式の中にあつては技術訓練そのものが一つの目的となるわけである。その目的に對する手段すなわち技術訓練の方法そのものについては我々はある範囲内で選擇をなすことが出來よう。結局は技術的向上という一つの目的を目ざす場合でもその手段方法が慎重に考えられねばならないことは他の場合と何ら異らなものである。單に目的にのみ奉仕してその過程が輕視されるところということは常に戒められねばなるまい。具體的な技術訓練の方法というものは自づと決つて來るとはいいながら、その時々於て最良の方法が検討されてゆくことが必要なではあるまいか。そのやり方の理想は、全員の十分な信賴と理解の上に立つところのものであろう。理想は完全には實現し得ないまでも忘却されてならぬことだと思ふ。この谷川合宿以後、夏山にいたる間に、新人の減少傾向が見られたというのであるが、その原因の一部が案外こんなところにあつたのかも知れない。

愈々夏山ではこれ又三十三名という大世帯が、劍澤に生活することになつた。學年別には一年七名、二年十一名、三年六名四年九名であつた。夏山では一年生のトレーニングが大きな目標となるが、七名という人數は相對的にも稍々少なかつた。比較的天氣にも恵まれて、連日多くのパーティーが行動したが、上級部員の頭數が豊富でリーダーには事缺かなかつたことは心強いことであつた。但し一方ではそのために炊事その他の仕事が下級生にしわよせされて、あまり有難くないことだとこぼす連中もいた。合宿三日目からは三の窓へテントを設け、ここに延べ十二名が入つてチンネその他の岩登り生活を行つた。

夏山縦走は二隊に分れ一つは藥師を経て槍へ、他は御山谷を黒部へ下り、針ノ木から後立山へ向つた。人數は夫々十四名、十一名で、隊としての行動に適當なものであつた。槍への縦走は二年前に十八名で歩いた時に比べて全體として體力的にも殆んど問題はなくなつていふと思われたが、劍澤以來原因不明の集團下痢にかかつて中々元に癒らず、前夜來半ば絶食のまま西鎌を登るといふものもいた。針ノ木の方では黒部からの登り等で大分アゴを出した連中がいたらしいが、最後にいたつてパーティーとしてのまとまりが多少あやしくなつたといふようなことがあつたようだ。

合宿終了後、一部の三年生があらためて上高地へ入り、彼ら独自の力で瀧谷、前穂四峰（又白側正面）等の登攀を含む十日

余りの穂高生活をおこなつて來たことは、その成長を願う我々に頼もしいものを感じさせてくれた。

この年の秋は型破りのじめじめした秋であつた。九月の試験の濟んだあとの折角の出足を多少なりとも鈍らせてしまつたようだ。散發的に南や八ッ、カクネ里といったあたりは何名かずつ出かけたが、天氣に恵まれた山行をして歸つたものは稀だつた。

この頃から漸く四年生から三年生へ部の中心の移行を行わねばならなくなつてくる。リーダーの更迭の時期や形式についても今日まで別にきまつた方法がとられて來てはいない。すべての仕事を、よりシステイマティックに行うこと——それは大世帯になつた部にたえず要求されることだつた。ここでは先ず一つの型を考え、徐々にその内容を造つて行くという方法がよいともされた。しかし極端に實質的な面を無視した形式主義に走る行き方は良い結果を生むとは考えられない。實際問題としては部の中心の完全な移行は十二月の冬山以降に延ばされる。この問題については結局ほかの幾多の問題と同様に、單に結論を急ぐことなく今後幾何かの間、その時々々の部の現實的條件によつて最適な方法を考え、それを實際に試みて、反省すべき點については後から結論を出してゆくということが必要であろう。

十月下旬、春山の荷上げも完了し、部室には冬山研究會のテーマが貼り出され、漸く切迫した氣分が部室にみなぎつて來る。冬山を前にしてのこの頃から我々のなすべきことは實に多い。研究會については我々の間ではこのところ例年あまり進歩が見られなかつた。選ばれるテーマは大體きまつているようなものの、自分の問題として深く追及して行こうという積極的な傾向が見られないのは、山登りそのものを安易に考へていることから來ているのだつたら、その點は眞剣に反省されねばなるまい。常に研究的態度を失わず、自然科学とは縁の薄いわれではあるが、登山に對する科學的接近を怠ることはできない。そこから進んで各自の、又、部全體としての登高意慾の涵養につとめることが必要である。

三十年十二月に行われた冬山は、前年の經驗に鑑みて、目標、計画、合宿規模等が過大なものとならぬよう考慮され、しかも二年生以上のメンバーのみからなる利點を勘定に入れて（一年生は全部スキー合宿に吸収される）我々のもつ技術が十分に

され、冬山に於て我々に缺けている諸要素を補い得ることが主眼とされ、天狗尾根から鹿島鎗北壁をアタックした。メンバーは僅々七名に止まつたが、しかもこのうち前年冬山に参加していたものはわずか二名にすぎなかつたことは注目すべき事實であろう。

この合宿の計画に當つてはどちらかと言うと天狗尾根からの北鎗登頂が先ず考えられ、それと附隨させて北壁の登攀を行うという形であつたのだが、実際には初めから壁の方を先ず考え、登頂を副次的なものと考えた如くに進行し結局目標のあいまいさということが、北壁登攀の成功にも拘わらず、結果的には何か氣分的にしつくりしないものを残して終つた。我々はこれに似た失敗を過去に於ても何度かやつているようであるが、特に冬山等にあつては、その合宿の統一された目標をはつきり打ち出して、一つの目的に向つて總力を結集するといつた方法がとられるべきであると痛感した次第である。同時に達成出來そうな二つの目標をおいても必ずしも無理でない場合もあるが、技術的な面からのみでなく、精神的な面からも、一つの目標に對する總力集中ということの爲に、目的をはつきりさせておくということは少くとも有利な場合が多いであろう。

その他の面では概ね順調に進行した。特に深雪の中でのテントの移動等については極めてスムーズに行われた。ただ合宿期間中を通じて天氣が比較的よかつたせいもあつて、初めから時をかせがんとしような少しせつかちな氣分で動いたことは、冬山に入る我々の趣旨に反するものであつて大いに反省される點であつた。ちつくり腰を落ちつけて粘り強く行動するということは冬山の第一課で教えられたことではあつたのだが。

以上過去一年をふりかえつて、前文に指摘されたような事柄が、部の實際的活動に於て、その後どの様に受けつがれ發展させられて來たかの跡を辿つて見た。やや文章は冗長に失した感があるが、もとより標題に掲げられた『部の基礎』は確立されたかどうかについての結論的なものをここで得ようとは思わない。我々がこの一年間を通して目指して來たものは、部の基礎の確立を成就し終えるというよりは、むしろ眞の基礎確立への貢獻である。最初の礎石がおかれたところに、もう一つの礎石を積むことである。外觀的な華やかさのみを追うことなく常に確實な足場の上に立つて、しかもその上に、のびのびとした、

登山本來の良さを十分に味わえるような山登りと、山岳部生活とを作り上げて行きたいと思うのである。(吉田義則)



## 二つの春山合宿

◇岳川よりコブ尾根・疊岩尾根、奥穂・前穂・西穂稜線

——昭和二十九年三月——

◇横尾、涸澤より前穂高北尾根

——昭和三十年三月——

## 岳川よりコブ尾根・疊岩尾根、奥穂・前穂・西穂稜線

—昭和二十九年三月—

### 一、まえがき

春山の候補地として最初に考えられたのは、横尾尾根よりの諸ルートであつた。併しこれを行う爲にはベースを含めて四ヶ所以上の基點を設ける必要が出て来る。これに配するには最低十二名を必要とする。メンバーは集まる。しかし、これに伴うべき豫算面、器具面に難點があり、又頼りきれぬリーダーが四名は必要とされるが、これにも満足すべき解答はこの年の秋までには得られなかつた。以上の理由で不可能と決したのは八月の月上旬上高地に於てであつたが、この時すでに新しい目標に向うには時期を逸した感があつた。

當然得られる歸結は、その前年幾多の苦勞をもつて、記録的には報いられる所が少なかつたが、可成り満足すべきベースを作ることに成功した岳澤周邊であつた。コブ・疊岩の兩尾根及び前穂・奥穂・西穂の稜線を通ずることこそ我々の實力に最も適した山行と考えられた。かくて十月以降、此の計画の下、延べ十二名の荷上げ・偵察パーティーが上高地に向う事となつた。この合宿の主目的は冬合宿システムを軌道にのせる事にあつた。戦後我々は、此の様な合宿を行うには、余りに小さなシステムに慣れ過ぎていた。だが新制・旧制のギャップが意外な所で我々に利點を興える結果となつた。と云うのは、此の合宿に参加するメンバーの殆んどが、往時の合宿を知らぬ一・二年であつた事である。

副次的なものとしては、今後の合宿に缺くべからざるものであつて、此れまでの合宿に缺けていた雪中生活に對しての慣れを養う事であつた。これ程基本的なものであり乍ら、この合宿員全體の天幕・雪洞生活の日數を足してみても、それが余りに

も少ないのに、危惧の感がおこつて来るのをおさえる事が出来なかつた。事故が出るならば此の點からと、當然考えられ、又もしこの故に實際事故を出したならば、無謀の誹をうけても、我々には答えるべき言葉もなかつたであろう。此の對策として、當然岳澤に於ける行動日程及び天幕・雪洞生活に於ける器具・食糧に對する十二分の用意が考慮され、經費・行動面に大きな負擔と制約を興えてしまつた。

我々は出發の十日前迄絶対の自信をもつていたのであつたが、出發直前に至つて三名の缺員を出し、九名に減少した時は、我々はギリギリの線迄追いつめられた事を感じずにはおれなかつた。その結果はどうであつたか、私はそれにもかかわらず八分通り成功したと考へたい。從來の合宿體系を想像する事すら出来ぬ部員が多く出来た。倍加する雪山のリーダーを得る事が出来た。人數の減少にもかかわらず全計畫を遂行した。此れが成功でなくて何であろう。そして一應の成功の裏に自覺された種々の不行届きや缺陷についてよく反省し研究するところから、より完全な合宿が今後に於て行われるようになることを期待する。(石原 脩)

## 二、行動記録

◇メンバー チーフリーダー石原脩、白川隆夫(醫療)、須山修平、佐薙恭(食糧)、甘利仁朗、松尾寛二(器具)、吉田義則(記録・食糧)、山本健一郎、南亮進

◇パーティー編成

第Iパーティー(アタック) 甘利、吉田、佐薙

第IIパーティー(アタック及サポート) 石原、松尾、山本

第IIIパーティー(サポート) 須山、白川、南

◇期間昭和二十九(一九五四)年三月十四日——四月一日

三月十四日 白川、甘利を除く七名新宿發。白川は一列車遅れて同夜終列車に乗る。

三月十五日 曇時々晴

松本——澤渡——上高地

澤渡までバス。すぐトラックに便乗して、坂巻取入口まで。十一時半中の湯にて晝食をとり、荷物約十五貫をト傳湯に残して上高地へ向う。十五時大正池取入口。小雪がちらつき、焼も穂高も見えない。ここからスキーをつけ、十六時四十五分ホテル着。上高地に於ける積雪は約二尺。白川はこの日中の湯泊り。

三月十六日 晴後曇 停滯。佐薙、山本、南の三名はト傳湯に残した荷物を取りに行く。白川と共に十三時ホテルへ歸る。居残った四人は、朝から晩までかかつて餅搗きをする。二斗五升を九回に分けて搗き、大いにへばつた。夕方、ホテル前にて全員でスキーをやる。

三月十七日 晴

ホテル（八、〇〇）——岳澤BC（一三、二〇）——一六、〇〇）——ホテル（一七、三〇）

BC建設及び第一回荷上げ。岳澤の森林帯を抜けると、陽がジリジリ照りつけて暑いくらいだ。日中はすつから腐れ雪で足を運びにくい。天狗澤の對岸の台地にテント地を選定。ウイムパーテント二張（七人用及び五人用）を用い、BC建設。陽がかげつてからBC發。荷物なしで快適な滑降。河童橋で大休止の後、ホテルへかえる。歸路早くもスキーが一本折れ、須山が軽い捻挫をした。

三月十八日 晴・曇 全員BC入り

ホテル（一〇、三〇）——BC（一六、〇〇）

最後の荷分け、整理等に三時間ばかり費し、出發もおそくなつてしまった。二回に分けたので荷は九——十貫程度。ホテル前からスキーをはいたが相變らずの腐れ雪。十六時BC入り。大天幕、小天幕とも四人ずつ入り、食糧及び器具の大部分を大

天幕におく。小天にラジウス大一個をおき、大天にて石油コンロを使用する。甘利はこの日上高地入り。

三月十九日 晴 終日全員沈澱

豫定の行動として一日休養とする。十三時ごろ、甘利がBC着。大天に入る。午後、テントの近くにて軽いスキーを行い、體ならしをする。夜に入つて風が強くなる。

三月二十日 風雪、終日全員沈澱

五時まえ、一旦起床するも悪天の爲、再びシュラフにもぐる。九時半頃までに積雪約十センチ。降雪量は比較的少ないが、風が強くなる。表層雪崩が頻發。

三月二十一日 風雪 終日全員沈澱

昨日と同様の天気だ。九時半に起きて一日二食。下からの吹き上げがテントを雪煙で覆い、さ中の放糞行は沈痛これ言葉なし。

三月二十二日 快晴

◇コブ尾根偵察——甘利、吉田

◇天狗澤ラッセル——佐薙、山本

◇ホテルより荷上げ——白川、松尾、南

五時起床、無風快晴で直ちに豫定の行動に移る。甘利、吉田はコブ尾根下部の状態を偵察に行く。コブ澤から、コブの一つ下の小ピークへの尾根に取付き、ピーク直下より引き返す。八時頃になると、疊岩側からコブ澤への表層がしきり。新雪はコブ澤下部で約四〇センチであつた。

佐薙 山本の二名は天狗澤へ入り、天狗岩下までラッセルし、テントへかえる。

白川他二名は、上高地へ下り、ホテルに残した荷物全部を上げる。午後、一時雲が擴がり出したが、夕刻から又、すばらし

い快晴となる。

三月二十三日 晴 コブ尾根登攀

◇アタック・パーティー

BC(五、一五)——コブ下(九、二〇)——第一峰の下降終る(一六、三〇)——コブ尾根の頭(一八、四〇)——  
CI(一八、四五)

期待に違わず無風快晴の朝を迎える。三時に全員起床。甘利、吉田、佐薙の三名よりなるアタックパーティーは五時十五分テントを出る。コブ澤はすっかりデブリに埋まつている。昨日の偵察の時と同じルートを取り、尾根に取付く。雪は一日の日照を受けたものの、まだふかふかしていて、所により膝までもぐる。コブの一つ下の小ピークまでもかなりの急登である。途中這い松が顔を出しているところもあるが大部分は胸がつかえるような雪の急斜面である。八時ピークに着きホツと一息入れる。扇澤側は數メートルの雪庇となつていたので、吾々は稍々手前の斜面に穴を掘つて腰を下ろす。このピークの下りは高さにして凡そ十米。急勾配の細いアレートが小さなコルに續いている。ここでアンザイレン。雪庇を蹴破るようにしてコルへ下る。ナイフリッジの上に軟雪のついたコルは、殆んど跨ぐようにしてすり渡る。

九時二十分、コブ下にて第一回目の晝食をとり、十時十分、甘利のリードにて東面よりコブに取付く。ザイル間隔は三十米で、吉田、佐薙の順に續く。先ず無雪期に通つたルートに従つて、左下部の雪のつまつたルンゼに入り、直ぐ主稜へ出ようと試みたが、雪つきの状態が悪いのでトップのみ一ピッチにて引き返す。そこでコブの主稜をなすりッジの右下部に沿つて約三十米雪上を進み、正面稍々右(扇澤側)に、草つきまじりに始まるルンゼ状にルートをとる。初めの岩に一本目のハーケンを打つも、ここでザイルは延びきつて尙足りない位なので、ミドルがザイルから離れ、二本目をつなぎ合わせて六十米とし、トップのみ尙、進む。草つきも急峻で凍りついているので、ピックをつきさし、アイゼンを喰い込ませての登攀。十五米にして草つきまじりは終り、殆んど垂直に近いクロアールの直下に至る。ハーケンを打ち、カラビナにザイルを通してこの乗越しに

かかる。頭上にハーケンが一本見える。そこまで登つて、又、これにビナをかける。雪はそれ程多くついていないが、ホールドに選ぶ要所々は堅く雪と氷がつまつていて、すべて外傾した浅いホールドを頼りにすり上る。傾斜も相當にきつい。尙も數歩すり上ると少々大きナリスに、一本のリング・ハーケンがしつかりと打ちこまれていた。これは直接利用しなかつたが、その稍々上に、尙一本打つ。すぐ右上には一つの岩の突起があり、その上が小さなテラスとなつてゐる。この最後の一ふんばりは、殆んど垂直の壁となつていて、ホールドは右左に遠く、力をかけるには、慎重なバランスを要求される。ザイルも六十米を引つぱつてゐるので、いささか重い。微妙なホールド、スタンスを何とかものにして、右手の突起の上の小テラスへ移る。扇澤側は眞すぐに切れ落ちていて、この突き出した岩の上に乗ると殆んど宙に浮いたような感じである。この六十米にトップが殆んど一時間を費した。このテラスで確保して、セカンドが登る。ザイルは、途中の結び目がカラビナに引つかかつてゐるので、ミドルは、アンザイレンしなのまま、動かないザイルを傳つて最初のカラビナまで進む。結び目を解いて再びザイルを結び、續いてラストもここまで来る。ルンゼ状は、トップの確保によつて、さして時間をとらずに登り切る。テラスには一人しか立てないので、後から登つて来るたびに場所をあげねばならなかつた。

ここから上は、傾斜はゆるやかとなり、主稜の扇澤側を、約四十センチの新雪を蹴散らしながら登る。左側は主稜をなす岩場の下部で、右側はすぐ切れ込んで扇澤へ落ちてゐる。一ピッチで、主稜へ出る。コブの上部は岩稜というよりも完全に雪のリッジとなつてゐる。ことに、二日まえの降雪が、まだ全然クラストせず、深々と、殆んど膝までもぐる状態であつた。これをわづか登つたところが第一峰（コブ）の頂上となつてゐる（一五時三〇分）。この頭から下降點までの約二ピッチは、左右共切つて落された、紙のような雪のナイフリッジとなつて居り、休んで居る間さえ、終止緊張を覺えるところである。扇澤側の雪庇を警戒し、ピッケルをつき刺しつつ慎重に進む。この緊張のさ中に、はるか上の方コブ尾根の頭にて、CI建設中のサポートパーティーから盛んに聲援がかかる。一足々々を漸く置けるぐらいの細い尾根上でしかも軟雪とあつてはピッケルによるビレーも殆んど利かず、一人が一方の側へ墜ちたら、他は反對側へとび込む以外、方法はないだろう。途中もつとも細い箇

所は、三人共雪稜に馬乗りになつて、すり渡つた。下降點は深く雪が被り、そのままでは適當なピンを見つけることが出來ず、約一米の雪を拂いのけて恰好の三角岩を掘り出し、これにザイルをかけて降りる。扇澤側に大きな雪庇を蹴破つて約二十五米のアプザイレン。十六時三十分、豫想外に時間を費したが、無事コブを通過し終り、ほつと一息。ここで第二回目の晝食をとる。干パンにソーセージを頬ばり、温かいミルクを入れてやつと生き返つた氣持になる。チョコレートのとろりとした味も少し疲れを忘れさせてくれる。十七時再び登行開始。もうアンザイレンの要はなく、只、雪の斜面の登りが続くだけである。すでに暮色迫り、第二峰を越してからしばらくガスに巻かれ、視界をうばわれる。雪はクラストが不完全で、終始膝までぼこぼこともぐる。傾斜も相當にあるので決して樂な登りとは言えない。夕闇とガスで、稜線までの距離は判然としないが、三人は、先頭を交代しながら尾根の頭へと近づく。突然、豫想しない近いところから「ヤッホー」がかかる。思わずそれに答えるのと、コブ尾根の頭はすぐそこだつた。石原、松尾に迎えられてCI(雪洞)に入る。ガスも次第に晴れて、きれいな星空に笠ヶ岳の輪郭がくつきりと浮んでいた。石原、松尾はすぐBCへ下る。

サポートパーティー——CI建設

五時四十分、石原、白川、松尾、山本、南の五名BC發。天狗のコルを経てコブ尾根の頭とジャンダルムのコルに至る。ここに雪洞三人用を建設し、CIとする。雪洞建設作業中、コブのナイフリッジにアタックパーティーの姿を見、互いに呼應する。約二時間の作業で雪洞建設を終り、三人五日分の食糧を置いて、白川、南、山本の三人は十七時三十分そこを出てBCへ下る。石原、松尾はアタックパーティーの到着まで雪洞に待ち、十九時五十分出發。BC歸着二十一時十分。尙、須山は足首の捻挫回復せず、ベースに滞在した。

三月二十四日 晴後曇一時風雪 奥穂登頂

◇ アタックパーティー

CI(九、五〇)——奥穂(一一、二〇)——CI(一三、一〇)



稜線上では夜明けが早い。七時に起床したが、出発まで手間どつてゐる間に、次第に高曇りとなつて來た。ジャンの右下をまき、ロバの耳にかかる頃から風雪となつて來たので、ロバの耳は飛驒側を低くまく。奥穂に至る馬の背は、ガスの爲かえつて廣い尾根を歩いているような感じである。奥穂頂上は猛風雪で視界は全然ない。四面ただ白一色。頂上の祠のエビのシッポをしゃぶつて、頂上に五分間滞在、往路をかけ戻る。ロバの耳の手前のコルにて、岩かげに風をよけ、ミルクのみ、辛うじて飲む。十三時十分CI歸着。風雪は夕方まで続き、約十センチの積雪を見た。日没頃漸く飛驒側から雲あがり、夕焼けとなる。

サポートパーティー

松尾、南の二人はCIへサポートに向う。六時五十分BC出發。朝のうちは晴れていたが、天狗のコルへ着く頃から次第に風雪となり、途中の標識用赤旗は、吹きとばされてしまつたものもあつた。天候状態が全く嶮惡になつて來たので途中でCI行きを断念して引き返す。十四時三十分BC歸着。他の四名はBCに滞在した。

三月二十五日 高曇り 西穂登頂

アタック・パーティー

CI(七、三〇)——ジャンダラム(七、四〇)——天狗のコル(九、二〇)——間の岳(一一、〇五)——西穂(一三、二五)BC(一四、二〇)

朝のうち一時快晴、風強し。七時半CIを出發。ジャンダラムに登り、後、西穂へ向う。天狗のコルにてCIへ向う石原、山本に逢う。アタックの豫定が順調に進んだので、この日のサポートは既に任務を、終了したわけである。そこで二人は、そのままCI經由奥穂へ向う。一方APは九時四十分天狗のコルを出發、豚のけつにて一寸ザイルを出したが、雪の状態も比較的よく、問題なく通過。間の岳は飛驒側の雪附きを登り、次のコルにて晝食をとる。風は相當に強く、不用意に雪を掻き立てようものなら、カンパンと雪とが一緒に口や目に入つて來る。チョコレートが實にふんだんにあつて、有難い。次のピークへの登りは飛驒側より、氷雪交りのルンゼ状態で、下りには、難澁するところであるが、今は登りなので別に問題ない。あとは、

西穂北峰の細い岩稜と、頂上直下の急な雪稜を攀じれば西穂頂上である。雲は高く、薄日がもれる程度だが、風は強い。遠く富士から白山まで、重疊たる山並みを視界のうちに、頂上に約三十分滞在。稜線を少し南へ下つて西穂澤へ入る。雪質を見定めてこれを一気に下つて、二十分後には岳澤BCへ着いていた。

サポートパーティー 奥穂登頂

石原、山本はCIへのサポートに向つたが、天狗のユルにてアタックパーティーに会い、サポートの任務は終つたが、あらためて奥穂へ向け、九時天狗のユルをあとにする。風の爲雪は締り、非常に歩きにくい。一時間半でCIに着く。悪天候のためアタックパーティーがロバの耳をまいたことを知り、これに二時間の行動豫定で向う。十一時CIを出て、すぐにジャンダルムへ登り、その頂上より右へ、ロバの耳との小ユルに下る。ロバの耳は夏道通りに約二十分で通過、雪のつきは絶好であつたが、風に目をたたかれ、やりにくかつた。奥穂の頂上で十五分休憩、十三時出發、往路をもどる。CIにてシュラフ二箇及びザイル一本を背負い、十六時三十分BC着。(石原)

雪洞は第一次アタックの二泊で沈下はげしく、特にうすかつた屋根は、多少危険が感じられるので、この日全員BC結集を機に、次の第二次アタックは雪洞を使用せず、BCよりラッシュにて行ふこととする。この日は四名がBCに滞在した。

三月二十六日 快晴 BCより前穂登頂

七時三十分、第三パーティーの須山、白川、南が前穂へ向う。須山は捻挫した足首が未だ自由にならず、奥明神澤を少し入つて引き返し、白川、南の二人となる。暖氣で雪も柔くなり、歩きにくい。十一時半前穂頂上。高曇りだが、遠く劔・立山がかすんで見える。二時すぎ頂上を辭し、雪崩に注意しつつ下る。三時半BC着。周囲の谷の雪崩のひびきは午後おそくまで止まなかつた。(南)

右の他は全員BCに滞在。

三月二十七日 曇後晴 第二次アタック、壘岩尾根登攀、奥穂、前穂登頂

BC(五、四〇)——疊岩尾根取付き(七、三〇)——疊岩の頭(一〇、〇〇)——CI(一〇、一五——四〇)——奥穂(一一、五〇)——ロバの耳(一二、四〇)——奥穂(一三、二〇)——前穂(一六、〇〇)——BC(一八、二〇)第二パーティー石原、松尾の二名は、第二次アタックとして、疊岩尾根をラッシュする。第一次アタック同様ユブ澤に入り、D澤上部より左へ小ルンゼをつめる。一箇所蒼氷にさえぎられたが、以後、雪は腐り、歩きにくい。石原は體やや不調。BCより一時間五十分にて尾根に出る。風は非常に強く、屢々進行を阻まれる。霞澤、乗鞍は雲にかくれ、西から東へ雲行きがはげしい。岩間にて軽い食事の後、後半に時間を残すべくピッチをあげる。風で雪は締り、アイゼンが快調に金屬音をあげる。BCより指呼される最初の岩峰は、偵察ルート通り、やや左に廻り込み、夏期のクロアールを雪に助けられて乗越す。次の約六米のギャップは傾斜の緩い疊岩からのし上つて來た雪の爲、全くその形を失い、一本の雪のリッジとなり、難なく通過。次の岩場も左のハング状に少し岩頭を見せるのみで、右方には薄く雪がついている。又々アイゼンをきかせて通過すれば、早くも疊岩の頭は目前となり、完全に兩名共拍子抜けの態。かくしてBCより四時間強で、主稜に出てしまった。間もなく一緒になつたサポート・パーティーに、奥穂より前穂への全計画を行うべく傳言し、十一時CIを出發する。

ロバの耳は夏道通り通過して十二時三十分奥穂頂上。この頃から天候悪化の兆が現れて來た爲、ロバの耳まで引き返したが、間もなく雲の切れ間から西方に青空の擴がりを發見、再度頂上に至り、そのまま右方に折れて前穂へ向う。時に十三時四十分。やがて、時折照る太陽は雪を腐らせ、涸澤側の雪庇を避けて、南西面を行く我々のアイゼンをたちまち團子とする。このため意外の時間を費し、十六時、前穂頂上を踏む。低い太陽と奥又側に立ちこめた霧は、我々兩名の姿を大きく中空に映し、又周圍に巨大な虹を掛ける。合宿最後の目標たる前穂頂上に於けるブロッケンの出現、これこそ自然が我々に與えてくれた祝福でなくして何であろう。歡喜してしみじみとした幸福感に約三十分浸つていた兩名は、暫く下降ルートと雪質を見定めた後、爽快な尻制動を適時用い、五十分後にはBCに歸りついていた。(石原)

吉田、甘利、山本の三名。六時五十分BCを出て天狗澤を登る。天狗のユルに着くと、相當な風で、西方は殆んど雲海。笠ヶ岳の頭と槍の穂先だけが辛うじて雲上に出ている。穂高のみ雲がない。十時十分CI着。雪洞に残っていた食糧で晝食をとる。十二時——十四時、ロバ、ジャンに遊ぶ。相變らず雲の足が早い。一時ガスが来る。十四時四十分雪洞をあとにしたが、氣温が異常に高く、天狗澤は雪崩の危険を考慮し、ユルに掘り残してあつた雪洞に入り、夕方まで待つ。天狗澤右岸、コブ澤下部には、今まで見られなかつた程大きなデブリが押し出していた。十八時四十分BC着。

三月二十八日 曇後雨 全員終日沈澱

十時頃より雨が降り出す。日中は氣温が高かつたが、夜に入り雪となつた。

三月二十九日 風雪 BC撤收

岳澤BC(一四、〇〇)——ホテル(一七、三〇)

天候は良くないが、十時頃から撤收準備にかかる。岳澤を下り出してから、風雪がかなり強くなる。荷は十〜十三貫で他にスキーがある。大部分のものはスキーをつけないで、ぼこり、ぼこりと雪の中に足をとられながら歩いて下る。ホテルでは久し振りの電灯の下で晚餐は盃をあげ、ハヤシライスに舌づつみを打つ。

三月三十日 快晴 上高地——坂卷温泉

快晴で穂高がすばらしい。午前中、梓川、河童橋附近を散策、夕方坂卷温泉へ下る。

三月三十一日 坂卷——松本——歸京。

(吉田義則)

### 三、器具報告

使用器具一覽表

	品名	数量	備考
露 営 用 具 類	天幕	2	ウィムパー型六人用及び七人用・ベース・キャンプ
	ツエルト	1	
	吹エカシス	1	雪洞入口用*
	アポマツク	4	
	カシユラフ	5	内雪洞用3枚
	シユラフ	10	
	スコップ	3	雪洞にて使用
	最高最低寒暖計	2	内雪洞用1箇
	ベニヤ板	1	
	象足	12	延半坪雪洞用*
	タワシ	2	
	エアマット	2	
	鋸鉋	1	修理具
炊 事 用 具 類 及 び 燃 料	鍋	1	
	蒸し器	1	石油罐改造
	コッフェル	4	雪洞に2箇
	ラジウス	4	〃
	石油コンロ	1	
	アルコールバー	2	雪洞用
	ナー		
	石油	9(升)	6升使用
	ガソリン	8(ガロン)	6ガロン使用
	ガソリン罐	6	3升入り
アルコール	1,250cc		
ローソク	20	1本20円	
登 攀 用 具 類 及 び 補 助 用 具	ザイル	5	30m
	ハンマー	1	
	アイスバイル	1	
	ハーケン	5	アイス用
		30	ロック用
	カライビナ	8	
	アイゼン	9	
	ピックル	9	
	スキー	9	
	ステルモス	9	
	5	3合入り2箇 5合入り3箇	
		*印註参照	

註、1、合宿の規模、活動人員等が適當であつた為、器具上ではとり立て重大問題は生じなかつた。

2、エア・マットは、空気入れを持参しなかつたので、毎夜、狭いテントの中で息を吹き込む仕事は容易でなかつた。

3、ベニヤ板は、雪洞床敷用として試用したのだが、かなりの効果があつた。一尺・一尺五寸方形十二枚の裏表に、防水の為ニス

(一) 準備食糧一覽表

四、食糧報告

塗つたが、これは安価なペンキにても同様の効果があるだろう。切り口には絶縁テープを貼つて湿気浸透を防ぎ、各シートは紐でつないで、これを拡げると半坪となるようにした。但し重いことが欠点で、相当大きな、又、長期滞在を必要とする雪洞の様な場合にも実用的であろう。実際吾々も、再度使用にも耐えそうなものを、その重量のために、撤収の際は捨てて来た。(松尾寛二)

	品名	数量(単位)	備考
主食	米 パン 乾パン 尾西ライス 餅	28升 240箇 5,000匁 140食 24升	コッペ
副食	ベーコン ソーセージ マーガリン スキム・ミルク ジャム チヤム 福神 佃卵 ワカメ 干物 フレーク マカロン ウドネ 玉ネギ ジン	2,500匁 70本 7ポンド 14袋 6箇 1ポンド 3箇 750匁 38箇 6把 24枚 5箇 1箱 4合 220箇 110箇 4本	(1袋 12人分) 罐詰 4種類 小 *
調味料	味卓 食醬 砂糖 味の 煮カ ハス 天婦 花か 胡椒	1,500匁 2瓶 2升 2,000匁 2箇 300匁 2箇 4箇 9箱 1箇 3袋 1瓶 0.5ポンド	大 小 小 1箇五人分 1箱六人分 2升入 * *
	ドロップ チョコレート 紅茶 緑茶 レモンパウダー オレンジパウダー ミカン	1箇 48枚 1箇 1袋 2瓶 1ヶ 1箱	1,200円 1枚20円  *印は不使用のもの

(二) 食事計画

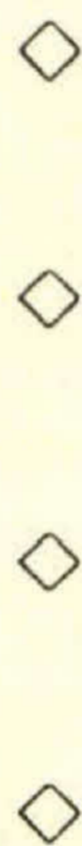
イ、入下山	ホテル滞在中	朝、晝、晩(すべて米飯)
	BCまでの行動日	晝食のみBCにおける行動日に同じ
ロ、BC生活	沈澱日	尾西ライスのみ
	行動日	朝、パン。晝、乾パン。晩、餅
ハ、C I生活 (三名八日予定)	行動日沈澱日共	BCにおける行動日に同じ

(三) 献立計画

イ、米飯の場合	朝	(イ)味噌汁、卵 (ロ)味噌汁。佃煮。
	晝	佃煮。干物。
	晩	(イ)カレー・ライス。 (ロ)ハヤシ・ライス。
ロ、尾西ライスの場合	朝	(イ)味噌汁。卵。 (ロ)味噌汁。佃煮。
	晝	雑炊
	晩	野菜煮
ハ、パンの場合	すべて朝食	
	(イ)スープ。マーガリン。ジャム。 (ロ)ミルク。ソーセージ。マーガリン。	
ニ、乾パンの場合	すべて晝食	
	ミルク。ソーセージ。マーガリン。チョコレート。	
ホ、餅の場合	すべて晩食	
雑煮		

(四) 反 省

主食については全般的に不足はなかつた。もとより初めの計画は十二名としてなされ、實際は九名となつたのだから、量の點で多すぎたものは多少あつた。しかし、主食に限らず、副食、調味料、嗜好品にいたるまで、よく變化に富み且つ量的にも十分用意されたことは成功であつた。強いて難を言えば、朝食のコッペパンが、ちよつと食べにくく、もう少し軽くのどを通るものであつて欲しかつた。献立計画そのものについては、テントでは普通米を全然使用しなかつた(尾西ライスのみ)がこれは、重量、炊事能率等の點で尾西ライスに劣るが、經費の面でははるかに安價なものであるから、冬山テントにおける米食について、もつと研究して見る必要があるように思われる。(佐薙 恭)



横尾、涸澤より

前 穂 高 北 尾 根

— 昭和三十年三月 —

一、ま え が き

前年三月、岳澤を下る我々の胸のうちには期せずして次の目標として前穂北尾根が大きく浮び上つていた。當初の計画としては横尾岩小屋附近にベースを置き、五・六のコルから北尾根を登り、奥穂・北穂を経て槍まで縦走するといふものであつた。これには前進キャンプを最低四ヶ所に設け人員も十四名程度必要とされる。この計画が北穂までに短縮されたことには種



々の理由があつたが、結局我々がこの合宿を行うに當つて考慮したことは、單にルートの難易ということのみでなく、寧ろ擴大された合宿規模に對して、我々の持ち得る人員、技術、器具等の諸要素を、どこまで適合させ得るかということであつた。事實、前年の春山に於ては只一つの前進キャンプを設けたにすぎず、又器具面の制約から必然的に要求される雪洞についても、我々にとつては未だ研究段階の初期にあつたと言ふべく、それをどの程度まで活用し得るかは未知數であつた。かくして十月末、新雪後の稜線偵察の後、C Iを五・六のコルに、C II（雪洞）を三・四のコルに設け、又穂高小屋のコルに同じく雪洞のC IIIを設け、アタック隊は北穂まで縦走するという計画が最終的に打ち出された。期間二十一日、人員十二名として月中旬に食糧、器具を合わせて約九十五貫を横尾山荘まで荷上げした。

先にも觸れた通り、今合宿に於てその主目的は、春山合宿體系の確立という面におかれ、その基礎となるべき技術面の總體的向上、大規模な登攀へ志向に於ての耐久力、順應力、又キャンプ地間のスムーズな連絡といつたいわば冬期登山の基本的要素の充實におかれた。従つて計画の初めに當つて、技術的に未熟な一年生についても、サポート隊としての登攀隊支援と並行して、尙十分な技術鍊成のチャンスが與えられるべく配慮された。その結果はいきおい純然たる極地法から離れた混合形式が採られることとなつた。これは前回の春山でも大いに効果を擧げたところであるし、今合宿の結果から見ても、技術的充實、多方面な經驗の蓄積、總體的部力の向上という緊急の要求に對しては有利な方法であつたと思われる。

合宿中の行動は以下に記される通りであるが、その間に於てアタック・パーティーの行動が計画通り遂行できなかつたという點で我々は一つの失敗を認めなければならぬ。しかしこれは時前の計画に缺陷があつたものと言われるべきで、そこでは、計画に當つて自己の實力の認識に缺くところがなかつたかを反省して見なければならぬ。縦走形式を考えた最初の計画が、實際には少くともアタック・パーティーの行動については極地法形式によつて奥穂登頂が行われたわけであるが、このかぎりには北尾根を我々のコースとして選んだのは不適當ではなかつたと思う。同一のルートにあつても、登攀形式の差異によつてその難易もちがつて來るのであるし、ある場合にはその登攀の可能不可能も、形式の選擇に任されることさえあり得

ることを考えれば、我々の合宿體系を確立するに當つて、その時々々の條件に於て如何なる形式を採つて行くかということについては、ますます大きな考慮が拂われて然るべきことであろう。併しある一つのケースが初めから規定されることは寧ろ危険である。今後數年、その時々々の當事者が、その時の構成諸要素に最適の合宿を行うとき、その一連の系列が當部の進むべき道を決定するであろう。

他にいくつかの問題點を挙げると、第一に當初から一つの課題とされたテント間のスムーズな連絡という面では十分とは言えなかつた。BC隊が何日もアタック隊の行動が擱めなかつたなど、途中で豫定の變更等があつたとは言いながら、反省を要する點であろう。寧ろ豫期しない事態の發生こそ、遲滞なく連絡の行われることを必要とするのであるから。

又一般にスキー技術は實用の域に達しないものが多くてあの涸澤の大雪面をぼこぼこ歩いて下ることが多かつた。勿論スキーは冬山に於て萬能の用具ではないが、條件の許す所ではその利用價值は大きい。特に今度の場合の様にBCから稜線までの距離が比較的長い所に於ては時間の短縮という點からだけでも非常に有効であり、體力の消耗度も少なくて済むことが多いだろう。スキー技術も、冬山技術の一つとして決して輕視すべきでないことを痛感した。

とり立てて見れば種々の問題を残してはいるが、我々はこの合宿を通じて得られた多大の成果を疑うものではない。我々はそこに成長しつつある喜びを感じることが出来る。それが積み上げられ更に深められて行くためにはなお絶えざる反省と努力が續けられねばならないであろう。(吉田義則)

## 二、編成及び行動記録

◇メンバー チーフリーダー吉田義則、甘利仁朗、佐藤恭、宮川次夫(會計)、山本健一郎(食糧)、中村保(器具)、柴崎新(記録)、上原利夫(医療)、市畑進(食糧)、茂木俊明、加地幸雄、特別参加Ⅱ石原脩、白川隆夫

◇パーティー編成、

第Iパーティー（アタック）  
 L 甘利、山本  
 第IIパーティー（稜線サポート）  
 L 佐薙、中村  
 第IIIパーティー（サポート）  
 CL 吉田、宮川、柴崎、市畑、上原、加地、茂木  
 行 動 記 録  
 三月十三日 新宿發

" 十四日 松本——中の湯

" 十五日 中の湯——徳澤

" 十六日 徳澤——横尾 BC建設

" 十七日 休養、停滯 後發メンバーBC入り、全員集結

" 十八日 停滯

" 十九日 CI 建設、第一、第二パーティー入る 北尾根ザイル工作

" 二十日 停滯

" 二十一日 停滯

" 二十二日 CII 雪洞建設、第一パーティー入る BCよりCIII 豫定地へ荷上げと奥穂登頂

" 二十三日 停滯

" 二十四日 停滯

" 二十五日 停滯

" 二十六日 CIIより出たアタックパーティー荷重のため三峰の登りに失敗 BCより奥穂登頂

" 二十七日 アタック・パーティー、豫定を變更してCIIより奥穂登頂 CII撤收 BCより奥穂登頂

〃 二十八日 フィックス・ザイルの撤収

〃 二十九日 CI撤収 BCより、CⅢ豫定地よりの荷下げと、穂高小屋を経て北穂登頂

〃 三十日 BC撤収 上高地泊

〃 三十一日 中の湯泊

四月一日 中の湯——松本

(イ) BC (附、入下山) 日誌

三月十三日 夜行準急にて新宿を發つ。

三月十四日 晴後曇

松本——島々——澤渡——中の湯

澤渡からトラックを期待したが生憎當てが外れて歩かされた。

三月十五日 曇後快晴

中の湯——上高地——德澤

釜トンの出口はいつもながら、大きなザックを出すのに苦勞する。ホテルにて晝食をとりスキーをはいて德澤まで早く着く。

三月十六日 快晴

德澤——横尾、BC建設

五時半、零下十度の寒さ。前穂、明神のすばらしいモルゲン・ロートから明け放たれたまぶしい梓川原をまつすぐ横尾山荘に至る。秋に荷上げしておいた九十貫近くの器具食糧のうち、乾パン五百匁、卵黄二百個分の罐詰、アイスハーケン三本等が無くなつていた。

正午から、BC豫定地の岩小屋まで、全員二往復して荷物を運び、岩小屋前に七人用ウィムパー天幕一つを張る。食糧、器具の大部分は岩小屋内に置き、真中にカマドを据えて、炊事場、食堂、又、全員結集の時は寝所として、これをフルに利用することとした。低いベースキャンプではあるが、水、焚木に事缺かないことは有難い。尙、甘利、加地の二人は、岩小屋から横尾本谷の登路偵察の爲、一本橋まで往復する。

三月十七日 快晴後曇

BC建設終り、後發メンバーの到着を待つて、行動の第二段階に進むべく、この一日を休養に充てる。但し、吉田、甘利、加地の三人は荷物を少々持つて横尾本谷を登り、一本橋の横にデポ。涸澤との出合よりもどる。デブリは屏風岩側から二つかなり大きいものが押し出していた。BCでは、午前中から盛んに雪崩の音を聞く。夕方後發の白川、佐薙、宮川の三人がBC入り。ここに全員勢揃いする。

三月十八日 雨後曇

北尾根五六のコルにCI建設を目ざし、二名のみを残して、四時半出發する。早朝から氣温が高く、雪も腐つていたが、案の定、出發後三十分で雨となつた爲引き返した。雨は午後三時頃まで降り續いたが、遅くなつて青空がのぞく。

三月十九日 快晴、CI建設

宮川、市畑、石原の三名をBCに残し、他全員はCI建設に向う。雪は初めから完全にクラストし、アイゼンのまま四時三十分出發。アタックの甘利、山本は北尾根の偵察とザイル工作の爲、輕装で先行する。

八時三十分、涸澤カールボーデンにて先行の二名はすでに見えず、ここにスキーをデポする。十時三十分五六のコルに到着。稍々五峰寄りに、入口を六峰側に向けて、五人用ウィムパー一張を張り、CIとする。すばらしい快晴で眺望を妨げるものは何もなく、設營を終つた後は、六峰へ登り、寧ろぼかぼかする位の春らしい陽氣の中にしばし浸る。第一・第二パーティの四人をここに残し、吉田以下六名は十六時半CI發、十九時十五分BC着。

三月二十日 曇後雨

宮川、市畑は、石原と共に、五時BCを出発したが、間もなく降雨。涸澤に入ると雪となつた。石原は涸澤底からスキーを飛ばして八時半BCへ歸る。CIへ向つた二人は、五六のユルへの登りの途中から、雪の状態悪く引き返す。ラジオによれば低氣壓が四國沖に停滞しているとのことで、一日中降り続く。天幕内での最高氣温は二十三度Cに上つた。

三月二十一日 雨

目覺時計の音も雨に消される。全員滞在。夕刻から雨があがり、屏風の頭には星が二つ三つ光る。

三月二十二日 晴後曇後雪

宮川、市畑の二人はCIサポート。吉田、柴崎、上原、加地、茂木の五名はCIII豫定地（穂高小屋前に雪洞豫定）へのサポートに向う。雪は全部クラストしてよくしまつてゐる。BCを四時四十分出發。ザイテングラードにかかると、北尾根五峰の頭と、四五のユルに四つの黒點が動いてゐる。CIIへ前進中の第一、第二パーティーの四人だ。十一時半、穂高小屋に着くと、天候も次第に崩れはじめ、そのうちに北尾根も、視界から去つてしまつた。CIII用の食糧、燃料、器具を小屋に置き、晝食をとる。小屋には立教の方が數名滞在。吉田、柴崎、上原は奥穂へ登る。西から、風も次第につのつて來たが、ガスは思つた程でなく、笠ヶ岳、槍、上高地等が、ガスに煙つて眺められた。小屋の眞上の岩場は、前日の雨の爲か、つららの様に氷が垂れ下り、ピッケルを振りまわさねばならなかつた。この間に、茂木、加地は、これもガスの涸澤岳に登る。十六時五十分小屋を出發、涸澤屈曲點ではすでに暗く、雪となつた。二十時三十分BC歸着。

宮川、市畑は、留守中のCIをサポートをなし、十九時BCへ歸つた。

石原、白川は卒業のため、この日上高地へ下つた。同じく卒業を控えて、上高地まで入つてゐた須山が、BCを訪れるも、全員行動中にて留守。激励の手紙とミカンの一山が、我々の爲に残されてあつた。稜線ではこの日CII建設、アタックの二名が入る。（CII日誌参照）

三月二十三日 雨後雪

降雨のため停滞。小雨も、林の下では大きな滴が、一日中天幕をたたく。

三月二十四日 雪後晴 停滞

午前中は雪が残る。屏風の周囲からは雪崩の音がさまざまにひびいて来る。午後、宮川他一名は森林帯上までシュプールをつけに行く。テントでは乾かし物に終始する。

三月二十五日 曇（稜線ガス）

天候芳しからず、行動を中止したが、午後一時、回復の兆が見えたので、體馴らしと、アタックパーティーの足（スキー）を運んでおくことを兼ねて全員、涸澤まで行く。稜線はガスに巻かれて居り、風が相當に強い。

三月二十六日 曇後快晴

吉田、市畑はCⅢ豫定地へ連絡の爲、茂木、加地はCⅠへ向け、五時BC出發。涸澤小屋は濃いガスの中だったが、次第にはれて快晴となる。ここで加地が、體の不調を訴え、止むなく單獨で引き返さす。残つた三名は、CⅠへ行くべきか、CⅢへ行くべきかを考えて、時間をとつたが、遅くとも今日は、アタック・パーティーのCⅢ入りが豫想されたので、CⅠ連絡をやめて、穂高小屋へ登る。ザイテン・グラードは、先日とはうつつ變つて膝までのラッセル。十二時三十分、穂高小屋へ着いたが、先日の荷物はそのまま。アタック・パーティーは未着とわかつた。直ちに奥穂へ登る。吊尾根を望見するも人影は見當らない。三、四のユルに二つの黒點が動いているのは、その時刻より判断して、CⅠよりの第二パーティーであることがほぼ確實であつた。アタック・パーティーの奥穂登頂の氣配なきまま、十六時穂高小屋發、涸澤小屋からスキーをつけ、十八時BCへ歸る。十五センチの新雪も、終日の日照で落ちついた様だが、小さな雪崩が數ヶ所に見られた。

三月二十七日 快晴

アタック・パーティーの行動が腑に落ちないまま、今日は是が非でも連絡をつけるべく、CⅠへ吉田、加地、穂高小屋へ宮

川、柴崎が出る。四時十分BCを出發。ザイテン・グラードは既にバケツが階段狀に掘られており、九時半、早くも穂高小屋に到着。アタック・パーティーは未着。直ちに奥穂へ登る。前穂頂上に見える三つの人影は、その數から見て連中とはちがうようだ。既に大阪市大のテントが五六のコルまで進んでいることから當然豫想されることではあつたが、ここに至つて尙、わがアタック・パーティーの行動が掴めないことは、非常に齒がゆいことであつた。幸い天候も絶好なので、頂上に約二時間滞在した。萬一の場合も懸念されたが、とにかくCIよりは何らかの情報が得られたことと思ひ、十三時二十分頂上を辭す。

一方アタック・パーティーは、この頃、吊尾根を奥穂へ向つており、三十分後には頂上に立つていたのであつた。あくまで間が悪かつたと言へばそれまでであるが。

五六のコルへ向つた吉田、加地は、コルへ着くまえに、五峰を登つて行く第二パーティーの二人を見かけ、手で合圖を送る。上の二人は、そのまま、五峰の上に消える。十時CIに着き、連絡紙を見る。「A・Pは昨日三峰の登りで重荷の爲、引き返し、止むなく豫定を變更して、今日輕装にて奥穂登頂。北尾根をCIまで引き返す豫定」とあつた。稜線ではこの行動に従ひ、奥穂登頂と、CIIの撤收を行つたが、BCからの二人は、連中のCI歸着を待たず、テント周圍の除雪その他の所用をなして下る。涸澤カールボーデンにて奥穂より下つて來た二人と一緒にになり、十八時BC歸着。

三月二十八日 みぞれ、雪

宮川、上原がCIへ。市畑、茂木が、CIII豫定地の荷下しに出發。下では、小雨程度だつたが、涸澤へ入ると夜來の雪に、ラッセルを強いられ、濃いガスの中を涸澤小屋に着く。このあたりで、益々ラッセルは深くなり見通しがきかなくなる。宮川らはここから約四時間かかつて、半ば雪だるまの恰好で十一時半CI到着。第二パーティーの二人は、四峰のフィックス・ザイルを外しに出かける。あとに残つた。甘利、山本には、九日ぶりの再會であつたが甘利は雪盲にかかつていてサングラス、ゴグルの重疊たる被覆をまといつて物々しく、山本は、吊尾根のスリップであちこちに赤い痣を作つていたが、すこぶる元氣。

上原はCIに残り、宮川と山本はガスの中をBCへ下る。



一方、穂高小屋に向わんとした二人は、涸澤小屋より、ガスとラッセルで、ザイテンの取付に至らずして小屋へ引き返し、CIより下る二名と共にBCへ歸る。この日は五峰下部、三・四のコル下、横尾本谷屏風岩側等に雪崩が出たが、北穂東面から、涸澤と本谷の出合へ押し出したものは、非常に大きなものであつた。翌日の登行は、約三百米に亘つて、巨大なデブリの爲、スキーを脱がなければならなかつた。

三月二十九日 快晴 CI撤收

佐渡ヶ島附近の低氣壓が降らせた昨夜の雨、雪も止み、早朝は曇つたが、日が出るに従い快晴となる。BCからは、吉田、柴崎が、穂高小屋へ向う。CⅢ豫定地の荷下げとて、きわめて少量なので、快晴を利用し、豫定變更によつて、トレースし残された奥穂から北穂をラッシュすることにする。五時BC出發。十時穂高小屋到着。荷下げ品の整理をなし晝食。十一時三十分、北穂へ向け出發。涸澤岳の下り口は風下の軟雪でスタンスが崩れて消耗する。鎖場の下トラバースは腰までもぐる。涸澤槍の下りも、ルートは判然としていないので、なるべく雪つきの部分をえらんでコルへ下る。十四時三十分涸澤のコル。北穂への登りは、ずつとリッジ通し、又は涸澤側を、南峰に到る。丁度五・六のコルから、四つの人影が動き出して、涸澤へ下り始めた。愈々、今日は全員BCへ集るわけだ。少し瀧谷側をまいて、第二尾根上部へ降りて、北峰とのコルへ出、十六時三十分北穂頂上に立つ。この日は終日快晴でもちこたえた。ブレイカブルで歩きにくい北穂澤を下る。下部は尻制動で飛ばして四十分で涸澤底。スキーをつけて忽ち、CI撤收の連中に追いつく。本谷への出合附近では、共々デブリのため手間どつた。吉田は先行して十八時三十分他は二十時BC歸着。

三月三十日 晴 BC撤收

横尾——上高地

三月三十一日 上高地——中の湯

四月一日 中の湯——松本 翌日歸京(柴崎 新)

第二(北尾根サポート)パーティーの記録

三月十九日 快晴 C I 建設

アタックパーティーと共に北尾根五六のホルのC Iに入る。BC發(四、三〇)——五六のホル着(一〇、二〇)

三月二十日 雪のち雨 停滞

三月二十一日 雨 停滞

昨年の春山同様、テントの底に水がたまり池が出来た。底を切つて除水する。

三月二十二日 晴のち小雪 C II 建設

先行のアタックパーティーのつけたフィックスを頼りに三四のホルまで器具・食糧をボッカする。C I 發(七、三〇)——四五のホル(九、〇〇)——九、三〇)——三四のホル(一三、二〇)——C I 着(一五、〇〇)

三月二十三日 雪 停滞

三月二十四日 雪 一時晴れる。沈澱

どか雪のため涸澤側バンブー折損。スコップが小さいので除雪に苦勞する。

三月二十五日 風雪 停滞

三月二十六日 曇のち晴

曉方は依然として激しい風雪であつた。しかしアタックの食糧不足が氣づかわれるので、若干の食糧を持ち出發する。五峰頂上附近を登る頃から天候は回復し、C II に着いた時には素晴らしい快晴となつた。三峰登高中のアタックパーティーを激励しつつ、午後豫定通り残余の器具の荷下げ(C II 撤收)、及びフィックスを外しにかかる。四五のホル間近まで下つた頃、上から連絡あり、四峰中間で落合つたところ、止むをえざる計画變更の知らせを受く。そのため、荷下げ、フィックスの撤收を中

止して、C Iに戻る。この日大阪市大が五六のユルに設営。C I發(八、三〇)——C I歸着(一八、三〇)

三月二十七日 晴 C II撤收

三たびC IIに至りアタック・パーティーの歸りを待つ。アタックが三峰上に現れたのを見てから一足先に撤收、下山にかかる。時すでに薄暮であつた。ライトを頼りに慎重に四峰五峰を下りテントに歸る。奥穂の上に残月がゆがんでいた。約四十分おくれてアタックもC Iに歸る。C I發(九、〇〇)——C II(一〇、三〇)——(一八、〇〇)——C I着(二〇、〇〇)

三月二十八日 風雪

十時頃BCから宮川、上原がラッセルで雪だるまになつて上つて來た。天候は荒れてはいるが豫定の日數も切迫しているので、フィックスの撤收に向う。昨日までの雪面に新雪が全然なじまず、積雪状態が極度に不安定なので五峰途中よりアンザイレンして慎重に上る。五峰頂上附近は腰までもぐるラッセルが続いた。出發がおそく、また風雪で仕事はかどらず、遂に最上部の細引約五十米は残念ながら捨ててくる。下りは五峰頂上でライトをつける。この日山本は宮川と共に下山、上原はC Iに残る。ラッセルと濕雪のため體はびつしよりぬれたが、ガソリン不足のため十分に乾燥出來ず沈痛な面持でシュラフにもぐる。C I發(一二、三〇)——C I歸着(二〇、三〇)

三月二十九日 晴

昨日の風雪とは打つて變つた、素晴らしい快晴となる。午前中半分埋りかけたテントの發掘、ぬれ物の乾燥をなす。午後雪の締りはじめた頃下山を開始、十日間住み慣れた五六のユルを後にする。C I發(一五、〇〇)——BC着(一九、五〇)(佐薙恭)

(ハ) C II 日誌

第一(アタック)パーティーの記録

三月十九日 晴

BC(四、三〇)——五六のユル(九、〇〇)——四峰ザイル工作(一〇、〇〇)——一六、〇〇)

全員一緒に出発したが、吾々二人はザイル工作の爲、先行する。昨日は上の方まで雨だつたらしく、五六への登りもパリパりに凍つている。五峰は、最初涸澤側をトラバース氣味に登り、後は大體リッジ通しをゆく。四五のホルへの下りは問題ない。五峰頂上から、ゆつくり四峰を觀察する。見れば見る程大きく感ずるこの岩塊は、正面壁を黒々と露出させて、吾々を偉壓するかのような。四峰最下部は約二十米の雪面をステップカットし、アンザイレんで登る。その上の岩場まじりの所に先ず十二ミリ・ザイル三十米一本を固定する。更に、傾斜四十五度をこえるリッジを二ピッチ直上し、上部はハング氣味の岩が、そそり立つ地點へ来る。これより左へ三十米のトラバースに、補助綱（八ミリ）のフィックスをつける。もう、五峰より高い位置である。巻雲が次第に廣がる氣配を見せ、ここで時刻は二時をまわつていた。一應目的を達したので、そこから引き返す。五六のホルへ歸ると、BC隊は、吾々と第二パーティーを残して、下るところであつた。

三月二十日 終日風雪 停滞 夜半から雨に變ず

三月二十一日 雨

氣温高く、五六のホルも存分雨に見舞われる。周圍に雪崩の音しきり。天幕内は浸水で、あわてる。

三月二十二日 曇後小雪、ガス CII建設

CI(七、三〇)——三四のホル(一三、〇〇)——雪洞構築(一三、三〇——一五、四五)

どうやら晴れている。午前中ぐらゐは持つだろうと、支度をして出發。吾々二人は、引き続き四峰のザイル工作のため、先發する。幾分かラッセルがあり、五峰を越えるのに、一時間二十五分を費し、荷を背負つた佐藤、中村に追いつかれてしまふ。四峰は先日のザイル工作の時より、雪の状態は良くなつていたが、取り付きの雪面には念の爲ステップを切り、埋もれたフィックス・ザイルを掘り出して登る。最初のフィックスの上のリッジは、雪が硬く、又トラバースの部分の八ミリザイルは埋まつていない。このあたりも、雪量が増えてかえつて状態がよくなつている。次のピッチまで快調に進む。少し左上方に進むと、急な雪の壁状となつている。遠くから見るとレンゼ状に見えるが、實際登つて見るとフェイス同然で四十度以上の傾斜

がある。その上は岩が露出して、約三米のフニース。この壁にハーケンを打ち込んで、八ミリ・ザイル三十米を、ダブルにして下して見たが少し足りない。ここから右へトラバースして、涸澤の見えるリッジへ出る。

これからは、更にフィックス三十米、四十米各一本をつけ、比較的易しい岩場を登る。最後はやや涸澤側を巻き気味に、四峰頂上へ出る。天気は次第に悪化して来て、うっすらとガスがかかった上に、雪がちらつき出す。四峰から三四のユルまでは、平凡な下り。サポートの二人は荷物を置き、直ちにC Iへ引き返す。

C II 豫定地の三・四のユルは、雪も豊富であり雪洞を作るには好条件だった。スコップ一ヶ、二人のアルバイトで二時間十分を費して完成する。(後述「雪洞について」参照) ラジウスの唸りも心地よく、きらきら光る雪壁の殿堂で、今までのうちで一番すばらしい夕食をとる。

三月二十三日 風雨停滞

晝頃、一時雨となる。約五十センチの新雪を見る。

三月二十四日 雪

午前中は殆んど無風で、雪が音もなく降り続く。気温が非常に高く、雨になることさえ懸念された。午後、ガスの晴れ間を見て、三峰下部を偵察。チムニーまで、登路の見通しをつけ、下部に八ミリを一本フィックスする。この作業中に、一時、完全に晴れあがり、視界がよくきいて、立山、鹿島鎗、薬師、富士、南アの山々まで一望されたが、夕刻には再び雲を増し、巻雲がやがて巻層雲に變じ、次第に星を覆いかくしてしまふ。荘嚴な落日が西穂とジャンの間へ。

三月二十五日 風雪停滞

朝より軽微なあらし。食糧管理を嚴重にし、二食を守る。降雪多く、六時、十時、午後二時、六時と規則正しく四時間毎に除雪作業を行う。四時間で入口は殆んど完全に埋没する状態であつた。

三月二十六日 晴

「入口が埋つた。窒息するぞ！」という甘利の聲に呼び起される。丁度四時。よく息がつまりずらに寝て居たものだ。入口は完全になくなつていて、ピッケルを一杯にさしても外へ通じない。身體ごと頭から粉雪に突入して、もがきにもがいて、腕をのばし、ピッケルを刺したら、やつと外が見えた。入口は三米も埋つていた。すなわち、吾々の居室は、初めより三米も奥まつたところになつてしまつたわけである。外の積雪は、この三、四日で一米は多くなつてゐる。昨夜は、強風で氣温も低かつたので余りよく眠れなかつたが、幾分かずつ、天氣も回復しつつあるので、少し遅くなつたが仕度をなし、九時三十分出發。すでに白一色の涸澤を、BC隊の數名がザイテンにかかるのが見受けられた。我々は當初の豫定通り、CIIから、個人裝備一式、炊事用具及び豫備食糧その他を持つて、穂高小屋前のCIII（雪洞）豫定地へ向う。その爲、意外にも荷は兩人共六貫を越した。コルから十米登つたところで、アンザイレン。夏道の嫌なトラバースの所が悪く、その右のクラックにハーケンを連打して、雪稜に出る。CIよりのサポートが四峰上に現われ、聲援を送つてよこす。何よりも重荷が、思うような進行を阻む。チムニーまでの經過は、先ずアンザイレンした地點から五メートル直上。それから左方へ、約七米の嫌なトラバースの後、右上方に、ハング氣味の岩場を越し、クラックへ入り、ハーケン八本を使用して三十米一杯登り切ると、チムニーの見える雪のリニヂに出る。トップのザックを釣り上げ、ラストは背負つたまま登る。

次の一ピッチはスラブ状の岩に雪がふわりと被り、悪い。右のチムニーまで雪面通しに行く。チムニーは簡單。チムニー上に出て、涸澤側へまわると、風は強く日蔭となり、又、動作が遅々としているので、足の感覺は殆んどない。尙、涸澤側を、三峰フェイス上部に沿つてトラバースを續けんとするも、時既に十四時三十分となり、一旦引き返しと決する。

この頃CIIは、CI隊の二人によつて、撤收準備がなされ、アタックがCIIへ戻つたときは、フィックス・ザイルを外しながら、四峰を降りつつあつた。四峰頂上より彼らを呼びとめ、食糧補給の打合わせ、フィックスのつけ直し等をし豫定變更して、明日輕装にて奥穂をアタック、CIまで引き返すということに決する。雪洞内に再び落ちついたのは十八時であつた。

三月二十七日 晴後雪 CIIより奥穂登頂

C II (八、〇〇) — 前穂 (一一、一五) — 奥穂 (一三、五〇) — 前穂 (一六、三〇) — C II (一八、〇〇) —  
C I (二〇、三〇)

今日はから身のため、チムニー上までは問題なし。それより三峰フニース上部を尖岩へ向つてトラバースニピッチにて、奥穂からよく見える雪面に出る。この雪面は左寄りにトラバース気味にリッジへ出る。これより簡単に三峰上に立つ。二峰も問題なく、所々コンティニューアスにて進み、前穂頂上に立つ。吊尾根は雪庇も小さく、時々ガスが巻いて来るもルートに問題はなし。奥穂頂上にて十分滞在、早々に歸路につく。途中、吊尾根最低鞍部から二つばかり奥穂よりのピークの下りにさしかかつた時、ラストを歩いていた山本が、ウィンド・クラストした急雪面で岳澤側へ放り出され、急な岩場と雪つきを縫つて約四十米、三回ほどバウンドして、下の雪のつまつたルンゼまで滑落。幸いにもさしたる事なく、とにかく歩行可能。三峰は、三十米、三回のアップザイレンにて、十八時丁度三四のコルに着く。C I パーティーは、吾々の三峰下降を確認するや、C II の荷物をまとめて一足先にC I へ向つて下り始める。ザイルを巻く間に、あたりは既に暗くなり、ヘッドランプを頼りに四峰を下る。暗い爲、下がよく見えす却つて高度感なく、五峰など、いとも簡単に下る。この頃より雪が舞い始めていたが、五六のコルの大阪市大のテントから、五峰上まで、ラジオが聞えて来るのは、ちよつと變な感じだつた。テントに入つてから、甘利が雪盲にかかつたらしいと訴える。

三月二十八日 ガス、風雪 氣温高し

十一時すぎBCより、宮川、上原の二人が連絡に上つて来る。昨日來の風雪止まず、五六のコルからの下りもある程度不安もあつたが、雪の状態を見て、宮川、山本の二人が下へ下る。上原はC I に留まり、山本に代つて明日の撤收を手傳うこととする。宮川、山本は、涸澤小屋にて、市畑、茂木と會い、雪崩を警戒しながら下る。氣温は異常に高く、途中からは雨に變じ消耗する。山本は足と腰の傷が痛んで、輪かんはつらいので、一人スキーで下る。午後五時までに全員BCに歸着。(山本健

## 附、雪洞について

當初のキャンプ計画をもう一度ふり返つてみよう。先ずBCは横尾岩小屋前に七人用ウイムパー一張。これを岩小屋と併用してベースとする。CIは五・六のユルに五人用ウイムパー一張。ここには、最大四名、常時二名が滞在。CIIは三・四のユルに雪洞。これはアタック・パーティーの二人のみが使用するもので當然二人用。このCII雪洞は、アタック・パーティーのCIII前進によつて不要となる。(當初の計画ではCIIまでは極地法に準じて進み、CIIIは側面サポートとし、結局アタック・パーティーとは縦走パーティーに外ならない)。不要となつたCIIの撤収はCIパーティーが行い、續いてCIを撤収してその任を終る。一方CIII豫定地の穂高小屋には、北穂を登頂してBC歸還までの食糧、燃料、器具等のサポートが行われ、アタック・パーティーの到着と同時に雪洞二人用を構築することになつていた。

右の様にキャンプとしては、天幕、雪洞を各二ヶ所とし、且つ、最前進の二つを雪洞とするという點に於て、我々はこの研究に大きな比重をおき、成果を期待したのであつたが、前述のごとく豫定の變更があり、CIIIは設けられることなく終つてしまつたので、我々の春山における前進キャンプとしての雪洞の利用という課題は尙今後に俟たれることとなつた。

以下、CII雪洞に關する若干のメモを書き留めておく。

① 雪洞の位置と入口の埋没 — 雪洞の位置が、三峰側へ寄りすぎた爲、三峰急斜面から落ちて來る雪がみな、雪洞入口にさらさらと積り、降雪、風と相俟つて、四時間で完全に埋まるということがあつた。二十七日までに入口廊下は五米以上の長さに達した。

② 廊下は大きすぎ、又、長すぎた。

③ 居室も二人用としては、もつと小さくて十分であつた。三日の停滞があつたにも拘らず、居住性は概ね良好であつた。

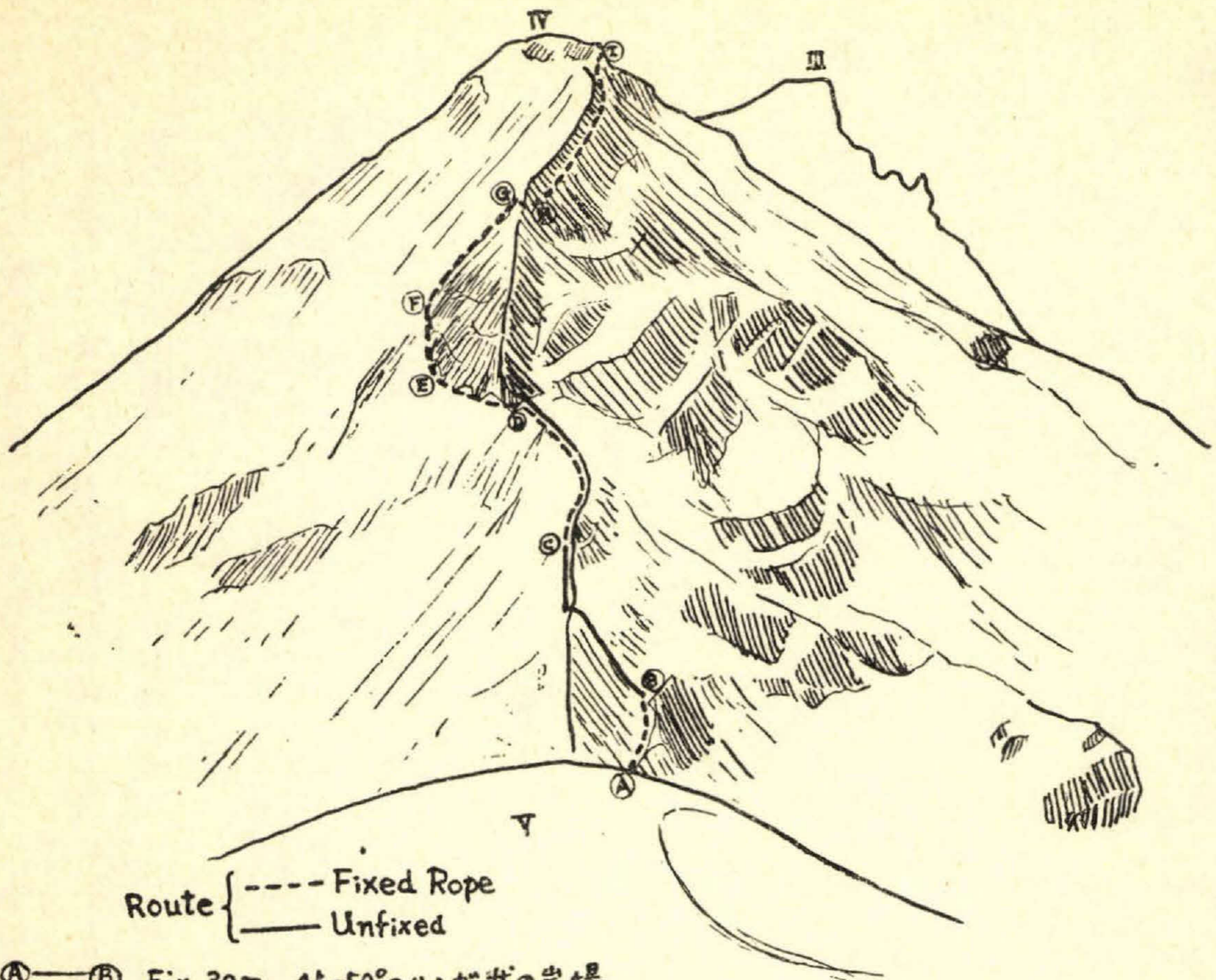
④ シートとしては、一番下に大きなビニール、その上にカボックを敷いたが好結果であつた。

⑤ 雪洞内では乾しものが困難であることに鑑みて、雪洞構築作業中における、手袋、膝頭等の防濡に考慮を拂う必要を痛



感じた。雪洞を作る際の長時間の作業にては、中腰はつらく、どうしても膝をつく様になる。實際、我々もオーバーブ  
ンを通して下までビシヨ濡れになり閉口した。これは尻敷を膝へ巻くとか何か工夫する必要がある。一旦濡れてから乾か  
すことは非常に困難である。(山本健一郎)

北尾根四峰東面



Route { --- Fixed Rope  
 — Unfixed

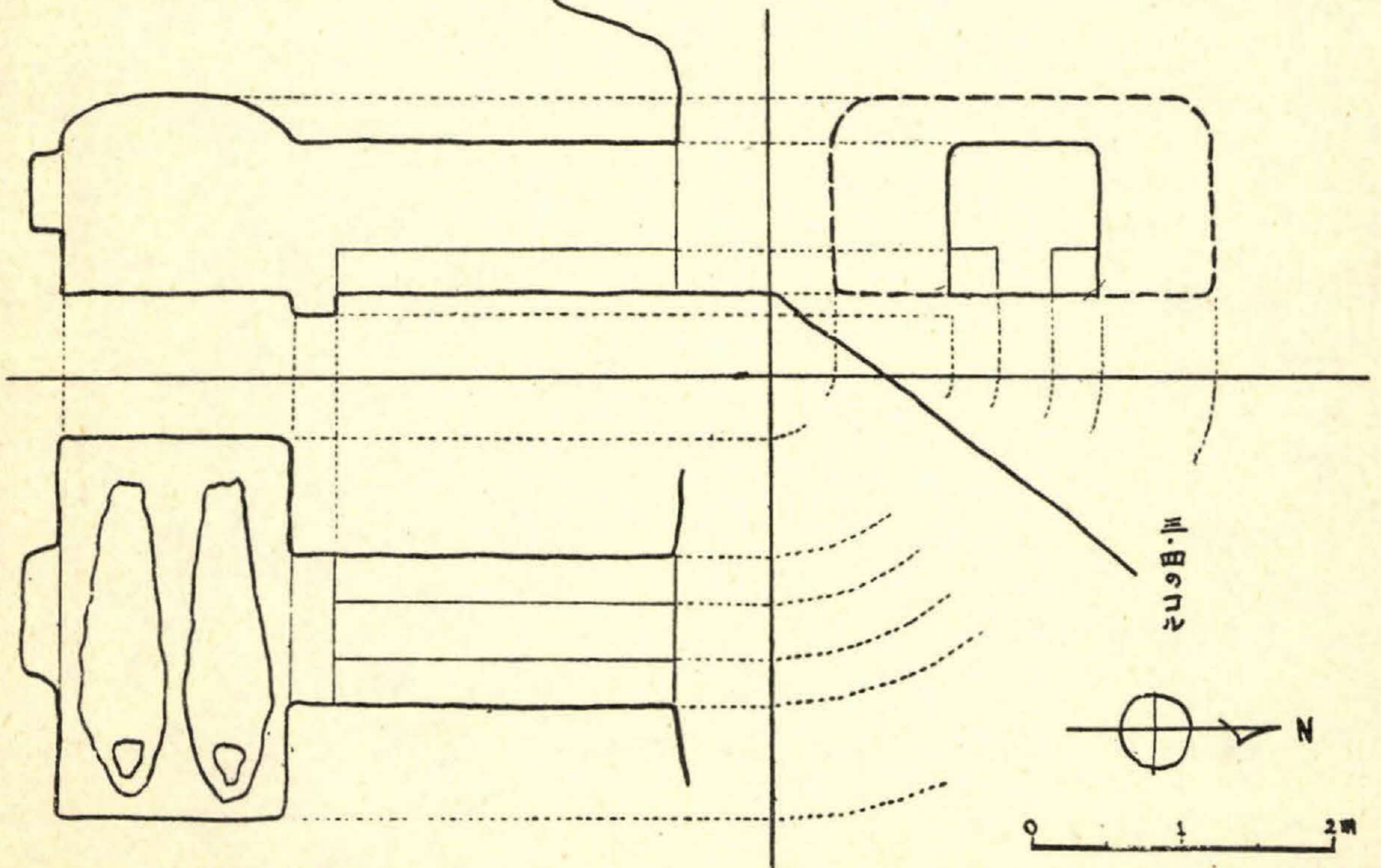
- ①—② Fix 30m 45-50°のルンゼ状の岩場
- ②—③ 涸沢側からスノーリッジへ 30°
- ③—④ 岩場まじり 35° 8ミルザイル50m
- ④—⑤ トラバース 20m 岩の基部のスノーバンド
- ⑤—⑥ ルンゼ状 50° 約10m

- ⑦—⑧ 40°の雪壁 20m
- ⑧—⑨ ハンクを右にさける 5m
- ⑨—⑩ Fix 30+40m 雪と岩のコンビ
- ネーション リッジ越し涸沢側 40°

三峰

雪洞 (C II)

北尾根三・四のコール  
 1955.3.22 — 27



器具一覽表

三、器具報告

	品名	摘要	BC.	CI	A.P.	計
露 營 用 具 類	ウィムパー天幕A	7人用	1			1
	ウィムパー天幕B	5人用		1		1
	夏用天幕	使用しなかつた	1			1
	フライ	岩小屋の外被に使用した	1			1
	ツェルト				1	1
	グランド・シート		1	1		2
	マツト	放出マツト			2	2
	エア・マツト			3		3
	カポック		4			5
	鋸	他に紛失せるもの一箇あり	1	1		1
	鉋	〃	1			1
雪洞用吹流し				1	1	
スコップ		1	1	1	3	
登 攀 用 具 類	ザイル 40m	麻 12 ミリ	1			} 3
	〃 30m			1	1	
	Fix ザイル 40m	麻 12 ミリ		1		} 4
	〃 30m			1		
	〃 20m			2		
	Fix 細引 計120m	麻 8 ミリ				120m
	捨 繩	1.2m の長さのもの20本				20m
	カラビナ	うち他より借用せるもの3箇		9	6	15
	R. ハーケン					35
	I. ハーケン					3
ハンマー			1	1	2	
アイス・バイル				1	1	
スキー修理具		1式				
炊 事 用	ラジウス			2	1	3
	石油コンロ		1			
	バーナー			1	2	3
	コップホル		1	1	2	4
	鍋	大2 小1	3			3
バケツ	布バケツ	1			1	

註 ①次の荷上げ以来、横尾山荘に置き、紛失していたものうち、器具については左の通り。

スコップ 一

	品名	摘要	BC	CI	A.P.	計	
具類	ジヤモジ		2	1	1	4	
	杓子		2			2	
	ジウゴ		1			1	
	庖丁		1	1	1	3	
	テルモス		2	1	1	4	
燃料	石ガソリン		10升			10升	
	アルコー 炭	大瓶2 小瓶2 4貫匁俵1. BCに	5	8升 1(大) 5	9升 1(大) 2(小) 10	17升 20	
その他の生活用具	寒ラ針	暖ジ金	計オ釘	最高・最低 BCにおいた為不調 若干	1	1	2
	ワゴ目	セム覚	リノ時計	エアマツト修理用	1		1
	ロガ象	ーソリン	ソク空罐	一本20円	20	12	8
	ブ煙	ラック	テープ	若干	1	1	1
	タ	ワ	シ	BC用として持参 せるも使用せず	1		
					2	1	1
							2ポンド
							1罐
							3
							40

② スコップはBCに大きいのを置いた。ほかは、稜線では各キャブに小スコップ一つずつで、雪洞構築、テントの除雪等に不便を来した。一旦ドカ雪が来たら、玩具のようなスコップでは役に立たない。

③ ラジオはどこに置くべきか迷ったが結局BCに置いた。しかし、BCの場所が谷あいであつた為、昼間は殆んど受信できず、夜間何とか聞きとれる程度であつた。受信する位置の条件を考えるべきである。

④ 岩小屋では薪を豊富に利用することが出来た。その為、石油コンロは、火つけ用、又は炭おこしに使用した程度で、石油の消費量は少量で済んだ。横尾山荘から拜借した鉄製の薪用かまどは、大いにその偉力を發揮した。その為、石油罐改造によるカマドと煙突の工作はやらすに済んだ。岩小屋内での焚火は、テント内のストーブと異り、全然煙が巻かないので、非常に楽に炊事ができた。

⑤ ラジウスはCI(スターマックス)CII(スヅニア)共に調子よく全然故障が起らなかった。もう一つの予備は穂高小屋へ上げたり又、CIへ持つて行つたり、又下したり、行き場のない恰好だつたが、これは、故障のあつた場合直ちに振り換えられるよう初めから、CIに具え置くのがよかつたと思う。(中村 保)

四、食糧報告

(一) 準備食糧一覽表

	品名	数量 単位)	備考
主食	米	78升	
	乾パン 尾西米及び澱粉	105食	
副食	小麦粉	500匁	
	小麦カメ	20把	
	玉葱	8貫	
	馬鈴薯	12〃	
	マーガリン	7.5ポンド	
	マフラー	5罐	
	牛肉煮漬	3貫	ベーコンをふくむ
	牛佃煮	1〃	
	福神漬	3罐	
	ソーゼン	50本	(要84本)
調味料	味噌	2貫	
	砂糖	2〃	
	食塩	3瓶	大瓶
	醤油	2升	
	胡椒	2瓶	小型
	味の素	〃	〃
	酒粕	200匁	6人分 5箇 10人分 8箇
その他	スープの素	120食	
	レモンパウダー	2瓶	大瓶
	ドロップ	1罐	大罐
	ミカンの	80箇	(要 160箇)
	花カツヲ	2箱	
	カレー粉		適量
	ハヤシの素		
食油			
スキムミルク			

(二) 献立計画

朝食	(イ) 米飯。味噌汁。佃煮。(BC) (ロ) 尾西米。味噌汁。佃煮。(AC)	
晝食	乾パン (三種適宜配分) マーガリン又はジャム ソーセイヂ (半個) レモン・パウダー又はスキムミルク ミカン (一個)	AC及びBC 同 献立
晩食	(イ) 米飯によるカレーライス、又はハヤシライス。(BC) (ロ) α澱粉(即席餅)と、スープ。(AC)	
特別食	ドロップ (一人、一日、十個位) 乾パン、ジャム	

(三) 燃料

燃料用石油を石油コンコ (家庭用) と共に持参したが、横尾小屋よりかまどを拜借して岩小屋に具えつけ、あたりに薪が十分あつたため、石油コンコは、食事用として余り使用しなかつた。

木炭も四貫匁持参したが、これもかまどと併用して、良い結果が得られた。

(四) 反省

先ず主食については、試験的に使用してみた即席餅があまり評判がよくない。程よい量の水と、十分にねられた場合には非常に口あたりがよいといわれても、テント生活では、あまり手間のかかるものは歓迎されないのは當然である。不十分な

練りだと粉くさいにおいがし、少々鼻についた。これに反し、前から使っている尾西ライスは益々その真價が認められた。副食と調味料に於てはAC（前進キャンプ）では大體良好だったが、BCでは貧弱であつた。BC隊のアルバイトが比較的に大きかつた本合宿等では十分考えられねばならなかつたと思う。嗜好品は一般に不足勝ちで、食糧計画全體にバライエテイが欲しかつた。（市 畑 進）

### 寫眞說明

雪洞へ入つて二日目、前夜の雨が風雪に變り、やつと二時半頃雲が切れたのでそれつと外へ飛び出した。

夕陽に輝く北穂と槍を一・二枚寫すと又ガスが出て視界を遮切つてしまつた。明日は晴れるぞと喜んだのも束の間又夜半より激しい風雪になりがつかりさせられた。（一九五五、三、二三）



# 『十號』以後の歩み

——一九三九—一九五二——

## 目次

序……………	大塚 武…五五
——一橋山岳部というもの——	
昭和十四—十五年…	山田亮 三…五七
昭和十六—十七年…	小林茂雄…五九
昭和十八—二十一年…	石井左右平…六二
昭和二十一—二十七年…	小泉 三好…六四

『針葉樹』十號が出されたのは昭和十四年のことであつた。それ以後の十五年という長い、そして變轉極りなきこの時代を通して、一橋山岳部は何を目途として、如何に歩んで來たか。この間の詳細を伝える『針葉樹』を持つ機會のなかつたことは残念であるが、ここでは十號との繋ぎの意味も兼ねて、この時代の各ジエネレーションを代表する數名の方に御願ひしてこの稿を作つていただいた。(編輯部)

## 序

——一橋山岳部というもの——

大塚 武

針葉樹十一號が陽の目を見ることとなつて、まことに嬉しく、且つ感慨が深い。十號から十一號まで、ふりかえつてみると二十年近い歳月が過ぎている。十號を出した当時のことを思い浮べると、印刷屋と交渉しながら、紙質が悪いこと、特に写真版など予想していたより遙かに出来が悪いのに内心腐り乍ら、この次の十一號は果して出せるのか否か惧んだことが想い出される。それから二、三年、学生登山者としてまだ相当に山登りを享しんだものの、やがて冬山に不可欠の石油に苦勞するようになり、砂糖も手に入らなくなり、部報を出すどころか、本体の登山そのものが窮屈になる一方の情勢となつた。十號を出してからも、昭和十四年末滝谷の冬期登攀が成功した後など、普通ならば十一號を出す機会だつたかも知れない。然し当時としては、全くそういう気持にはならなかつた。それから

後は、石油砂糖どころか、米味噌にも不自由し、更には汽車に乗ること自体も難しい世の中になった。終戦当時の山岳部をやつていた田中、石井などの話を聞くと、全くよく放り出さなかつたものだと思う。『山岳』の四十九年号に「戦後の学生登山」と云う項目の下に、早稲田、慶応、阪大、日大のその頃のメンバーがこの困難な時期の山岳部の歩みを書いてあるが、苦勞は何処も同じだつたようだ。一橋山岳部としても、同好の士が相継いで命脈を切らないで今日に至つている点全く御同慶の至りである。

さて、十一号を出すこととなつた機会に、山岳部の行き方、部報の意味、そういつたことについて、どれ程参考になるか分らないが何か一言記してみたい氣持がする。私はかなり前から、山岳部の行き方はとも角として、学生登山者の在り方と云うものには一応割り切つた感じを持つていた。それについて想い出されるのは、冬の滝谷を志して、山田、根本、佐藤の諸兄と夜の新宿を発つて行つたとき、距離にして甲府辺りまで殆んど間をおかないで、議論を続けたことがあつた。その時のテーマが何であつたか覚えていないが、とも角その熱の入れ方はゼミナールのレッスンに劣ることはなかつたように覚えている。要するに、その当時私達は豊富な時間に恵まれて、めいめい何か勉強すると共に、それと同時に山登りに無上の喜びを感じる仲間だつたと思う。そしてそういう立場に居られることを、有難く思い、恐らく学校を卒業しても、こういう career は卒業し切れずに社会人としても持つて歩くことになるのではないか、又わが一橋山岳部の中にはその様な流れが云わず語らず伝わっているのではないかとも思つていた。だから山岳部の行き方としても、そういう仲間の集りとして、その時々適つた行き方をとればよい

のであり、一言で云えば個人的な意味での山の好きな学生と云うものこそ意味のあるものであり、山岳部と云うものがそれよりえらいもので、そこから部員の行動が律されて行くことと云う風には考えていなかった。その辺の点に、当時の早稲田の山岳部等と大分趣を異にしていた点があつたように思う。尤も先日都電の中で、早稲田の関根氏に会つて久闊を叙したが、彼はリュックを負つていて、丁度これから金沢に行くので、この機会に加賀の白山に登つてくるのだと云うことだつた。私は何となく微笑ましい感じがした。山登りは、機会を見付けて自分として未知の領域に踏みこんで行くことが自然なので、山岳部員だからと云つて、軍隊的な統制の下にワクをはめられ、個人的な行動は意義がないなどとする考え方は山岳部の行き方としても正しくない様に私には思われる。そういう見方からすれば、山岳部の行き方として、集団的な合宿、或いはポーターメソッド以外にないもののように考える必要もないし、又他の運動部などの行き方と形が違つたものとなることも事の性質上当然と云わざるを得ない。

私は最近、ガストン・レビュファの『星と嵐』や、ヘルマン・ブールの『八千米の上と下』等を興味深く読んだが、山登りの真髓と云うものは、自分にとつてより困難な登山を追つて行くことと云う所にあるような印象を禁ずることが出来なかつた。ヨーロッパでも、もう初登攀と云うものは殆んど望み得ないようで、この連中も、どこその第二登攀、第三登攀或いはこの壁はまだ十組は登つていない等と云う表現があちこちに見られる。然しとも角、自己にとつて新しい、又より困難な登山を目指して果敢な登攀を挑んでいる。彼等にとつては、ヒマラヤはそういうコースの最後の夢として聳えてい

るように思われる。ところで、我国では無論初登攀などと云うものは一層望み得ない。然し従来困難とされたルートはその後の登攀が果して陸続と行われているであろうか。例えば、私共の畏敬する小谷部先輩、森川先輩が登った鹿島鎗荒沢の奥壁、或いは北岳バットレスの第一尾根など、その後あまり登られた話を聞かない。積雪期の登攀となれば、まだ数組しか登られていないルートは案外数多くあるのではないかと私には思われる。学校山岳部の行き方としても、形式的な新らしい展開を追うよりも、学生登山者として実質的な充実を求めて行くべきものだという感じが私には依然として強い。今後の山岳部の部報と云うものも、どういう形をとるのがよいかは遽かに云えないが、とも角実質的に部員一人々々が充実に来れば、その充実の度合に応じて自然にまとまつて来るのではないかと思つている。

## 昭和十四——十五年

山田亮三

十五年の昔といえ、記憶はすべておぼろとなつてゐる。針葉樹十号以後の部の足どりも、結局は私自身の山行を中心に思い出をたどるほかはない。お許し願いたいと思う。

昭和十四年の夏山合宿は穂高涸沢。合宿終了後に大塚と根本が残つて滝谷第四尾根を登った。その年の冬山にたいする大塚の構想が成つたのはこの時であろう。九月には北岳での小合宿。大塚、山田根本、高野のパーティーでバットレス第一、第三、第四の各尾根を登る。

第一尾根のオーバーハングの基部に、小谷部先輩の打込んだ一本のピトンが霧にまかれていた。夏の涸沢の喧騒とちがつて、九月の御池の小屋には人の気配すらない。静かな数日の生活のうちに、冬の滝谷の計画も本格化していった。十月中旬、穂高小屋への荷上げと偵察をかねて再び穂高に入る。冬のパーティーである大塚、山田佐藤、根本に小柳が参加、大塚と私が第四を登り、他の三名は北尾根を登った。

仲間が山を下つたあと、私はひとりで横尾の本谷から槍へぬけてみた。翌年三月の春山合宿に備えての偵察である。横尾々根のコールに前進キャンプ、大喰岳頂上附近に雪洞を掘つて小槍をねらつてみよう。そう予定をたてて殺生小屋に下る。小屋には三日滞在、大槍東面、小槍、北鎌尾根側稜等に登った。連日素晴らしい快晴で、日本中の山が全部見えるような気がする。明日は山を下るといふ最後の日、暮れなずむ大槍の頂きにいつまでも座つていた。遠くにみえる南アルプスには宮城と深谷のパーティーがいる。お隣りの穂高では船本と日江井が滝谷を登つてゐる。親しい仲間のあれこれ思いながら、ひとり煙草の煙をあげてゐた。

昭和十四年の冬は天候に恵まれた。穂高には前記四人のパーティーは乗鞍のスキー合宿で、打続く快晴の冬山を楽しんだ。滝谷の四人はいつたん穂高小屋に入り、二回の荷上げで北穂高頂上直下に天幕を建設。十二月二十三、四の両日で懸案の冬期第四尾根完登に成功した。当時の山日記から記録を引用しておこう。

昭和十四年十二月二十三日 天幕(五・三〇) — C ルンゼ左俣を下り第四尾根第一コル(七・三〇) — 第二コル 一一・五五) — C カンテ上(一三・四五) — ピナクル肩(一六・〇八) — ツルム

上(一七・三五)同所にてビヴァーク

同二十四日 ツルム上(八・五〇)―登攀終り(一二・二五)―

稜線(一三・三〇)―天幕(一四・三〇)オーダー、大塚、山田

この日佐藤、根本は奥穂に登頂、翌日から二手にわかれて滝谷第二、第三、第五尾根、涸沢槍側稜を登った。連日の吹雪に一つの頂をさえ踏めなかつた過去二年の冬山の償いをつけたと喜びあつたものだ。

三月には予定どおり横尾の本谷に入つた。しかし部の全力を注ぐという当初の計画は崩れ、結局新人は八方尾根のスキー合宿に、船本、日江井、久保は奥又から前穂へと向い、横尾のベース・キャンプに入つたのは山田、根本、高野の三名、しかも高野は横尾々根への第一回の荷上げの後身体を悪くして下山、天幕は二人となる。それでもどうにか前進キャンプをあげ、大喰岳に雪洞を掘つたが、その翌日から吹雪。晴れ間を盗んで大槍に登つただけで退却した。二人だけなんだから仕方がないさと根本と慰めあつたことを思いだす。

この年の春に私たちは本科に進んだ。奥又白が再び目標となりはじめていた。北尾根に極地法の天幕をすすめ、三・四のころから前穂の東壁を登るのが私の夢であつた。高野一人だつた予科にも松下小林、林戸、原田の参加があり、専門部には清水と佐野の優秀なパーテイー、それに前田が入部した。こうした中堅部員の充実が、より大きなスケールでの山登りの構想を可能としつつあつたのである。

五月の下旬、佐藤と私は鹿島槍荒沢奥壁の南稜を登攀した。小谷部、森川の両先輩が奥壁北稜の積雪期初登攀に成功したのは昭和十二年の三月。その四月に入部した私は、奥壁の写真を見せられて思

つた。何時になつたら自分もこんな所を登れるのだろうか、と。翌年の五月に、天狗尾根を登つて奥壁を眺めたときも、登攀の対象として考えるには余りに遠い気持であつた。しかしまた一年たつ。より高くより峻しい世界がひろがつてゆく。昨年は駄目だと思つていた壁が、今年は登れるかもしれぬと思われてくる。あれこれの文献をあさり、登攀の詳細を思い描き、内心の問答をいくたびか繰返すうちに、どうしたつて登れるという確信が湧いてくるのだ。山登りの進歩というものであろう。その意味でも荒沢の奥壁は、私にとつて忘れぬ思い出を残している。もつとも壁の登攀自体は、えらく急峻なブッシュこぎに終始、岩登りとしての興味は薄い。

荒沢から帰つてすぐに穂高に入つた。日江井、大塚、山田、清水佐野、鈴木、前田という大勢での穂高小屋生活。滝谷クラック尾根と第一尾根、北尾根、飛驒尾根等を登る。第一尾根はかなり悪く、前年の冬、私たちと同じ時に北穂高に幕営、この尾根の積雪期初登攀を行つた上条孫人、松濤明両君の業績を、あらためて感心したことを覚えてゐる。

その年の夏山合宿は、ようやくマンネリズム化しつつあつた涸沢生活を避けて、第一次が針の木から五色、薬師、黒部源流を経て上高地にいたる幕営縦走、第二次がひきつづいての奥又白生活。当時の部としてはかなり野心的な試みであり、この合宿の成果は直ちに積雪期のそれに直結するとの期待がもたれていた。だがそうした期待と抱負も、縦走の五日目、スゴ乗越を目前にした越中沢の下りにおける友田の転落死によつて一瞬のうちに終止符を打たれた。遭難の詳細については、すでに私たちの手になる「友田純一君追悼録」に編まれており、ここに繰返す必要はないであらう。

遭難を転機に、部の歴史の暗い一頁がめくられたように思う。遭難の後の八月、上高地の荷物の整理方々涸沢に入り、小林、高野、松下、佐野、清水、鈴木など、次の時代の中堅部員を連日滝谷に案内しながらも、自分の心がひどく張りをなくしているのに気がついていて、涸沢を下つて久保と佐藤に逢い、徳沢で痛飲した。その時佐藤は小槍の単独登攀を行つてゐる。

秋から冬にかけて、個人的な山行はいくつか行われ、冬は乗鞍のスキー合宿を中心に、鹿島槍、前穂、槍ヶ岳等の登山がなされたが部としてのまとまつた行動はない。霧の乗鞍の頂上で出逢つた森がそのあと私たちの仲間に参加したのが唯一の収穫。翌年三月の合宿は遠見尾根の幕営。私は参加せず、根本がリーダーで彼と佐野の二人が五竜の東壁を試登した筈である。

昭和十六年。太平洋戦争の開始を年末にひかえたこの年は、外の世界の激しい動きが、物質的にも精神的にも、部生活により暗い影を投げはじめた年であり、同年秋秩父笛吹川における前田、長沼、古沢三名の遭難はそれを決定的とした。ただひそかに私たちが慰めとするのはその年の夏、五色ヶ原の一角に友田の遭難記念碑を建設しえたことであるにすぎない。

最後に一言付け加えておきたい。私たちのクラスは、根本、久保、佐藤、小泉、林、森、川村、檜淵、山田の九名であつた。良い仲間であり今でもそうである。だが私たちのみんなが全力をあげて一つの山にぶつかつたという山登りはない。わずかに私たちのそれぞれが、それぞれの部署で全力をあげたという記憶は、前田の遭難とその後への救援・捜索活動においてであつた。悲しい思い出である。

## 昭和十六年——十七年

小林 茂雄

此の前年、既に一種、云いようのない重苦しい空気は、ひしひしと学園の内外にも浸透して来ていたが、昭和十五年七月の友田の遭難は、部を部内からも激しく揺り動かしした。その夏の合宿計画は、それに続く多くの計画や希望と共に消え失せて行つたが、その翌月本一の山田が、当時予二の高野、松下、小林、専二の佐野、清水、鈴木等を引連れての、涸沢生活は、其の様な暗い低迷の中にあつてからくも次の時代へのくさびとなつた。当時、いろいろな意味で部の内部には或る空白状態が生れようとしていた時に、此の涸沢に於ける生活は、ささやかなものではあつたが、後から来る若い部員にとつては、省みて意義のある生活であつたと思う。

昭和十六年——乗鞍のスキー合宿に続いて、大塚、山田、根本、佐藤、林、高野、松下、佐野、清水、等が上高地に入つた。

三月、遠見尾根幕営 本一、根本、久保、専二、佐野、清水、予二、松下、原田、小林、専一、前田。堀岡先輩が十二月の乗鞍、二月の御岳に、続いて特別参加された。大遠見の手前に設営して、五竜の東壁の試登。

五月、本二、根本、林、予二、小林、原田が穂高小屋より滝谷第三尾根、ジャンダルム等へ行く。

七月、次第に高まつて来た世のざわめきの中に、夏山合宿が行われる事になつた。大きな荷を背負つて駅を出る時も、応召兵と見送人の雑踏する中から、冷い視線を感じない訳にはいかなかつた。

第一次計画を遭難碑建設とし、山田、根本、佐藤、櫻淵、松下、細野、前田、伯耆、中林等が之にあたつた。連日の雨に悩まされながらも、富山からセメント等を荷上げして、兎も角も「我々の手で建設を」という願いが結実した。之より先、専三、佐野、清水、予二、原田、林戸、小林、専二、入沢が劔沢に幕営、チンネ、クレオパトラ・ニードル、八峰、源次郎尾根、等を登る。チンネは三の窓雪溪を登りきらず、壁の直下から、いきなり取付く。完登は午後八時であつた。(佐野、小林、林戸)

七月十八日の序幕式を期して、友田家の方、常盤教授、大塚先輩をはじめ殆んど全部員が、針の木から、或は立山から、と五色ヶ原に集つて、感慨深い序幕式が行われた。

第二次計画、五色ヶ原—薬師—黒部源流—三俣蓮華—槍—徳沢。併しながら此の時、時局情勢の緊迫は遂に、学生の合宿は即時中止、と云う文部省の指令となつて全国に飛んだ。ラジオもない山の中の事として、日米開戦か、蘭印に対する直接行動か、などと、いろいろな憶測が飛び出した。私達も一応、合宿を中止して引上げると云う事にした。但し帰路は当初の予定の如く槍を経て徳沢へと云う事になつた。

参加者、深谷、山田、根本、佐藤、林、森、佐野、清水、鈴木、松下、林戸、原田、小林、伯耆、間々田、中林、前田、細野

最初からよく雨に祟られた縦走であつた。黒部の源流で幕営中、夜半に増水を知り、寝ぼけ眼で行つた引越騒ぎなどを織りまぜ、途中小槍などへ遊びながら、大部隊が徳沢へ下つて行つた。今ならさしづめ乞食のファッシュコンクールと云つた異形の行列が、あの独特の臭いを惜しげなくふりまきながら飛ばして行く様は、けだし

壯観であつた。勝手知つた此の道も、学生の姿は殆んどなく、登山客の影も稀な位に静かなものであつた。寂とした空気をふるわして割れる様な狂宴を張つた徳沢の一夜も亦、忘れ難い思い出である。

八月—九月

独ソ戦線の膠着、アメリカの参戦態勢などといった記事が新聞に出る様になつて来た。学生に対しては休暇中にも拘らず、臨時召集がかかる様になり、部室へ来て顔を見合わせる度に、日毎に濃くなつて行く周囲の空気に対して、徒らに空しい反撥と焦燥を感じ合つていた。併し当時、若い部員の中には、兎も角も山へ登り度いという気持を止み難く思つていた者もあつた。経験も浅いだけに、先ず山へ登る事によつて、そこから生れて来るものに期待をかけたかつた。現下の情勢が如何様にならうと、禁止される迄は出来る範囲内で山へ行きたかつた。この様な若い年代の目からすれば、時勢というもののが山岳部に与えた影響は、一見、奇異に思える程強烈なものであつた、と云わざるを得ない。

既にガソリンの入手は極めて困難なものになつていたが、遭難以来の部の沈滞を破つて根本的に再出発したい、という気持の現れとして、今冬の合宿を、国立の部室から歩いて富士山頂へ、という新たな提案がなされて、全員の意気があつた。——準備が始められ、各自の分担が定められると、久方振りにピンと張り切つたものを各自が感じていた。

十月、今冬の冬山へのトレーニングをかねて、各方面に一斉に動き出した。

奥又白へ、小林、佐野、高野、入沢。

奥秩父東沢へ、前田、細野、大崎、長沼、古沢。その他甲斐駒、

上越方面へもそれぞれ出発して行つた。併しながら、誠に思わざる結果となつた。東沢を溯行した専門部員の遭難。此のあとに続く数週間は、救援、搜索、收容と、悲しい努力の連続であつた。(追悼録「奥秩父」参照)。再び厳しい現実には直面した当時の私達の気持ちを、よくここに述べる術を知らない。ただ屈してはならないというひたすらな気持が、その悲しみの底にあつた事だけは云えよう。そして尙、当初の冬期合宿計画は万難を排しても、やりとげようと、一連の予備行動が、着々と進められていた。天幕をかついで、トレーニングのために、近くの山や沢へ出かけていたが、それも十二月八日を境として、張りつめた気持も空しく、瓦解して行く感じであつた。十二月末、緒戦の戦果に国民全体が昂ぶつた気持でいる中を何か駈られる様にして、小林、高野、清水が槍へ出かけた。千丈沢から吹き上げる風の中に、小槍が鋭く見えた。

昭和十七年——合宿も出来ない儘に、七、八人集つてはスキーに出かけたりするものの、スキー小舎で、早朝の国旗掲揚式に出ないと、朝飯を食べさせぬと云われて腐つた事などもある。二月、松下が予科部員をつれて八方尾根へ。三月、根本、林、小林の三人が小槍をねらうも、烈風の為、肩から引返さず。

四月——総ゆる物資が街の中から姿を消して行つた。冬山に不可欠のガソリンが最も入手困難となり、勢い冬期使用出来る小舎を中心とした計画に限定されて行つた。主食も山行の前には、あらかじめ貯えて置かねばならなかつたし、甘いものは殆んど手に入らなかつた。煙草もフィルムも何日か、かかつて買い溜めしなければならなかつた。鉄道輸送が次第に窮屈になつて来たのも此の頃である。此の年、新入部員として中村(讚)、石井、山崎、関、倉田、大河原

等清新な空気が入り込んで来た。五月、三ツ峠へ歓迎登山。つづいて冷沢小舎へ合宿。山田、根本、林、森、小林、高野、原田、林戸、鈴木、大野、浜口、伯耆、樋口、大崎、細野、中村、石井、山崎、倉田、大河原、関。

繰上げ卒業の為、徴兵検査を受けた本三部員が可愛らしい坊主頭で参加。近来にない大世帯となつて意気軒昂たるものがあつた。天候に恵まれて鹿島槍を中心によく動けた。其後根本、小林、高野、原田、中村、石井、山崎は白馬へ。山田、林、伯耆、樋口、大崎が爺一針の木へ。途中、種池附近で雪洞を試みる。七月には懸念されていた夏期合宿を思い切つて敢行する。流石に涸沢の天幕の数も少い。忘れようとして尙、忘れ難い下界の緊迫を、思い思いに胸に秘めながら、滝谷を中心として、どの尾根にも仲間の姿が見られる数日が続いた。或は最後の合宿になるかもしれないと思つていた。此の生活の想い出は十五年後の今日も尙生々しくよみがえつて来る。此のあと、小林、中村が奥又白に入る。

十月、奥秩父への追悼登山を行い、続いて、小林と中村が再び涸沢へ入り、何時の日にか備えて、あちら、こちらと歩き廻る。

銃を担いでの行軍登山なら認めるが、単なる山登りなどは以ての他などという、迷論が横行して、今日からみると到底考えられない様な数々の障害が、日一日と加わつて行つた。二つの遭難と戦争の歴史の中に育つた私達の部は、亦、此の国の運命と共に揺らいでいた。戦争に直結しない、総ゆるものが否定されようとしていた時代の山岳部の行き方としても、省みれば悔恨のみ残る一時代であつたが、此の僅かに残るものが、後から来る人々によつて引継がれた事を私達の一つの喜びとしたい。

## 昭和十八年——二十一年

石井左右平

十七年春入部したばかりの我々（中村、山崎、大河原、関、倉田石井）は、春の鹿島鎗、夏の涸沢合宿で完全に山のとりこになつて居た。一橋山岳部から離れられないものになつて居た。十七年の冬の合宿に参加する時に恥をかかぬ様にと、予科一だけで十二月初め苗場で合宿し冬山に備えたりもした。然し、吾々の山との生活は当時の時代の動きから見れば余りにはかないものでしかなかつた。

部とは一つの目標を持つた動き、一つの合宿が次の合宿への準備となり、此の間に連絡した目的活動がなければならぬ、と見るならば当時の我々の生活は部生活とは云えない。単に世をひがんだ山キチガイの集り、と云えるかも知れない。然し兎も角、我々の生活の中心は山、山岳部だつた。我々の生活は極端に云えば、各自の山へ行き度い気持と世の動きとの争いのようなものでした。

十七年暮から翌年正月にかけての乗鞍、徳沢、合宿を終え、二月の試験が終るや否や池の平に一般学生のスキーの手伝いに一部で参加、終つて直ぐ小林、伯耆、樋口、大崎、中村讚治、が一ノ俣に合宿。槍の周辺をやり、三月二十日頃松本へ。一方、松下、大河原、関、倉田、石井が無人の大沢小舎に入り、真白な剣、立山に感激の日を送つた。既にガソリンなど全く入手困難で田舎の脱穀用特配の油を手に入れおつかなびつくり持つて行つた。

続いて、四月一日から、讚治、山崎、石井で八ツ岳合宿。まるで計画も何もない無茶苦茶な数十日だつた。

四月、田中、大島、笠原、その他相当な人達が新たに入部。丁度その頃、全予科生が何かの部に入らねばならなくなつた為、併せて空前の人数になつた。然し、此の連中とはまるでハダが合わず、夏の合宿迄には矢張り、殆んどが整理された。

五月、樋口、真木、倉田、石井が北岳へ。悪天で途中から引返す別に山崎、讚治が穂高へ。之も讚治が穂高小舎で薪を割らずに膝を割つた為、ホウホウの態で下山。

六月、夏合宿に備える意味もあつて、小林、讚治で徳沢—涸沢—槍沢へ。

七月、全くの悪条件下に漸く涸沢合宿。と云つて、本科の人達は既に入営も間近で、然も勤勞奉仕と云う難題もあつて参加無く、主力が予科二とあつては大した事も出来ない。然し、入つたばかりの一年生に何とかして山の良さを味あわせたかつた。此の合宿で来たえて、次は……などと云う気持は持ち得なかつた。合宿の途中、倉田と二人さびしく涸沢を離れ北海道の飛行場建設に加わる為、山を下りた。此のあと八月中旬から九月初旬迄小林、讚治が徳沢、奥又でめぐまれぬ天候の日々を送つて居る。

十一月、学徒動員で上級生の殆んどの入営が決定、残る野尻、讚治、山崎、石井、亀井、大河原、田中、岩谷で槍沢小舎へ。讚治、山崎で小槍をねらうも成功せず。帰りの徳沢迄の路でいちいの実が印象的だつた。

十二月、再び小槍を目指して、中村、山崎、田中、笠原等で槍沢に合宿。大槍は良かつたが、小槍は矢張り不成功。

昭和十九年——二月に入るや、前の年槍沢に入つた時のぞいて来た奥又、又讚治が二年間ねらつて来た奥又を目指し準備をはじめた



あの時代によくもあの様な山行をやつたと思う。あの時は堀岡先輩に全く御やつかいになつた。パン、ジャム、罐詰等、必要な食糧は殆んど堀岡さんに御世話願つた。東京で罐詰をリュックパイ頂き交番の目につかぬ様コソコソ家に持つて帰つた事が懐かしい。

兎も角不純物だらけのアルコールも一升壇に何本か手に入れ、二月末讃治、大河原、石井が池迄荷上げ。続いて野尻、讃治、大河原山崎で奥又に入る。二日程遅れて一人で、三日もかかつて池に入つた。讃治の旧友松高の山上も参加。

矢張り力が足らず此の合宿も讃治、山上でAフニースをやつた位で終り、あと我々も之が最後と乗鞍に遊んだ。

此の年の四月には新入部員は無かつた様に思う。新学期になるや否や日野に勤労働員で全予科生が工員生活を送つた。此の合間を見て二年前の幸多かつた鹿島合宿を思い出す儘に、又もや之が最後と野尻、讃治、大河原、亀井、石井で鹿島へ逃げるが如く入る。一応の目標は唐松迄だつた。然し、時代を反映するが如く、山も我々には誠にきびしかつた。雪崩にせめられつつも漸く八峰キレット小舎に入つたが、吹雪の為全然動けず、食糧も無く、遂に無謀と知りつつ吹雪の中を逆行。北槍頂上附近で人工雪崩を起し一人が雪崩に乗つた儘、すごいスピードで落ちて行つた時の気持は今でも忘れられない。ままよ、と後を追つて皆で下りたが、全く幸な事に北沢であつた。あの夜、鹿島部落に向つて歩く吾々の背後には皮肉にも星の中に鹿島槍が高くそびえて居た。之で最後と云う気がしじみ胸にわいた。

帰れば殆んどが徴兵検査。もう全く山どころでは無くなつた。

八月に田中達が入営。九月に石井が入営。大河原も続く。讃治、

山崎が僅かに部室を守つた。

二十年春、土浦の石井に山崎から悲報が入つた。入営中の大河原が栄養失調で除隊、数日で亡くなつたと。どんなに重い荷を背負つても、何時もニコニコ顔だつた大河原まで戦争は失わしめてしまつた。

最後迄残つた山崎が部室を整理、窓に釘を打つて入営して間も無く八月十五日が来た。

戦後の部は部室の再開から始まつた。然し当時の状況はとても山どころではなかつた。部室に集つては、どこに地下足袋が何千足なと云う話を交換、何とか資金を、とはかつたが、世の中を知らぬ我々にはとても成功の機会は無く、当時の天候の如く味気無い毎日を通した。此の間我々の不手際で、古い部誌その他を失くした事を此の機会に御詫びする。

二十一年二月、乗鞍に入つて居た讃治が山を下りて来、小林、山崎等と石井宅に集り、漸く再びと云う気運が出て来た。第一の問題は食糧、食い物さえあれば何とか山へ行ける。金の無いのには皆馴れ過ぎて居た。

三月、青梅沿線に知人が飛行場を開墾し芋をつくる。そのアルパイトのある事にとびつき、樋口、石井、讃治、山崎で部室に集り食糧獲得の為に切ない合宿をした。全くつらかつた。然も結果は余りに無情だつた。四月に入つて、世の激変と共に多くの人は山に未練を持ちつつ夫々の道に入つて部室を遠ざかつて行つた。

然し此の頃から田中、大島達の云わば新しい人達が再び部室に集る様になつて来た。

六月。戦後最初の合宿の様なもの、谷川で行われた。石井、田

中、大島、鈴木、森。

マチガ沢と一の倉に登攀、一応夏合宿への意欲を持ち得た。

七月、田中達の努力で、涸沢合宿が意外に早く実現された。本当に戦後の人である山中、小川達も参加した。徳本が通れぬ、などと云う話もあつて島々から梓川沿いに徳沢迄歩いて入り、途中炭焼小舎に泊つたりした。金がなかつたのである。涸沢でも皆生れて始めてあざみをお菜に食つた。無い無いずくしの合宿。然し記念すべき合宿だつた。

涸沢生活を終えて、樋口、石井、田中で奥又に入る。Aフニース四峰明大ルート登攀。明大ルートはなまけて手前から取付いた為、大分時間を費した。

次に伊藤、小泉達が入部したが、当時は夏の合宿で総ゆる力を費消してしまつて居る為殆んど動き様も無く昭和二十一年を終えた。以上、全く暗い思い出の多い数年、それでも我々の動きが、たとえ無目的の如くであつたとしても、現在の活気ある一橋山岳部への橋渡しとなり得た、と思えば、或いは上記の如き懐古趣味的な記述は『針葉樹』に載せるに相応わしくないと見られるかも知れぬが、之も部の歴史の一齣として許して頂けると思う。

## 昭和二十一年——二十七年

小泉 三好

GHQ指令による軍関係学徒入学制限問題の為、三月に合格発表がありながら予科入学式はその年の九月迄延期された。入学式直後私と共に入部したものは確か五名程であつたが、当時の混迷の世相

思想的虚無、年輩層への不信の念等が我々を山に走らせた一つの大きな動機であつた事は否めない。焼野の都心に立つて、遠く山波を打眺めた時、学生生活の精神的拠り所を山に求めようとする決意が生じたのは私のみではあるまい。

色とりどりの服装で入部歓迎会に招かれ、好く晴れた十月中旬の或る日、三ツ峠の岩場に歓迎登山が行われた。私の記憶に残る当時の部員は、学三、樋口、学二、石井、山崎、関、中村、田中、大島、島影、伊藤、学一、笠原、秋元、森の諸先輩であり、予科三、佐藤望月、予科二、山中、小林の入部は私と余り変わらず、専一には小川君塚、荒砥が居た。

十二月には簡単な池の平スキー合宿。明けて二十二年の夏合宿は涸沢で、奥又合宿を了え合流した本科部員の指導により行われ、始めて山岳部生活の一端を知るに及び、山に対する社会逃避的動機は漸く蔭をひそめ、自然美に対する憧憬と闘志とに強く左右される様になつて行つたのである。しかし乍ら、此の頃になり当初共に入部した予科同級生は次第に脱落、遂に私一人となつてしまつたのは淋しい限りであつた。その原因は当時学生生活の根底を脅かして居た経済事情にも勿論あつたが、山を単に逃避的場と見做し、之れ以上に出られなかつた者の真姿と見做し深くは追わなかつた。しかし一方既に予科一部員として、中村、渋谷、鹿俣、原田が入部して居り机のみの殺風景な予科の部室も次第に賑やかとなり、集会の折には山行の計画に夢中になり始める様になつて居た。

十一月には、始めて戦後派のみによる八ッ入りが行われたが、もの見事に失敗、赤岳直下の雪のつまつた石室で一夜を明かしたのも良い経験であつた。ついで十二月には東大銀鞍荘を借り切つての

乗鞍合宿が行われ、先発隊として伊藤、佐藤、小林さんと共に入り番所の為さんの所に立寄つた所、はつきり挨拶をしなかつた為か突如「この頃の学生は礼儀を知らん」と大喝を喰い、取るものもとりあえず裸足で雪の中に逃げ出し、精神的打撃により、途中林の中でバテた一件も今となつては非常に懐しく思い出される。此の合宿を最後に戦前につながりをもつ二十三年度部員は卒業、残つた我々は経験と技術の面で如何に山に登り、又伝統の面に於いて如何に部活動を続けて行くかについて、新たな自覚に直面せざるを得ぬ状態に追い込まれた。

折も折、基礎訓練の手始めとして此の年の五月二十二日から行われたマチガ沢春合宿に於いて、本一、山中部員がイレギュラーバンドするスノーボールの直撃に遭難死した事件は余りに尊い犠牲であつた。吾々としては単に運命のいたづらとしてのみは片附けられない根本的なものに更めて逢着したのである。諸先輩への経過報告。告別式と全部員忙殺された後、哀愁の漂う部室に於いては、特に夏合宿の方法と器具の老朽不足問題が取り上げ論議され、徐々に必要最少限度に器具を整備すべく、先輩からの寄附金具体化の方策が立てられた。温厚篤実にして我々の信頼して居た彼の死はともすれば部の空気を沈滞させざるを得なかつたが、之に対する反撥とでも云おうか、小川と二人で入つた六月の西穂は忘れ難い静けさを持つていた。この遭難と前後して本一に横山、又予科二に南、笹原が、予科一には高橋、竹脇、五十嵐、渡辺、駒見、宮川(立)が加わり、ともすれば沈み勝ちな部の空気に、新鮮さを吹込んで呉れたのはせめてものなぐさめであつた。

この年の夏は穂高に冬は蔵王に合宿を行つたが、何れも新人の養

成に終始した。

明けて二十四年には、従来余りに北に片寄り過ぎて居た夏合宿を南に転換、北岳より赤石迄の縦走を計画したが、どうした事か合宿参加は望月、私、竹脇の三人のみ、新宿駅で大いにムクれ元気に出たが、ルート、小屋の著しい荒廃に予想以上に時間がかかり、遂に農鳥迄で諦め大門沢より西山へと下りてしまった。しかし南の良さは忘れられず翌夏も又南合宿が行われる事になつたのである。この年の冬は田中先輩の特別参加を得て八方尾根、明大小舎を根拠にスキー合宿及び唐松登頂が行われたが之は冬山への準備訓練を意味するものであつた。

我々の技術的進歩が遅々として居る一方経済食糧事情の好転も原因して、その頃各大学は夫々多彩な計画を発表、新聞雑誌を賑わしそれが実行されるに及び、部内に於いては「毎年夏冬の合宿を唯新人の養成にのみ行つていて好いものか、此の儘ではレベルの向上は考えられぬ、上級部員及び経験多き者はより難しきを狙うべきではないか」との声も高まつて来た。しかし当時上級部員といえどもその経験は比較的浅く、山中遭難事件直後の事でもあつたので、ここ一、二年は未だじっくりやるべき時であるとして、一部積極論は押えられる処となつた。

二十五年の夏は再度北岳に合宿。諸先輩の偉業の一端にふれんものとバットレスを覗つたが天候に恵まれず、僅かに東北尾根と他の一つ(ガス深くなり、どこを登つたか判明せず、第一尾根らしかつた)を登つたに過ぎなかつた。冬合宿は翌年を期し乗鞍位ヶ原山荘に合宿、雪洞訓練を継続し、冬山に対する基礎を固めて行つた。

二十六年、この年には石原、白川、奥野、須山が入部して来た。

この頃になると新入部員の殆んどが高校時代に数多くの山を歩いて居り、入部当初の吾々に較べ経験の点では遙かに優つて居り従つて入部の動機も亦自づから異なるものがあつた様に思われる。

二十六年の夏合宿は山岳部の生活を知つて貰うという意味で劍沢に於いて比較的軽く行い、針ノ木から大町へと抜けた。そして冬の計画へ。顧るに戦後冬合宿はテント、器具の老朽化、加うるに経験の不足に依り毎回スキー合宿にのみ終始して居り、未だ一度も冬山の経験なき為、学生生活最後の合宿でもあり何とか実現し度いものと田中先輩の私宅に於いて計画を練り、西山口からの極地法に依る北岳アタックを真剣に考えたが、内張のないウインパー一張では如何とも為し難く遂に机上の空論におわつた。やがて合宿を大遠見からの五竜に決定、十一月中村と偵察に入り神城の下川氏から小谷部先輩の思い出など聞かされ、十二月中旬より大遠見附近に設営、この年の合宿が開始された。ラジウス使用の不慣れから、テントの屋根に穴をあけたりしながらも、学二以下の協力に依り、二十五日に横山と共に念願の五竜に立ち得た事は、喜ばしい限りであつた。一方この合宿に於いて我々二人を登らせる為に学二以下の部員が一致努力して呉れた事は忘れられない。

サツマイモのコムパに迎えられ、ツマミ付二級酒、ライスカレーのコムパに送られる迄の吾々戦後部員の動向を夏冬の合宿を中心に書いて来たが、この間に於いて吾々の学園も時代の流れと共に可成りの変貌を遂げて行つた。即ち二十二年七月には「東京産業大学」から「東京商科大学」へとその校名を復帰し、翌二十三年六月には新制度に依る「一橋大学」が誕生。吾々の二年下からはこの制度が

適用される事になつたのである。本質的なものは変らない迄も、今迄の予科本科合せて六ヶ年の部生活が四ヶ年に短縮されたのであるから、山行の方法に於いて、又部の空氣に於いて多少の相違が生ずるのは止むを得まい。

かかる時代の変遷の中にあつて今でも私が心配するのは、諸先輩の残された一橋山岳部の在り方、伝統を、果して我々が受けつぐ事が出来たであろうか、又それを後に遺して行けたであろうかと云う事である。戦前部員との部生活は余りに短かく、直接指導を受け得た山行に至つては極めて少かつた。我々としては部の在り方が問題となる時、折々諸先輩の意見を会社に又月見の宴に聴し、吾々なりに努力はして来た積りであるが、諸先輩に於かれては何卒此の一文を御参考に、より以上の現役部員の御指導に当られん事を更めてここに御願ひする。又現役部員に対しては戦後十年の部の歩みを認識の上、先輩との接触の機会をより多く設ける事を望み度い。

学生生活の前半に於いて充分な山行に恵まれなかつた吾々は卒業後に於いても、時々集つては好く山に入る。二十八年の夏は劍に、二十九年五月の月山、八月の笠、十一月の奥秩父は愉快な山行であつた。

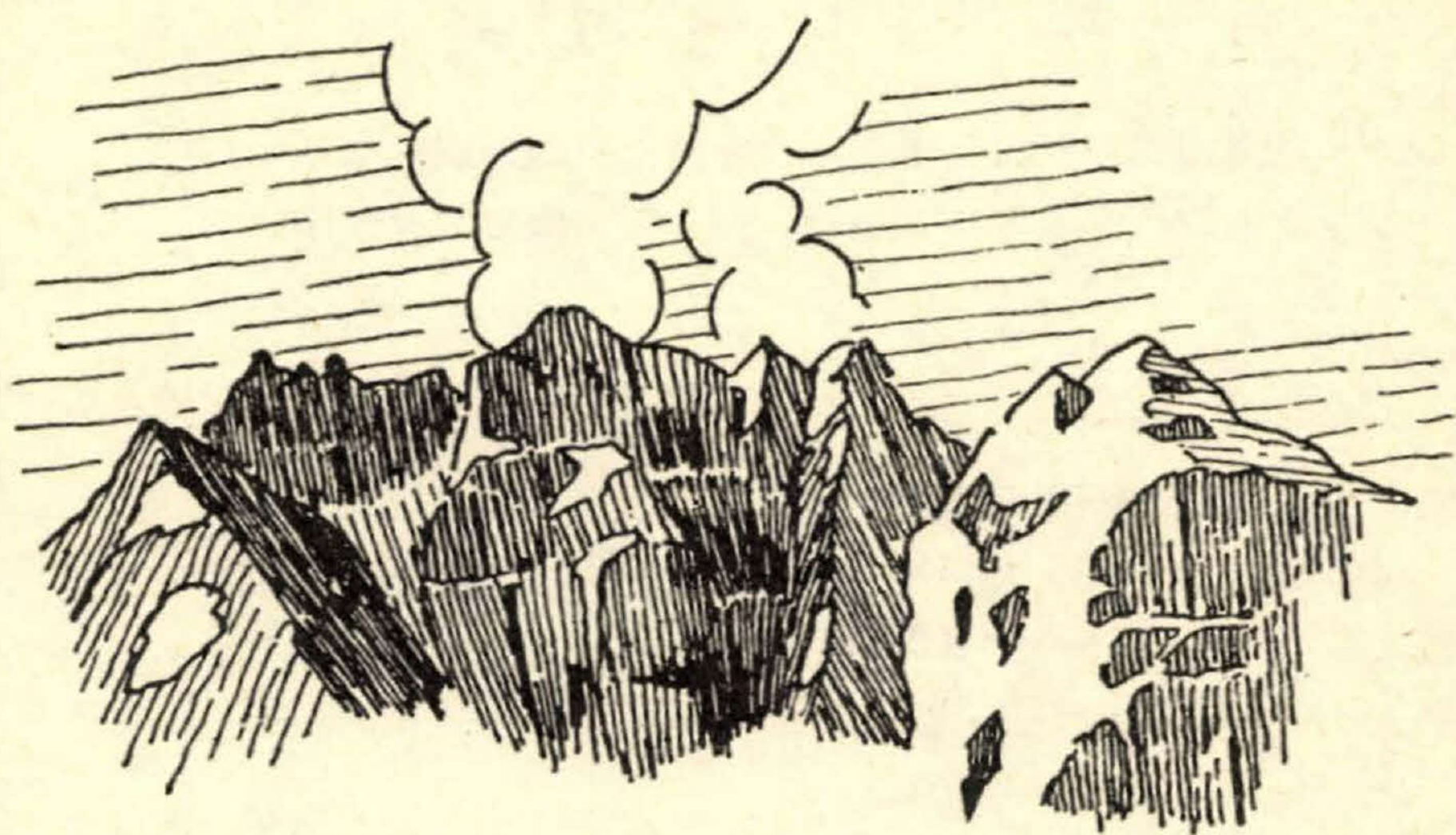
最後に戦後の困難な時代にあつて、常に吾々を御指導下され、時には涸沢迄同行された、太田先生に対し一同に代つて謝意を表すると共に、御健康を祈る次第である。

☆

☆

☆

☆



# 記 錄

1953.4—1955.3

## 登山記録索引

28年、29年度の記録より主なものを選んで地方別に配列した。

ゴシック数字は月名をあらわし、( )内は頁数を示す。

### 北アルプス

- 遠見尾根より五竜・唐松岳…12(79)  
……4(69), 12(101), 12(103)
- 遠見尾根より不帰嶮……………11(98)
- 遠見尾根より鹿島槍・唐松岳・黒部  
……10(94)
- 鹿島槍……………5(83)
- 樽池スキー合宿……12(78), 12(103)
- 樽池より白馬岳……………12(79)
- 劔沢合宿……………7(72)
- 劔より槍ヶ岳……………7(73)
- 槍ヶ岳より船窪岳……………8(89)
- 槍ヶ岳より蒲田川右俣…………7(90)
- 涸沢合宿……………7(87)
- 奥又白合宿……………7(86)
- 壘岩尾根……………3(24), 10(77)
- コブ尾根……………3(20), 10(78)
- 前穂北尾根四峰正面……………8(92)
- 涸沢から穂高……………1(80)
- 前穂北尾根……………3(41), 10(97)
- 西穂—奥穂—前穂……………3(22)
- 奥穂—北穂……………3(39)10(97)
- 霞沢岳・六白山……………8(75)

### 南アルプス

- 北岳・間の岳・仙丈岳……………10(76)
- 甲斐駒ヶ岳・鳳凰山……………10(77)
- 仙丈岳……………3(82)

- 夜叉神峠……………10(96)

### 中央アルプス

- 木曾駒ヶ岳……………9(76)

### 八ヶ岳・秩父方面

- 権現岳・赤岳……………6(71), 10(77)
- 秩父縦走……………8(91), 10(97)
- 大菩薩峠……………10(97)

### 上信越方面

- 谷川岳……………8(94), 9(76)
- 谷川合宿……………5(70), 5(84)
- 志賀高原丸池より草津……………1(82)
- 尾瀬より日光……………10(95)

### 其の他

- 北海道ヌタク・カヌシュツペ縦走  
……7(85)
- 愛鷹山縦走……………12(80)
- 戸隠山……………8(92)
- 六甲山……………8(91)
- 伯耆大山……………8(92)

昭和二十八年年度 (一九五三、四——一九五四、三)

遠見尾根より五龍・唐松岳

石原 脩、中村幸正

四月三日 曇一時小雨

神城(九・三〇)——遠見小屋(一九・一五)

十日分の食糧及び雪洞用具等、総量二十四貫の荷と、腐つた雪は意外に時間を食う。夕刻より降雪。小屋附近の積雪は十二月下旬より五十糎ばかり多い。

四月四日 薄曇り後風雪

遠見小屋(九、〇〇)大遠見(一三、〇〇)——雪洞掘り始む

(一三、五〇)——吹雪の爲引き返す(一六、〇〇)——遠見

小屋(一八、〇〇)

荷を半分上げ、雪洞を設けるべく、昨晚の雪でワカンによる僅かなラッセルで出発。

大遠見北斜面に掘る。この山行の目的の一つは雪洞訓練にあつたので、入念に掘り進めたため、完成前に吹雪かれ引き返す。

四月五日 雪後晴一時曇

遠見小屋(一一、三〇)——雪洞地点——(一四、四五)

午前中荒れた天候も、晝近くには恢復したので、残り荷をまとめて出発。雪洞は二時間を費して完成。棚を二つ及び床の間を加え、まさに豪華なものとなる。ラッセルが意外にあるので、ここで天狗尾根への計画を変更して、五竜、唐松へとする。

四月六日 高曇り後雪

雪洞(六、〇〇)——白岳小屋(八、一〇)——一〇、〇〇)——五龍岳(一一、四五)——雪洞(一四、三〇)

途中から降り出した雪に、視界をうばわれ、ルートに苦しんだ程度、五竜手前ピーク下に、幅五米程のブルー・アイスが小さな雪崩を起す。

四月七日 晴一時曇

雪洞(七、〇〇)——白岳(九、〇〇)——大黒岳(九、四〇)——

(一一、〇〇)——牛首(一三、四〇)——唐松岳(一六、三〇)

——白岳(一八、〇〇)——雪洞(一九、〇〇)——遠見小屋(〇、三〇)

牛首には雪がなく簡単。唐松は期待出来る山ではない。併し大黒岳附近のラッセルには苦しめられる。連日の行動は適当なものであつたが、雪洞生活はそれ以上に我々の体力を消耗した様だ。星明りの撤収、それは我々にとつては暴挙の名にふさわしいものであつた。雪庇の恐ろしさを痛感した事だけが、せめてもの取り柄であつたろう。しかし、あえぎながら見上げた銀河の美しさは今猶眼底にこびりついている。

四月八日 快晴

入山以来初めての快晴ではあつたが、兩名共雪盲気味で、小屋の二階に閉ぢこもつたまま、沈澱。夕暮にアーベント・ロートを眺めながらクラストした雪面でしばらく滑る。

四月九日 快晴

遠見小屋 神城

食糧は三分の一程残り、荷物の総量も未だ十五貫をこえ、生半可なスキーはかえつて時間をとつた。入山時には多くの人を楽しませていたゲレンデにも人影はなく、土を点々とのぞかせていた。テールより水滴の落ちるスキーを背負い、駅を目指す。縦の林の中を縦横に流れる小川も楽しい水量の響を伝える。手を入れるとトロリとせんばかりに軟かい水も、飲めば実に冷たく、久し振りに顔を洗い里入りの仕度をする。(石原記)

### 新入部員歓迎山行

参加者 石原 脩、白川隆夫、鹿俣謙一、須山修平、吉田義則、甘利仁朗、中村幸正、春日井実、松尾寛二、佐藤 博、鈴木克夫、尾身幸次、南竹治郎、新入部員Ⅱ南 亮進、山本健一郎、柴崎新金沢罔雄、大沢伴治、清水 啓、新井 実、大野成夫

四月二十五日 午後立川に集まつて日原ヒュッテ泊り。吉田、松尾春日井、中村は午前中から出かけ真名井沢を登り川乗谷を経て日原へ来る。晩はトリンケンも出て快調な御馳走。

四月二十六日 曇

鐘乳洞前を通り瀧上谷へ入りこれを溯る。途中ザンブとばかり水にとびこむ者数人。尾根に出て一杯水から日原へ下る。

### 上高地(春山合宿雑務整理)

石原 脩、勝田有恒、甘利仁朗

五月二日 晴

沢渡から徒歩にて四時上高地ホテル着。到着後、西穂玄文沢に春山合宿で失つたスキー(片方)を探索に行く。埋没地点は未だ二米の雪で、止むなく引揚げる。

五月三日 晴

午前中、中尾峠に登りスキーをたのしむ。夕方ホテルへ帰ると、この日天狗のコルにて信大生一名遭難とのこと。有能なリーダーの死をいたむ。

五月四日 晴

勝田のみ帰京。他の二人は明神に遊ぶ。五月の上高地には春の気がみなぎつて、そのなごやかさはたとえようもない。(勝田)

### 谷川岳合宿

先発隊 白川隆夫、松尾寛二、鈴木克夫、春日井実  
本隊 リーダー石原脩、勝田有恒、鹿俣謙一、吉田義則、甘利仁朗、南竹治郎、宮川次夫、石和田四郎、中村幸正、栗屋三郎、糊沢泰、山本健一郎、南亮進、中村保、金沢罔雄、渋谷一郎(O・B)

五月二十二日 晴

先発隊四名、五時土合着。マチガ沢旧道出合にテント設営後マチガ沢に入り、正午トマの耳。西黒尾根、マチガ三の沢を経て帰幕。

五月二十三日 曇後雨

本隊土合着。六時、マチガ沢出合。先発の四名は下山。七時頃より雨となる。九時——十二時、マチガ二の沢にて雨中をグリセード練習。午後は雨がますます烈しくなり全員テントに滞在。夕食の炊事は土合山の家まで下つて行う。



五月二十四日 曇後晴

午前中全員マチガ二の沢にてグリセード練習。午後早くテント撤収土合へ下る。西黒沢は増水で渡れず、新道を通る。

この合宿は新人の雪上技術の習得を主眼とし、併せて上級者の一の倉登攀を予定していたが、悪天候のため、上記の如くグリセードの練習のみに終った。(吉田)

## 八ヶ岳

吉田義則、中村 保、南 亮進

六月十四日 高曇り

小淵沢——甲斐大泉——権現岳——赤岳キレット小屋

大泉から二キロばかり行つて道をまちがえてもどつたりした。トレニング不足で少々へばる。

六月十五日 晴 キレット小屋——赤岳——硫黄岳——夏沢峠——

松原湖——小諸

梅雨期の真只中というのに、いい天気めぐり会つたのは幸いだつた。

## 大岳つづら岩 (岩登り)

甘利仁朗、松尾寛二、中村幸正、吉田義則、南亮進、中村保

七月十三日

ひよんなところへ岩登りの練習に出かけた。馬頭刈尾根ハイキングルートにあるが、練習場としては少しアプローチがある。岩の下へ着いたら既に午後だつた。これが機縁でその後、度々ここを訪れることになつた。(松尾)

## 丹 沢

山本健一郎

七月十二日 水無川源次郎沢を登る。夏山のトレーニングとして。

××××××××××  
夏山合宿  
××××××××××

劔沢における六日間の合宿、その間三の窓にテントを出してチンネその他の登攀。終つて、立山——薬師——槍までの縦走。これが今夏山の我々の計画であつた。

この合宿を行うにあたり、まず気がかりであつたことは、我々がここ数年来馴れて来た当部の形式に鑑み、合宿規模が多少とも大きくなりつつあることであつた。それは器具、食糧等の物的面で、又統制、規律という精神的面での不統一に導かれ易いからである。従つてこの合宿に於て我々が目的としたものは、一つに一年部員の技術養成であり、一つには、リーダーシップを全員に徹底し、常時の個人山行、特に冬山への訓練ということであつた。しかし振りかへつて、この二つの目的はどれだけ達せられたかを考えると、二つ共、その三割程度が達成されたのみであつた。その原因としては第一に劔沢合宿期間中、降り続けた雨、次いで中堅部員の欠員、更にリーダーの未熟が挙げられよう。これらの理由により、この合宿は記録的にはどうあろうとも、内容から見ると、決して成功の部類には属さない。又この原因の一端を私自身が荷つたことに深い責任を感じる。併し我々を八日間苦しめた雨だけは、これらとは又別の方面で、益があつたことは忘れられてはならぬであらう。

(石原)

劔 澤 合 宿

参加者 チーフ・リーダー石原脩、勝田有恒、須山修平、白川隆夫、鹿俣謙一、中村幸正、甘利仁朗、春日井実、吉田義則、鈴木克夫、石和田四郎、佐藤博、宮川次夫、栗屋三郎、中村健一、尾身幸次、山本健一郎、南亮進、中村保、柴崎新、金沢罔雄、大沢伴治

各係。会計 勝田有恒

器具 甘利仁朗、山本健一郎

食糧 中村幸正、佐藤博

医療 白川隆夫

記録 吉田義則、春日井実

七月十四日 島々にて食糧調達の為、須山、宮川、栗屋、新宿より先発する。

七月十五日 本隊、急行「北陸」にて上野発

七月十六日 曇後雨

富山——栗巢野——称名——追分小屋

先発の三名とは直江津にて落ち合う。富山にて奥野出迎え。彼の場合内で附近にて食糧調達、栗巢野にて雨。藤橋から称名までバスに乗る。恐ろしく狭い道だ。十四時称名小屋にて昼食、雨は尙降り続く。道のコンディションも非常に悪いので米を約十五斗、小屋に預けて出発。次第にはげしくなる雨の中で、称名の瀧を終始左に見てまる二時間の苦しい登りで彌陀ヶ原に出る。一面雨に煙り、赤土の道はよく滑る。夕暮せまる七時、全員濡れねずみの体で追分小屋に入る。

七月十七日 曇時々雨

二班に分れ、称名小屋、及び一の越へ、夫々一往復

朝から雲低く尙雨が降り続く。時々御世辞の様に雲が切れるが、吾々の希望的観測はすぐに破られてしまう。

須山、鹿俣、吉田、中村(Y)、石和田、山本の六名は一の越へ縦走用食糧の一部をあげる。

石原、甘利他十一名は、昨日に変わらぬ悪路を称名小屋まで下り、米をあげる。一日遅れて出発した白川が夕方追分小屋着。

七月十八日 曇夕刻より雨

追分——地獄谷——劔沢幕营地(三田平)

朝から青空が出て、もう天気はすっかり上つたかとさえ思つたが、薄曇りの日中も終始不安定な雲行き。劔沢の雪は例年より非常に少ない。五時劔沢小屋附近の幕营地に着く。雲は稍々高いが、動きは早く、乗越から吹き下す風は強い。日没頃は西方に青空さえあらわれ、きれいな夕焼けとなつたが、三十分後には、横なぐりの雨と変つていた。夕食は各テントに分散したまま。夜十時頃から雨はものすごくはげしさを加え、テントの第一夜にして、盛んな雨漏りと浸水になやまされた。

七月十九日 終日風雨沈澱

雨もさることながら、強い風を伴っているので炊事当番は小屋まで何度か往復する。浸水甚だしい。

七月二十日 終日風雨沈澱

午後ちよつとの間、雨が止み、テントの張りなおしなどする。夜に入るとまた風雨一入の強さで、テントを持ち去らんばかりであるが、各テント内は極めて元気旺盛。

七月二十一日 終日風雨沈澱

夜の風雨は大変なものであつたが、雨量は少々少なくなつて来た様な感じである。悪天の連続のため、三の窓へテントを出すこととはとりやめることになる。各テントはポールがへし曲つて野保天（最旧天幕）は、頭が地につかんばかりのペシヤンコ、中に人がいるのかと怪しまれるくらいである。濡れものが乾かないのでテント内は、はなもちならぬにおいがただよう。テントは裂け目が出来て、遠慮なく雨が入つて来る。しかし人間はやはりテントより強い。

正午頃、後発の鈴木、春日井の二人が地獄谷より劔沢テントに着く。彼らは地獄谷で二日閉ぢこめられたあげくやつて来た。全国的な猛雨で、紀伊方面では大洪水というニュースが入つた。夕方、炊事のため小屋へ行つたら、まさに足の踏み場もない程人がごろごろしていた。

七月二十二日 風雨、一時止む、終日沈澱

例の如くテント内は甚だしい浸水。今日は慣例を破つて八時に朝飯を食う。晝頃から雨が上り、風の為テントが乾く程になる。雲が高くなつて劔の全容が始めて我々の前に現れる。しかしこの一時的回復も長くはもたなかつた。

七月二十三日 終日風雨沈澱

劔沢第五日も猛風雨に明けける。昨日とは比べものにならない程猛烈でガスが深い。

七月二十四日 晴後曇

まる五日間、荒れ狂つたあとに、漸く雨音を聞かない夜明けが訪れた。風は強く、晴れた為になおひんやりする。この日は全員行動。

◇ 源次郎尾根——頂上——平蔵谷。白川、甘利、石和田、山本

◇ 前劔——頂上——長次郎のコル——平蔵谷。須山、鹿俣、宮川、中村（T）、尾身、南

◇ 前劔——頂上——平蔵谷。

石原他全員。

七月二十五日 快晴 劔沢周辺にて軽い行動。合宿中の活動の遅延と、期日、食糧の関係上、二十六日縦走出発と決する。

◇ 別山バットレス登攀、石原、甘利、中村（Y）、山本、柴崎

◇ 別山、鈴木、宮川他。

◇ 前劔、石和田他。

午後は全員グリセード練習。夕方は前劔が、美しいアーベント・ロートに輝く。夜九時頃、別山の肩より満月が洗々と劔の岩肌を照し出し、満天の星をいただいて美しい。劔沢最初の夜は雨と風とにたたかれ、そしてこの日、劔沢最後の夜は美しい月と星の下で、この岩と雪とランプの世界に夕残りを留めさせる。（吉田記）

### 夏山縦走（劔——槍）

リーダー石原脩、勝田有恒、須山修平、白川隆夫、鹿俣謙一、宮川次夫、吉田義則、中村幸正、春日井実、石和田四郎、佐藤博、中村健一、尾身幸次、山本健一郎、中村保、南亮進、柴崎新、金沢罔雄、大沢伴治

七月二十六日 晴

劔沢幕营地（九、三〇）——立山——五色ヶ原（一八、〇〇）

五色ヶ原では、テント指定地にテントを張つたが、焚木の自由採取は出来ないとのことで、小屋から一束百円也の薪を買わされた。夜に入り針ノ木岳の右肩から昇る月は折しも月蝕で、一入印象深い夕べであつた。月明の中で作つた五目めし、又忘れられない。

七月二十七日 晴

五色ヶ原(八、五〇)——友田さんの碑——スゴ乗越——スゴ小屋(一六、五〇)

五色ヶ原をつつきる縦走路を小屋から約十分、路から離れて右方へ、五色ヶ原の草原が這い松に変わる鷲岳のふもとにある友田先輩の遭難碑を訪れる。この眺望絶佳の地に静かに立つこの小さな碑の前に花と少しばかりの菓子を供え、讃山賦を合唱して亡き先輩の冥福を祈る。

スゴ小屋附近は非常な水不足。全部雪を融かしての炊事だつたが、その雪も残り少なくなくと数日あるかなきかであつた。

七月二十八日 晴一時雷雨

スゴ小屋(七、二〇)——薬師岳——薬師峠(一四、四五)

スゴ小屋から約一時間のところに、大きな雪溪から流れる豊富な水場をもつた快適なテント場がある。昨日出来ればここまで来るつもりだつたが、スゴ小屋までで、皆十分消耗したようであつた。薬師の下りあたりから雷雲がみるみる発達して、雷鳴がとどろくようになる。この日は上の岳までの予定だつたが、薬師峠に下り立つや否や大降りとなつたので、ここに幕営。日没近く雨止む。

七月二十九日 晴一時雷雨

薬師峠(五、四〇)——太郎兵衛平——上の岳——黒部五郎岳——三俣蓮華小屋(一六、二〇)

のんびりした原っぱの中を行くような縦走路。太郎兵衛小屋とは名ばかりで屋根を地上に伏せた程度のものである。上の岳小屋は又土台石だけが残っている。黒部五郎の下りで雨が二三滴来たがすぐ止む。五郎平は快適な環境だ。小屋は倒壊して、屋根が地に這っている。三俣蓮華小屋をあと三十分にして雷雨がやつて来たがテント設営の終るころは美しい夕焼けとなる。

七月三十日 曇

三俣蓮華小屋(七、〇〇)——槍沢小屋(一七、四〇)

双六池で休んでいる間に、鷲羽で遭難のあつたことを聞いた。吾々が、劔沢で降りこめられていた日の出来ごとであつたらしい。西鎌の登りは薄いガスの中。十四時三十分槍の肩につく。槍沢は意外にも雪が全然ない。大槍の穂先に、上から下までつながつて登っている人の列を見ながら槍沢を下る。槍沢小屋附近の河原にテントを張る。

七月三十一日 晴

朝食後解散。吉田、中村(Y)、春日井、石和田、佐藤、尾身、山本の七人は徳本峠を越え帰京。他は上高地へ下る。(吉田)

### 上高地生活 (合宿後)

石原脩、勝田有恒、須山修平、白川隆夫、甘利仁朗、吉沢貞一郎  
柴崎新

七月三十一日 槍沢にて帰京組を送り出して後、上高地に至る。甘利と落ち合い中の瀬にテントを張る。

八月一日 晴 鹿俣は帰京して我も帰心矢の如し。されど一日を洗濯に費して留まる。

八月二日 曇 柴崎のみ早朝西穂までの予定で出発。夜七時になつても帰らず皆心配したが、間もなく、奥穂、前穂を経て岳川より帰つて来た。

八月三日 快晴

蝶・大瀧——石原、勝田

明神岳・前穂——須山、白川

甘利、柴崎 この日帰京。入れ代りに吉沢がやつて来る。

八月四日 薄曇 白川帰京。東京からの一橋大生二名を迎え、明神池附近へ案内する。

八月五日 曇 勝田、吉沢及び客人二名は西穂へ登る。須山帰京。

八月六日 晴 田代池、大正池附近散策。

八月七日 曇後雨 五人で奥穂へ向うも天狗沢出合で雨となり次第に烈しくなるので引きかえす。

八月八日 晴後曇 吉沢は槍、燕へ向けて出発する。客人二人も下山。石原、勝田のみとなり、この日は霞沢から徳本を目指す。

#### ◆霞澤岳（三本槍）・六百山（石原、勝田）

十時出発。ホテル前の八衛門沢を遡行する。二股にてケルンを発見し、向つて左の沢を登る。二・三米の瀧が現われ、一度アンザイレンする。三本槍が見え始めてから丁度二時間半を経過。手が届きそうでも中々時間を喰う。特につめが悪く、ぼろぼろと崩れる風化したての花崗岩が続く。崩れ方が激しいので、全山が動き出しそうな錯覚さえ起す。丁度出発後四時間、草つきの稜を攀ぢて登頂する。三本槍の一つの高さは約七・八米の代物であり、突端に腰をかけ晝飯とした。

六百山は、高々三十分の近距離に思われ、六百往復後、徳本へ下る予定で、二時半に出発したが、尾根筋は全然踏み跡らしいものなく、所々にかもしかのそれらしきものを発見するのみであつた。このあたり、這い松漕ぎは相当なアルバイトである。小ピークが多く、その度に草を分けて三角点を探す。上高地はガスがかかり、何も見えない。二時間後にやつと六百山のピークへたどりついた。徳本へ下る予定は完全に不可能となつたので、五時、上高地の五千尺旅館の裏へ出るつもりで、下り始めた。しかし驚いたことに、支稜が多く、どの尾根が下まで続いているものやら見当とてつかず、再三地図で判断して見ても、たくさんの小尾根が我々の道を迷わせる。尾根はしばらく下ると大絶壁となり、左右にも大きな瀧が予想され、又時間の点から云つても、無闇に下ることはできなかつた。時は既に六時をまわつていた。適当な岩蔭を見つけてビヴァークすることにした。薪の用意をし、尾西ライス一袋（一人分）と若干の水で夕飯を作る。何の気なく持つて来た鉋が、思わぬ役に立つた。交代で火番をして夜を明かしたが幸いにして雨の心配はなかつた。愉快だつたのは小梨平の人の声が、手にとるように聞えることだつた。ふと目を醒ますと、露営していることを忘れるくらいだつた。夜の十二時にあらためて飯を食つた。

八月九日 晴

#### ◆霞澤岳（三本槍）・六百山——つづき

五時、焚火の始末をして下り始める。木から木を伝うような急な尾根は間もなく終る。沢筋に入り、アプザイレンを二度行い、沢よりも寧ろルンゼの大きなものと言つた方がより適当と思われるよう

な、兩岸が切り立つた溪谷を下り続ける。しばらくしてモレーンが現われ、西側より大きな沢が押し出し、合流している。梓川まで尙、高差にして三百米か。ここまで二時間半を要す。昨夜余りよく眠っていないので、やや足元が覚つかない。結局テントまで四時間を要した。中々他とはちがつた面白さのある山歩きだった。午後はゆつくりねる。

八月十日 晴 天幕内の整理などをして一日を費す。

八月十一日 曇 長い延長戦もやつと引きあげる日が来た。一ヶ月になんなんとする山の生活だったが、バスが動き出した時は全く後髪を引かれる思いだった。春山で失った片方の赤さびたスキーが人目を引いていた。(勝田)

### 木曾駒ヶ岳

中村保、他一名

九月十一日 晴 伊那町(六、〇〇)——内萱——野田場——伊那

小屋(一五、〇〇)

九月十二日 曇後風雨 伊那小屋(六、〇〇)——馬の背——本岳

(七、五〇)——宝剣岳(九、〇〇)——赤穂町——(二四、三〇)

朝焼けが暗示していた如く、馬の背にかかる頃より風雨となり、帰路はへそまで濡らす降りだった。

### 谷川岳

中村幸正(単独行)

九月二十三日 晴 土合(五、〇五)——西黒尾根——肩の小屋——

谷川岳頂上(八、〇〇)——一の倉岳——茂倉岳——蓬峠(一一、

〇〇)——芝倉沢出合(一二、〇〇)——土合——(一三、〇〇) 学期試験真最中の憂さ晴し。秋の山は静かで、一人歩きはこと更味わい深い。西黒尾根ではいたちにかかわれて、ちよつとくさつた。

### 北岳・間の岳・仙丈岳

吉田義則、中村保、平井壽生

十月三日 晴

茅野(六、三〇)——高遠——戸台口——戸台(一二、五〇)——

北沢峠——北沢長衛小屋(一九、二五)

戸台から赤河原までのトラック道は、先日の十三号台風で潰滅した直後だった。八丁坂の途中にて日が暮れ、約二時間夜道を辿る。夜十時すぎ、同じ列車で日野春に下車した中村(Y)と石和田の二人が来る。赤薙沢が荒れているとこのことで方向を変じて来たのだつた。

十月四日 晴

北澤小屋(八、一〇)——兩俣小屋(一五、一〇)

N、I、の二人は食糧の準備がないので鳳凰から葎崎へ下る。北沢は途中二回の徒渉。両俣は水、焚木共非常に豊富で実に気持ちよい環境だ。終日人つ子一人逢わない。

十月五日 快晴

兩俣小屋(六、五五)——(左俣)——北岳(一〇、四〇)——間の

岳——野呂川越——兩俣小屋(一六、三〇)

左俣はF2のすぐ上から左側の沢に入る。上の尾根に出たのが八時四十分。申し分ない快晴で北岳頂上の眺望は余す所ない。三峰か

ら馬鹿尾根に続く道は倒木がやたらに多くて歩きにくいこと甚だしい。

十月六日 快晴

両俣小屋(六、〇〇)——大仙丈澤出合——奥仙丈岳(一三、一五)——仙丈岳(一三、三〇)——仙丈小屋

大仙丈沢は下の方は水量が多く、上の方は仙丈の大カールに出たしまうので、沢筋の面白さはない。北沢小屋へ行く予定のところ、気分をまかせて仙丈に泊る。

十月七日 晴後曇

仙丈小屋(六、四〇)——藪澤小屋——北澤峠——戸台——伊那町(一六、二〇)

北沢小屋を出てまる三日間、誰にも逢わなかつた。天候がすばらしかつたせいもあつて、いわゆる南ア的気分を十二分に楽しむことができた。(吉田)

### 甲斐駒ヶ岳・鳳凰山

中村幸正、石和田四郎

十月三日 晴 日野春——甲斐駒——北沢小屋

日野春より北岳を目指して赤薙沢へ向う。途中で十三号台風による赤薙沢の荒廃を聞き、止むなく引き返し、黒戸尾根を登る。甲斐駒頂上ですでに日没となるも北沢小屋まで頑張る。途中、道を求めながら遅々と下つている三人のパーティーに追いつき、同行を求めらる。時間のかかることを覚悟でこれに同行、午後九時仙水峠、十時半頃北沢長衛小屋に着く。

十月四日 晴 北沢小屋——鳳凰小屋

折角ここまで来たが、食糧が不足なので、北岳を断念し鳳凰へまわる。

十月五日 晴 鳳凰小屋——葦崎

朝日に輝く北岳に未練を残しつつドンドコ沢を下る。

### 八ヶ岳

春日井実 南竹治郎

十月三日 晴 清里——赤岳——夏沢峠

十月四日 晴 夏沢峠——松原湖——小諸

登りにはKが、下りにはNが遅れをとり、平地でよく干戈を交える二人、山でも多少そのたたりがあつたか?

### 壘岩尾根(春山偵察)

石原脩、白川隆夫

十月三日 快晴

七時半、木村さん宅を出発。壘岩尾根に天狗沢寄りに取付く。尾根の殆んど末端からなので、猛烈な木登りにしごかれる。森林限界まで三時間の苦闘。更にその上は這い松漕ぎで一時間。岩場を眼前に既に四時半で、ガスも濃くなつたので止むなく尾根上にピバークする。幸い天気崩れる心配もなかつたのでシユラフの中で深い眠りを貪ることができた。

十月四日 晴

七時半出発。垂直の岩塔を左に、草つきまじりの岩場を越して行くくと、七米ばかりぐんと落ちているところに出る。その先は視界を遮つて壁が拡がっている。傾斜は平均六十度位か。正面より取付

き、右へ廻り込み気味に越す。今はザイルは不必要。冬期にそなえ、ハーケン二本を打つ。それより上は岩のごろごろした広い尾根。間もなく稜線へ出る。奥穂で休んでいる間に、下のコブ尾根を登っているAとSを見つける。穂高小屋に四人で泊る。(白川)

### 穂高コブ尾根 (春山偵察)

甘利仁朗、佐藤恭

十月三日 晴 上高地入り、附近を散策。ちらほら紅葉の始まつた秋の上高地はまつたく素晴らしい。

十月四日 晴 ホテル——コブ尾根——穂高小屋

のんびりと岩の感触を楽しんでいたら奥穂の頂で美しく日が沈んでとうとう穂高小屋に沈没した。

十月五日 晴 穂高小屋——横尾——ホテル

小屋から見下した涸沢の谷に、ぽつかりと池が浮んで、なかなかどが真紅に燃えていた。秋の涸沢の美しさよ。

十月六日 晴 徳沢へ移る。誰もいない徳沢の草つ原で終日遊ぶ。

夜、満天の星の下で、ちらちら映る焚火の焰を見つめながらぼそぼそと語り合う。

十月七日 晴 奥又白の池に遊ぶ。ハーケンまで持つて中又に出かけた所が、ルンゼが見つからず、面倒になつて松高ルンゼのスラブを遊びながら池に上る。池はもう初冬の装いをこらし、四峰の壁がばかでかく池にうつつていた。尙、中又は奥又ではなく、直接梓川に落ちているのを知つた。

十月八日 帰京。いつまでもいつまでもいたかつた。それ程に上高地の秋は美しい。帰りに明神で奥宮の祭りの太鼓の音が聞えて来

た。(甘利)

### 春山荷上げ (上高地)

勝田有恒、佐藤恭、中村幸正、平井壽生、山本健一郎

十月三十日 ぼう大な荷物で、乗り換えに苦勞して、十時ホテル着。午後は荷物の整理に費す。

十月三十一日 雨模様となり木村さん方に滞在。翌日、上高地をあとにし、中村、平井はそのまま八ヶ岳へ、佐藤、甘利、山本は松本駅に夜を明かして美ヶ原へ行く。

××××××××××  
××××××××××  
××××××××××

### 樽池スキー合宿

リーダー石原脩、勝田有恒、佐藤恭、甘利仁朗、宮川次夫、南竹治郎、吉沢貞一郎、瀬田宏、南亮進、柴崎新

十二月十七日 曇後雨 先発の石原、甘利、南の三名。森上(八、三〇)——御殿場小屋(一五、〇〇)途中の雨でずぶ濡れになつた。

十二月十八日 晴 御殿場小屋——樽池成城ヒュッテ。

十二月十九日 晴 他全員成城ヒュッテ入り。御殿場の近くまで先発の三人が迎えに来る。早稲田小屋からスキーをはくも、ジグザグの坂道にかえつてへばり、又スキーを担ぐ。月夜の雪道をたどり、午後六時ヒュッテに着く。薪も豊富で、設備もよく、居心地のよい小屋だ。

十二月二十日 一片の雲もない快晴。ヒュッテ近くのゲレンデにて練習。



十二月二十一日 晴一時ガス 勝田以下六名は乗鞍岳を目指して小屋を出発。初めは快晴だったが、天狗原のあたりでガスに巻かれ、登行を断念、吹きだまりのスキートの出来るところで一時間ぐらい練習して下る。

十二月二十二日 曇時々雪

石原、甘利、佐薙、南竹、南の五名は白馬山頂目指して出発したが、途中で雨が降りはじめ、天候状態が思わしくないので、天狗原に至り、登頂を断念して引き返した。

十二月二十三日 雪 昨夕来の雪が尙降り続く。全員小屋から約三十分ばかり登った所のゲレンデで午前も午後も練習。

十二月二十四日 晴 乗鞍岳に登る。

快晴に恵まれ、大挙して乗鞍山頂に至る、

昨日降った雪は一尺以上に達した。帰りの乗鞍の大斜面の滑降は実に雄壮無比。夜はクリスマス・ツリーを飾り、クリスマス・イヴを祝つて乾杯した。讚美歌など楽しく歌い、インスピレーション等に打ち興じて十二時半就床。

十二月二十五日 晴 合宿を終え、勝田以下五名は下山する。ここからすぐ穂高へ廻る甘利、南竹、佐薙は滞在。石原は白馬岳に登頂した。(南竹)

## 白馬岳

石原脩

十二月二十五日 晴、乃至高曇り

ヒュッテ(一〇、〇〇)——乗鞍岳(一一、四〇)——小蓮華(一二、四五)——白馬頂上(一四、五〇)——乗鞍岳(一六、一五)

——ヒュッテ(一七、二五)

朝遅く、単身成城ヒュッテを出る。積雪は締り快調。乗鞍頂上は一面のクラスト。十二時、ここにスキーをデポレ、アイゼンに変えて出発。風強し。小蓮華頂上では高曇りとなる。ものすごい雪煙が舞う。白馬頂上まで坦々たるルート。北アの全山見ゆ。帰路も快調にはかどり十五時三十分小蓮華頂上。始めて疲労感あり、少々ピッチ鈍る。乗鞍の大斜面に至るも、単独行故、スキー事故を用心して歩いて下る。ヒュッテに居残った三人が、快く迎えてくれる。尙、附記すれば、この七時間半のうち、休憩は僅々一時間。悪天に追われての単独行故、そのつもりで参考とせられたい。(石原)

## 五龍岳

石原脩

十二月二十七日 晴 森上——遠見小屋。

穂高へ向う甘利、佐薙、南竹に別れて郷津宅を出る。神城の下川宅にて晝食をとり、遠見小屋へ登る。約四時間かかる。夕刻、スキー一転び。

十二月二十八日 晴後雪 遠見小屋(三、一〇)——スキーデポ(七、〇〇)——白岳(九、〇〇)——五龍岳(九、五〇)——遠見小屋(一二五、二五)

単身、五龍岳に向け早出をする。七時、白岳下にスキーデポ。五龍頂上附近は雪のつき悪し。頂上に三十分滞在、スキーデポに戻る。天候悪化しはじめ、稜線は吹雪き出す。十二時五十分頃中遠見附近でスキー故障す。小屋に到着と同時にあたりは吹雪きとなる。翌日下山、帰京す。

附記。この晴間は偶然にして、今後共期待して出かけてはならぬ。因みに、この記録は今シーズン遠見尾根よりの初登頂であり、一週間前より待機していたパーティーが小生下山の折にも未だ目的を達せずに行ったこと、及び小生の冬期遠見尾根行きがこれで三度目であつたことも附記しておく。(石原)

### 愛鷹山縦走

須山修平

十二月三十日 曇後晴

鈴川——富士岡——桑崎——呼子岳下のコル

桑崎までの道は曲るたびに富士が顔を出す。桑崎から、右の尾根に取付く。呼子岳の近くまで登つたが、又引き返してコルにビバークする。

十二月三十一日 晴

コル——越前岳——呼子岳——割石峠——鋸岳——位碑岳——

愛鷹山——駒石——東椎路小屋敷——沼津

縦走路はちよつとした藪こぎだ。愛鷹神社の前で、伊豆、駿河湾の美しい海岸線を見下しながら晝飯を食う。大晦日のこととて、下まで誰にも逢わなかつた。

### 一月の穂高

甘利仁朗、吉田義則、佐藤恭、南竹治郎

十二月三十日

島々——上高地

梅池から引き続いての三人と、東京から直行の吉田が島々に落合

う。相談の結果、無理をして坂巻までハイヤーを飛ばす。坂巻の宿泊料と、短縮できる一日という時間を考慮すると、ハイヤーの方が得になる。坂巻を出る頃から小雪となる。雪が非常に少なく、釜トンの出口も問題なかつた。荷は九貫程度。ホテル泊り。

十二月三十一日 曇

ホテル——徳沢園

前夜は、秋に荷上げておいた食糧の整理で遅くなり、起床が八時半。明神から穂刈新道に入ったが、よく判らず、暗くなつたので川原を横切つて徳沢園に泊る。元日の登頂を期待していたが、ちよつとがっかり。

一月一日

徳澤(八、三〇)——横尾山荘(一一、一〇)——一三、三〇——

——潤澤小屋(一八、三〇)

朝六時、起きると同時に外に飛び出す。ピリツと鼻毛が凍りつく。マイナス二十五度。一九五四年の曙光が、前穂の東壁をバラ色に染めて、新雪をうつすらかぶつた穂高の岩肌が、非情な世界にそり立つていた。ささやかな元旦の挨拶を交わし、雑煮の腹ごしらえで、早速スキーをつける。ずつと川原を歩いて横尾山荘に入る。第二目標を槍に置いたので、三日分の食糧だけを持って、他をここに残す。北尾根に入っている京大のシェプールのがずつと固く続いてるので、スキーの下手な我々は岩小屋のちよつと先にデポしてストックだけを持ってゆく。丸木橋の附近から、予想に反して雪量が俄然増し、谷はすっかり埋つて、ラッセルが沈痛となる。スキーを置いて来たことを後悔する。奥穂が見え出す辺りで素晴らしいアー

ベント・グリューエンの中に陽が落ちて、暗闇にライトが細々と雪面を照しながら、ももまでの深雪の中を、悲愴な四人のラッセルだけが続いて行つた。

涸沢小屋は雪の重みで山側の壁板はおそろしくしなつて、今にも潰れそうな不安の中に、皆ごそごそとシューラフにもぐる。元日の夜だつた。

一月二日 晴後曇

涸沢小屋(七、三〇)——穂高小屋(一〇、三〇)——奥穂(一一、

三〇)——ジャンダルム(一二、二五)——穂高小屋(一四、〇〇)

——涸沢小屋(二五、三〇)

広大な涸沢の雪をいだいて、モルゲン・ロートに輝く奥穂の頂きが盛んに雪煙をまき上げている。スキーを持つて来るんだつたなあと歎きながら、ワカンには非情にもよくもぐつた。ザイテンに取り付いてからはラッセルも難なく、三時間を要して穂高小屋に入る。この頃から雲行きがあやしくなる。雪はあまりついていず、夏と同様な時間で頂上に立つ。瀧谷はガス。梓の谷にはうす日がさしている。

吉田、南竹は直ちに穂高小屋に下り、甘利、佐藤はジャンに向う。阪大のフィックスがずらりと並び、夏と同じ位の時間しかかからなかつた。ロボの耳は雪少なく、夏道が出ていた。吉田は一人で涸沢岳へ往復し、そろつて涸沢小屋に下る。夜、雪となる。

一月三日 晴一時曇

涸沢小屋——横尾山荘

七時半、北穂へ向うべく小屋を出たが、昨夜の三尺の新雪が、あちこち表層を押し出している。それに天候もあやしくなりそうなので、横尾に下ることに変更して荷物をまとめる。涸沢の雪崩は北穂

沢と穂高小屋の下の沢が最も危険で、北尾根の涸沢側は殆んど落ちないらしい。この日も京大のパーティーはふわふわの雪を押しして五六のコースで登つて行つたが何ともなかつたようだ。夜、相談の結果、四日は晴天ならば槍の往復、悪天なら沈殿して翌日高地へ下ることにきめて、用意万端ととのえて就寝する。梅池から延長戦の三人はそろそろ里が恋しくなつて来る。

一月四日 曇後雪

横尾山荘(四、〇〇)——一の俣附近(五、〇〇)——横尾山荘

(六、〇〇)

二時起床して出かけたが、すぐ天気があやしくなり、一の俣のすぐ手前から引き返す。生暖かく、手袋を外しても手がごえない。漸く夜も明けかかつた頃、山荘にもどる。

終日、音もなく積る。皆、ママの乳房が恋しくなり、明日は下ることにする。

一月五日 快晴

横尾山荘——上高地

期待していなかつただけに、この日の快晴は上高地へ下る者の後髪を引く。川原から仰いだ東壁はすばらしかつた。夜に入つて吹雪となり、久し振りで木村さんと一杯のむ。

一月六日

上高地——松本——東京

丁度、里へ下るといふ木村氏と一緒にホテルを出る。前夜の粉雪が快調に滑つて、二時間で沢渡に近い山吹まで飛ばし、そこからハイヤーで島々へ下る。途中、坂巻の取入口にすごい山崩れがあつた。

後記。六人の予定が四人に減つたので、荷上げの食糧の一人当りの負担が大きくなり、一同ちよつと消耗した。又、これは個人山行だったので、最後の方にたるみが生じ、食糧がありながら山を下りることになり、その点から言つてこの山行は敗北であつたことを認めざるを得ない。それでも、二年生だけの冬山なので、得るところは非常に大きかつた。来年の冬には大いに役立つと思う。とにかく楽しい山行ではあつた。(甘利)

### 岩原スキー行

石原脩、須山修平

一月十六日 快晴 雪は心配した程少なくなり、午前中は岩原で遊び午後から湯沢布場ゲレンデに廻つた。

### 高尾山スキー

甘利仁朗、吉田義則

一月二十四日 土曜の夕刻より降り出した雪は、丁度日曜の朝、都内にて二十センチ、高尾山にて六十センチの積雪を見る。ケーブルで登れば、いたるところゲレンデとなる。雪質良く快調なりき。翌日、南竹、中村(T)、各務、南が行つた。

### 五色温泉スキー

吉田義則 他一名

二月二十一日 晴後風雪。前夜発、板谷駅下車にて九時半頃五色温泉着附近の高倉山までツアーする。所要時間二時間半。途中相当な吹雪。佐藤館泊り。

二月二十二日 雪の降る中をゲレンデにて一日中滑る。雪質は絶好だが、緩斜面のみであるのが玉に疵。

### 丸池スキー場生活・草津へのツアー

山本健一郎、南亮進、柴崎新、各務謙蔵

二月二十三日——二十五日

二十三、二十四日は丸池ゲレンデにて滑る。二十五日は朝八時出発して草津へ抜ける。正午、横手山山頂にて晝食。午後四時草津着。

### 苗場山

各務謙蔵、中村保

三月四日 雪

越後湯澤(七、〇〇〇)——鉢巻峠(一二、〇〇〇)——五合目小屋(一六、〇〇〇)

三月五日 雪

小屋(八、〇〇〇)——神樂の附近(一〇、三〇〇)——小屋(一一、〇〇〇)——一三、〇〇〇)——湯澤(一八、〇〇〇)  
約一尺ほどのラッセルを二人交代で進むも、登るに従つて、風雪がはげしくなるので途中から引き返す。

### 三月の仙丈岳

中村保、各務謙蔵

三月十七日 晴

戸台(九、〇〇〇)——北澤小屋(一七、三〇〇)  
戸台口より鷹岩までトラックに便乗した。

三月十八日 曇 停滞。

午後一時頃から、仙水峠へスキーに出かけるも雪質悪く不調。

三月十九日 晴

小屋(七、〇〇)——小仙丈(一〇、三〇)——仙丈岳頂上(一二、〇〇)——小屋(一五、〇〇)

懸念していた天気も、よく続いた。前日、多少ラッセルをしておいたため、その労はいくらかはぶけたが、小仙丈まで殆んどアイゼンをつけ急坂を喘登。森林限界(約二、七〇〇米)附近でアイゼンをつけ

る。小仙丈岳から本峰手前のコブを三つほど越して登頂。コブの辺は雪底はないが、やせ尾根上は雪がしまつておらず、アイゼンがきかず、慎重に通過せねばならなかった。

三月二十日 風雪後曇

小屋(八、〇〇)——戸台(一四、〇〇)

前夜、北岳か甲斐駒の登頂について協議したが、結局、後日を期し下山する。(中村)

—昭和二十八年年度一般記録終—

### 昭和二十九年年度 (一九五四・四——一九五五・三)

#### 新入部員歓迎山行 (入笠山)

参加者 石原脩、勝田有恒、吉田義則、甘利仁朗、佐藤恭、松尾寛二、高崎治郎(旧姓南竹)、鈴木克夫、宮川次夫、佐藤博、尾身幸次、棚沢泰、石和田四郎、山本健一郎、南亮進、中村保、金沢罔雄、新入部員Ⅱ上原利夫、宮川守久、岡垣治雄、茂木俊明、朝木慶司、長田操彦、西海隼雄、村上光義、南敬介、高島陽一、板谷昇

四月二十四日 終列車にて新宿発

四月二十五日 高曇り

早朝青柳にて下車。坦々たるハイキングコースをのんびりと行

く。期待した「すばらしい眺望」は八ツ、甲斐駒のほかは雲の中。十時、入笠山頂上にて「雲」を眺める。それから午後二時頃まで小屋まえにて交歓スキヤキ・パーティー。アルコールも入り歌も出て大いに愉快。三時五十分青柳発の列車で帰京。(吉田)

丹 沢

中村保、他一名

四月一日 東丹沢、新茅の沢を溯行

#### 鹿島鎗ヶ岳

甘利仁朗、高崎治郎、佐藤博、吉田義則

四月二十九日 高曇り。梁場—黒沢—丸山

黒沢までトラックに便乗する。小冷沢出合から少し入った所にある飯場の跡に泊る。

四月三十日 曇後雪 泊り場——冷小屋

朝雨が降っているので東尾根を諦め、長ザクを登る。天気は全然よくなりそうにない。東尾根第一岩峰が時々現われる程度。長ザクの上は完全にガスの中となり、かなりの雪量。稜線近くでは猛烈な風雪となる。冷小屋附近はまだ雪が二米もある。

五月一日 高曇り、冷池小屋——鹿島鎗北峰——長ザク——大冷沢泊り場。

気温高く、雪はくさり、足首までもぐる。布引岳附近の大冷側へ張り出した雪庇は二十米もあるか。九時十分鹿島鎗南峰頂上。ここから北峰まで行き、そこで別れて、甘利と吉田は東尾根側へしばらく下る。天候悪化の兆と、雪が腐って歩きにくいこと甚だしいので、ジャンクション手前より引き返す。冷小屋から、長ザクを暫く下り、西俣の雪上を飛ばして昨日の飯場に泊る。結局東尾根からキレットへという目論見は天候と、それによる気分とにわざわいされて果し得ず下山することとなった。(吉田)

三 ツ 峠

甘利仁朗、吉田義則

五月三日 曇後雨

前日鹿島より松本へ下り、ついでに三ツ峠へ廻る。松本から上り夜行で甲府にて下車。七時の一番バスが出るまで一眠りする。一時間半もバスに揺られて、御坂峠にて下車。三ツ峠頂上はハイカーが多いところに、九時半ごろから猛烈に雨が降り出す。暫く茶屋に入

りて待機。午後も止まず、仕方なく雨の中をザイルを持ち出し、一般ルート附近に登る。夕刻尙降り止まず、ずぶ濡れになつて小沼へ下る。(吉田)

五 龍 岳

山本健一郎、南亮進、中村保、柴崎新、各務謙蔵

五月一日 曇 神城——遠見小屋

五月二日 曇 スキーにて小遠見往復

五月三日 高曇り 遠見小屋(三、一〇)——大遠見——白岳下(六、〇五)——五竜小屋(七、二〇)——五竜岳(八、一五)——遠見小屋(一一、五〇)——一四、四五)——神城(一五、一五)

遠見小屋が近くなつてから小雨となり暫く本降りとなる。二年生だけの山行だつたが天候が持つて幸いだつた。(南)

上 高 地 ・ 涸 澤

鈴木克夫、春日井実

五月二十日 漸く初夏らしくなつた上高地へ入る。

五月二十二・二十三日 横尾から涸沢へまわり下山する。

谷 川 岳 合 宿

リーダー石原脩、勝田有恒、甘利仁朗、吉田義則、佐藤恭、高崎

治郎、山本健一郎、南亮進、中村保、宮川守久、茂木俊明、朝木

慶司、小林博、長田操彦、二階堂信一

五月二十八日 終列車にて土合へ向う。超満員でみんな立つたまま

眠る。

五月二十九日 快晴

早朝五時土合着。六時マチガ沢出合。テント設営後、石原、勝田及び一年生全員は西黒尾根からトマの耳へ。三年及び二年生はマチガ沢に入る。途中より吉田、山本、南の三名は東南稜を登りオキの耳に出、他の四名はそのまま雪溪をつめる。マチガ沢本谷は大瀧附近に一ヶ所雪溪が大きく切れていた。正午全員谷川岳頂上に落ち合う。午後マチガ沢五の沢上部にてグリセード練習。高崎、中村 T は西黒尾根よりマチガ沢三の沢を下り三時テント着。四年一年は西黒尾根を経て、他は五の沢をそのまま下り、十七時全員テントに帰る。五月三十日 晴後曇

九時より十一時半まで、全員の倉二の沢下部にてグリセード練習。晝食後直ちにテントを畳み土合へ下る。帰りに水上で下車、奥利根館にて風呂を浴び夕食をとり六時の列車にて帰京。

(附記) 二十八日、谷川岳への出発を前にして、東大病院に入院中の太田可夫先生(現山岳部部長) 危篤の報せを受け、夕刻、石原勝田の二人が病院を訪れる。深更まで、非常な危険状態と聞くうちにも、尙一すじの希望をかけて、発車間ぎわ上野駅へかけつける。三十日夜十一時、上野駅から直ちに石原、勝田及び吉田が東大病院を訪ね、稍小康をとりもどされたことを聞いて胸をなで下す。思えば半年以上に亘る先生の御病臥中、最大の危機であつたかも知れない。その後順調な経過を辿つて回復され、再び元気な姿で我々に接していただけの様になつたことは誠に喜びに堪えない。(吉田)

甲斐駒ヶ岳・仙丈岳

甘利仁朗、外四名

六月六日 伊那北——戸台——北沢長衛小屋

六月七日 仙丈岳往復

六月八日 長衛小屋——仙水峠——甲斐駒——葦崎——新宿  
久し振りに長衛さんと会つて茶椀酒を傾けたが、連日の雨。しかし、梅雨時のこの辺は殆んど人にも逢わず、仲々快適である。

鷹取山(岩登り)

山本健一郎、南亮進

六月六日

一日岩を楽しむ予定のところ、途中から雨が降り出し、午前中のみで下山。

越澤バットレス

甘利仁朗、吉田義則

七月一日

夏山のトレーニングの為、午後から出かける。上半は大分悪い。

北海道

鈴木克夫、春日井実

七月六日 雌阿寒岳

七月九日 ヌタク・カヌシユツペ縦走。

早朝、上川駅より道内国体予選のトラックに便乗して、一気に全山縦走を終る。主峰旭岳の雪溪はさすがに凄かつた。

七月十二日 十勝岳、春日井単独行

七月十六日 駒ヶ岳

北海道の山ではとうとう人に一度も合わなかつた。誰にも踏まれたこともない、大きな水芭蕉が咲いていた。十勝岳の白銀荘は三食で百五十円のこととも附記しておく。(春日井)

つづら岩(岩登り)

吉田義則、岡垣治雄

七月十三日 曇

夏山のトレーニング。いつものことながら、岩迄のアプローチがちよつと長い。着いたのが晝近くなつてしまふ。暗くなるまでやる。

××××××  
夏山合宿  
××××××××

本年度は部員の増加に伴い、合宿参加者も二十六名を数えた。合宿は奥又白及び、涸沢に分けて行い最後の数日だけ、全員涸沢にて行動し、後、縦走に移つた。合宿中は概ね天候に恵まれ、特に一年生の基礎的技術の訓練という点では一応の成果を挙げ得た。

奥又白の合宿は二・三年生のみから成り、岩登りを主眼とするものであつた。これは涸沢本隊より三日先に発ち初めから別個に行動を起したわけであるが、小人数でまとまりやすく、行動中、北尾根又は前穂頂上附近で、容易に涸沢隊との連絡もとれ終始合宿全体を一元的に進めることができたと言えよう。

縦走計画は初め後立山を白馬までとしたが、日数その他の関係で鹿島鎗までで打切る事になつた。別に双六池から抜戸、笠ヶ岳を

経て蒲田川へ下るコースも加えられたが、合宿中恵まれた天候は、縦走に入るとすぐ崩れ出し、槍沢、双六池、或は槍の肩にて停滞することとなり、結果的には予定は大いに狂いを生じた。以下二つの合宿及び縦走の概要を記する。

奥又白合宿

メンバー リーダー 吉田義則、甘利仁朗、佐藤恭、松尾寛二、

山本健一郎、南亮進、中村保

七月十五日 夜行準備にて新宿発

七月十六日 晴 松本——上高地——下又の出合

荷が大きい為、二台のバスに分乗。十二時、上高地にて、信越線を経由して来た涸沢先発隊(勝田以下七名)と落合う。穂刈新道に入り、吉城屋から先は一往復半して幕営。

七月十七日 晴 横尾山荘往復

下又出合(二三、二〇)——松高ルンゼ下(一六、〇〇)——奥又

白池(二二、〇五)

縦走用食糧を横尾まで運び、そこで先発隊と別れる。池への登りは夜道を辿ることになつてしまつた。折からの満月に、そそり立つ岩壁は威圧的な美しさを誇つて、特に印象的だつた。

七月十八日 降雨沈澱

七月十九日 曇時々晴

前穂高東壁 吉田、松尾 第一テラスよりBフィース左端を登り

第二テラス中央部よりAフィースに取つき、十一時前穂頂上(第一テラスより二時間)。北尾根を歩き、四・五のホルから雪溪を下る。



四峰 甘利、山本 八時テント発。C沢より明大ルートに取りつき正面寄り（登高会ルート）を登る。十一時登攀終了。四五のゴルを下る。雪溪下降中、山本がシュルンドに突込み腰部を強打したが幸い事なきをえた。

三峰フニース 佐薙、南 先づ五六のゴルより濁沢に下り、先発隊テントとの連絡をなし、濁沢から三峰フニースを登り、A沢を下る。

七月二十日 終日ガス

山本のみ沈黙し、他全員東壁へ向う。九時第一テラス。佐薙、中村はBフニース左端リッジ状よりAフニース右端を登る。吉田、南はBフニース中央や左寄りに取つき、めちやくちやなアンサウンドに胆を冷すこと数度。Aフニースは、右端の佐薙パーティーの後を辿る。甘利、松尾はBフニース正面ほぼ中央部を登る。傾斜強く、浮石だらけのルートでこの方は、ハーケン、カラビナの連続使用。Aフニースは左側から取つき上部で他の四人と一緒に下る。正午前穂頂上。A沢を下る。

七月二十一日 晴

北壁 甘利、吉田 テント（七、〇〇）——C沢——三峰リッジ下（九、〇〇）——前穂頂上（一三・三〇） C沢は二ヶ所切れていたが登行には大して手間どらず。Dフニース直下から見上げた岩壁は圧巻。九時半登攀開始。左上にルートを取り松高カミンに入る。そこから大体直上して草つき混りの数ピッチ。稍右寄りに進むと第二テラス横へ出るがそのまま直上する。登攀最後の三ピッチは岩も大まかで快適なクライミングであるが、二ヶ所ばかり、既に打ち込んであつたハーケンを利用して吊り上げを行う。十三時二十分登攀終

了。前穂頂上にて、濁沢から北尾根を登つて来た石原パーティーが待つていた。A沢を下る。

四峰 佐薙、松尾 明大ルートに登り、五六のゴルより下る。他の三名は五六のゴルより北尾根を歩き沢を下る。

七月二十二日 晴時々曇 沈黙静養、池附近で遊ぶ。

七月二十三日 晴

午後テントをたたみ五六のゴルを経て濁沢へ移動。本隊と合流する。（吉田）

### 濁澤合宿

参加者 チーフリーダー石原脩、勝田有恒、須山修平、白川隆夫

吉田義則、甘利仁朗、松尾寛二、佐薙恭、高崎治郎、吉沢貞一郎

石和田四郎、宮川次夫、山本健一郎、南亮進、中村保、金沢閑雄

茂木俊明、岡垣治雄、市畑進、宮川守久、大庭将六、朝木慶司、

長田操彦、板谷昇、上原利夫、小林博 以上二十六名

□各係 会計、勝田有恒 器具、松尾寛二

食糧、宮川次夫 医療、石和田四郎

記録、吉沢貞一郎 同、金沢閑雄

□先発隊

五月十五日

勝田、高崎、吉沢、上原、岡垣、小林、市畑の七名、食糧調達の為、信越線廻りで午後五時上野発。高崎にて部員中村（Y）の手配により食糧を調達、夜半の信越線に乗る。

七月十六日 晴 松本——上高地——下又出合

上高地にて吉田以下の奥又隊と落合い同行する。

七月十七日 晴 下又出合——横尾山荘——澗沢。

横尾にて奥又隊と分れ澗沢に入る。雪溪は意外に短くなつて池が出てゐる。北穂沢にテント設営。既に先着テント五十ばかり。

七月十八日 霧雨

午前中沈澱、午後三四のころ下でグリセード練習。

七月十九日 晴

北尾根（五六のころ——奥穂）高崎、上原

奥穂 吉沢、市畑

岡垣、小林の二人は、本隊を迎える為横尾へ。本隊（石原以下十一名）この日松本より上高地を経て、横尾出合に至り幕営。

七月二十日 曇、霧雨

□本隊 横尾——澗沢。高崎はこの日下山する。オレンジ色のテントが三張揃う。

七月二十一日 快晴

北尾根（五六のころ——奥穂）石原、勝田、宮川（次）、大庭、朝木、板谷

朝木、板谷

北穂東稜——北穂——澗沢岳。須山、白川、吉沢、岡垣、上原

長田、茂木

七月二十二日 晴

北尾根——須山、白川、茂木、小林

北穂東稜——澗沢岳、石原、勝田、宮川（次）、石和田、市畑、大庭、朝木、板谷。この日金沢が入山。

七月二十三日 快晴

ジャンダルム飛驒尾根——須山、白川、朝木、宮川（次）、上原、

宮川（守）

北尾根——石原、吉沢、長田。勝田、石和田、岡垣は怪我人搬

出の為、徳沢往復。

この日奥又隊の七名五六のころを経て澗沢幕営地着、本隊に合流。

七月二十四日 晴時々ガス

三峰フェリス——須山、白川、大庭

三峰フェリス——山本、市畑、小林

二ピッチで先行パーティーに追いついてしまい、一般ルートの一つ左のクラックにもぐり込んだら連続二回の吊り上げを強いられた。

瀧谷第二尾根——吉田、南、茂木 主稜を下り北山稜を登り初

めるところで、先行の都立大パーティーがPb附近で墜落事故あり、登攀を中止して主稜を引返し、北穂小屋、澗沢同大学テント等に連絡をなす。

瀧谷第三尾根——松尾、佐藤 途中にて右遭難のため引き返す。

北穂——中村、宮川（守）

奥穂・ジャンダルム——吉沢、朝木、板谷

七月二十五日 晴一時ガス

三峰フェリス——宮川（次）、岡垣

三峰フェリス——吉田、上原 一般ルート左の岩の部分がつ

とも下へ伸びているあたりから直上している浅いガリーに取つき、最初の二ピッチにハーケン五本をたたき込んで吊り上げを繰返して一般ルートの広いテラスに出る。ここまで二時間要した。そこから一般ルートを辿り前穂から奥穂をまわつてかえる。

北穂北壁——石原、勝田、石和田

ジャンダルム——山本、南、中村、小林、市畑、宮川、長田

佐薙、松尾の二人は、体育臨時コース・ガイドの為、上高地へ下る。

七月二十六日 晴後曇

涸沢合宿終り、縦走に移る。十一時横尾出合に至り、ここで上高地へ下る中村(T)、上原、市畑、長田、宮川(守)、大庭、板谷の七人と別れ槍沢へ向う。(吉沢)

夏山縦走 (その一) 涸沢——船窪

メンバー、リーダー石原脩、勝田有恒、吉田義則、石和田四郎、山本健一郎、金沢罔雄、南亮進、岡垣治雄、茂木俊明、小林博、朝木慶司

七月二十六日 晴後曇雨

涸沢——横尾——槍沢小屋——幕营地

天候に恵まれた涸沢合宿も、その最後の朝を迎える。八時半、幕营地をあとにして全員横尾へ下る。槍沢大曲りの草つ原にテントを張る。午前中の快晴はいつか雷鳴を伴う黒い雲に蔽われ炊事にかかろうという頃、愈々雨が降り出す。笠ヶ岳縦走パーティーとは双六まで同行の予定。

七月二十七日 雨、ガス

降雨滞在、夕刻雨上り、ガス深し。トランプに打ち興じ、全く時の経つのも知らぬ有様。

七月二十八日 雨、ガス、雨

幕营地——槍の肩——双六池

小止みを見計らつて十時すぎ出発する。槍沢は下つて行く人で大賑わい。肩の小屋では大降り。大変な混雑。一たび西鎌の下りにかかるものすごい風雨だ。双六池畔は草が厚く雨が降つてもテントの中はまことに快適である。

七月二十九日 風雨滞在

終日雨音を聞きつつトランプに暮れる。

七月三十日 雨、滞在 午後は時々鷺羽、笠がみえる。

七月三十一日 小雨、晴のちガス

双六池——鷺羽岳——幕营地。

出発が十時で、野口五郎にかかる手前の中ぶらりんなところにテントを張る。

八月一日 晴 幕营地——野口五郎岳——烏帽子四十八池。

標高二千八百米のテントの朝はすばらしい雲海の上で、槍が立派だ。烏帽子の下を巻いて四十八池に着いたのは午後一時。無数の小池を配したすばらしい築山とお花畑はまさに縦走路中のオアシスである。きれいな水が豊富に得られテントの中はそのまま「花の床」である。

八月二日 晴 四十八池——南沢岳——不動岳——船窪岳——船窪

小屋。

登り下りのはげしいコース。時間は早かつたが新しく出来たばかりの小屋の附近にテントを張る。雨にたたられた為残余食糧は僅少となり、止むなく、ここから下山することとする。

八月三日 晴

七倉尾根を葛温泉へ下る。夜は解散コンパ。翌日全員帰京する。

(金沢)

夏山縦走 (その二)

涸澤——槍——蒲田川右俣——安房峠。

メンバー リーダー須山修平、白川隆夫、甘利仁朗、宮川次夫、吉沢貞一郎

七月二十六日 晴後曇雨

この日は縦走第一パーティーと行動を共にする。夕食後雨となる。

七月二十七日 降雨滞在

七月二十八日 曇後雨

第一パーティーと共に出発。午後一時三十分槍の肩の小屋に寄る。殆んど小雨の中だったが、ここで又、一段と降りがはげしくなる。晝食後ここに停滞と決定、大槍寄りにテント設営。

七月二十九日 風雨滞在

炊飯は小屋で。夜、雷に驚かされる。

七月三十日 風雨滞在

小止みをねらつて大槍にのぼる。西鎌を登つて来たパーティーより双六に停滞中の第一パーティーの消息あり。

七月三十一日 曇のち晴

槍の肩——白出沢出合

朝遅く漸く天候回復の兆。しかし食糧残余二日分のみ、天候とも考え合わせ、結局抜戸、笠縦走を断念し、蒲田川右俣を新穂高温泉に下ることに決定。十時半肩を出発。朝めしは干パン二切れ。槍平

にてもう我慢できずめし炊き、腹ごしらえをする。新穂高温泉に至らずして日没、白出沢出合に幕営。

八月一日 晴 白出沢出合——栃尾

朝めしぬきで出発し、新穂高温泉に着き朝食兼晝食の後野天風呂で長い合宿の汗を流す。蒲田川の河原に一日遊び、夕刻トラックに便乗し栃尾へ。すでに暗くなつていたので小学校に泊めてもらうことにする。合宿縦走を通じての最後の夜は丁度白川氏の誕生日祝い。

八月二日 晴

バスで安房峠を越え中の湯へ。同日夜行にて帰京。

食糧の不足から、始めの計画を実行できなかつたのは非常に残念だつた。特に食糧係として。(宮川次夫)

器具報告

夏山の器具についてはとり立ててここに述べるべきことではないが、二つの並行合宿における主なる器具類の配分は次の通りであつた。

	奥	又	白	涸	沢
天幕	一				三
ザイル (三十米)	三				二
ハーケン	三〇				五
カラビナ	九				三
ハンマー	三				一

鍋 二  
鉈 一  
鋸 一

(註) 奥又白については入山の際三ツ道具の一部を紛失するといふ事件があつたが、計画の遂行には大して支障を来さなかつたのは幸いであつた。(松尾) (以上夏山合宿)

夏期体育臨時コース(上高地)

佐薙恭、松尾寛二

七月二十五日 前期体育科の夏季臨時コースとして初めて上高地に入ることに成り、その手伝いのため、合宿半ばで下山。涸沢より上高地に至り泊る。

七月二十六日 晴のち曇

朝ホテル前で臨時コース参加の学生を迎える。午後中の瀬にテント四張設営。参加人員吉井教官以下二十五名。

七月二十七日 雨

天気が良ければ前穂へ登る予定であつたが生憎の雨でこれを中止。晝近く小降りとなつたので全員焼岳に登る。

七月二十八日 曇時々雨

午前中に解散。松尾も下山。

七月三十日 雨

笠ヶ岳へ廻つた連中が順調に動いていればこの日中尾越えで上高地に来る予定なのでぶらぶら中尾峠まで遊びにゆく。夕方まで待つたが来ないので下りる。

七月三十一日 晴

上高地を出て午後の準急で帰京。道路がこわれたので中の湯、坂巻間は歩かされた。(佐薙)

上高地生活

市畑進、宮川守久、長田操彦

七月二十六日 涸沢を出て横尾で縦走隊を送り上高地へ。中の瀬に小天幕を張る。夜臨時コースのテントに佐薙、松尾氏を訪う。

七月二十七日 雨

臨時コースは全員焼岳へ向い我々はそのテントキーパーをする。一日中晝寝と散歩。夕立でテントが漏る。

七月二十八日 前夜の雨にすっかり濡れ、それに食糧皆無となり止むなく帰京する。(宮川)

秩父縦走

春日井実、他三名

八月三日 上野―熊谷―三峰

八月四日 雲取山―大洞山―将監小屋

八月五日 笠取峠―雁峠―甲武信岳

八月六日 国師岳―金峰山

八月七日 金山―葎崎

金峰からの下りで道に迷い、暗くなりビバークし、翌日明るくなつてやつと道を発見した。道標も不完全なのが多い。(春日井)

六甲ロックガーデン(岩登り)

上原利夫、他二名

八月四日 阪急芦屋川駅に降り立てばすでにお晝。日盛りの道を一時間半にてA懸垂岩。二度ばかり登り下りしてB懸へ。夜はキヤツスルの下で幕営。御馳走が豊富。

八月五日 午前中キヤツスルを登る。二ピッチで上の方が多少困難。懸垂は三十米一杯。午後のはんびり遊んで山を下る。残り二三の岩には失礼した。(上原)

### 伯耆 大山

岡垣治雄、他四名

八月七、八日 共に晴

合宿後、帰省の途中車窓から眺めた出雲富士に魅せられそのまま直行。一般コース。

### 伯耆 大山

大庭将六、他一名

七月十日と十五日 八月の山陰の空はなかなか晴れやらず、二日沈澱。窓外の霧深い木立で鳴く鶯の声にはからずも大いに慰められた。三日目は久方ぶりの上天気。一般コースを頂上へ。午後縦走にかかり、砂すべりを下つて元谷―南光河原―大山寺へ帰る。

(大庭)

### 戸 隠 山

上原利夫、他二名

八月十三日 曇一時雨

戸隠神社奥社を出たのが十時頃、急な岩道を登ること一時間半で山頂の八方睨に着く。晴れておれば後立山連峰が一望のうちにある

のだが残念。前年登った時は八方睨から一時間半程高妻山の方へ縦走して一不動沢から下つたのだが、頂上で雨にたたかれたので晝食もそこそこに下山。戸隠山―高妻山は余程朝早く出発しないとその日のうちには帰れない。(上原)

### 前穂北尾根四峰又白側正面岩壁

甘利 仁 郎

二年前、始めて奥又白に入った時から、四峰正面は私の頭に強く焼きついてた。その後何回かの奥又生活を送るうちに、そして奥又の岩場に親しむにつれて、この壁は恐怖から憧憬へと変つて来た。そして合宿も終つた八月の下旬、昔の仲間二人と共にこの壁をトレースする事が出来たとき、奥又は闘いの場から憩いの場になった事に気づいたのだつた。かつて怖れと憧れをもつて仰いだ壁を、私は今安らぎと憶い出のうちに仰いでいる。

八月十六日 前夜新宿を発ち奥又白岩小屋(梓川出合より稍々上)泊

八月十七日 池に登る

八月十八日と二十日 降雨沈澱

八月二十一日 晴 北条ルート登攀及び下降

池(六、五〇)―第一テラス(八、〇〇)―這松テラス(九、三〇)―四五)―尖岩(一一、三〇)―主稜末端(一二、三〇)―一三、一〇。登攀終了、下降開始)―這松テラス(一五、〇〇)―第一テラス(一六、五〇)―池(一七、二五)―オーダーはA、N、Mの順。ラストのみビブラム、他はトリコニ一七号。

携行品はザイル四十米一本、カラビナ十一、個腰繩三、あぶみ三。青白ハンダ下の這松テラスまでは三ピッチ、八十五米、傾斜約六十

五度。ハーケン十二本位あつた。ミッテルはスライディング(註二)にして一時間半。かなり容易だが、明大ルートより稍傾斜がきつい。テラスでドッペルザイル(註二)に結び直す。直ちに第一のハング三米を吊上げで越し、小さなテラスに三人辛うじて立つ。その上は窓々青白ハングの核心部の四米のハング。あぶみを一個つけピナを六個程使つてのし上る。傾斜約百十度のハングをゆらりゆらりと吊り上がる。足下は約二百米垂直に本谷に落ちて、正に快適(?)。日本でこれだけのハングを持つルートは他にあるまい。ハングの上から右斜め上への七米の登りで尖岩に達し、そこでハーケンを打ち「つるべ」(註三)で後の二人が登る。この様なハングはトップが最も楽であることを知る。尖岩からは右へ五米のトラバース。更に上へ十米の垂直な壁の微妙なバランスクライミング。そこは這い松のテラスになつていてこのルートの終り点だつた。久し振りの煙草が実にうまかつた。そして煙が、吹き上げる冷風にとび散つて行つた。池の反射光、徳沢園の赤い尾根、すべてが夏の空気に融けて昇華してしまいそうな、快い疲労感だつた。

まだ一時だし、それに三人共ピッケルを持たず、そして何よりも四峰の頭まで登るのが嫌だつた。そこで真直ぐ正面を下ることにした。第一ピッチは尖岩までの約十三米。二ピッチ目はハングの上迄の七米のトラバースのアプザイレン。そこはスタンスが二つしかなく、ハーケンに三人でぶらさがり、やつとザイルをたぐる。第三ピッチは這松テラスまで十三米の空中懸垂。第四はテラスの端からの十八米。そこもスタンスが不確実で三人でぶらさがつたハーケンはぐらぐら動き出し、一寸恐ろしかつた。そこからは傾斜が緩くなり、第五、第六ピッチで甲南ルートの第二テラスに下つた。三時間

半ばかりかかりひどく疲れた。

註一、「スライディング」||ミッテルの腰繩をカラピナでザイルに結合する。三人パーティーでも二人の場合と同長のザイルで足りる。

註二、「ドッペル・ザイル」||ミッテルがトップに立ち、二本のザイルを交互にピナにかけることによつて、多くのピナを用いてもザイルの滑りが悪くならない。又、連続吊上げには非常に楽である。

註三、「つるべ」||註二の方法をとつた場合、トップが登攀終了点でザイルから抜け、そのザイルをビレイイングピンにピナで掛け、自分は腰繩でセルフビレイする。次にミドルはラストのザイルを手操つてつるべ式に登る。ラストは通常の場合と同様。

八月二十二日 松高ルート登攀

池(七、一五)——C沢取付点(八、一〇)——第二テラス(八、五〇)——九、〇〇)——松高ハング下テラス(九、三五)——松高テラス(一〇、四五)——一一、一五)——主稜末端(一二、三〇)——一三、一〇)——明大ルート上(一三、二〇)——C沢(一四、二〇)——池(一五、〇〇)

甲南ルートの第一テラスから取付くのが正常のルートであるが、第二テラスまでは別に意味のない部分なので省略し、C沢からルンゼを登つて直接に松高第二テラスに出る。ここでアンザイレン、Aトップで登り出す。第一ピッチは三十五米で容易に這松のテラスに出る。この上が松高のハングになつている。先ず三米のハングをあぶみでのし上り、右上に八米のスラブを登つて、第二の約二米のハングにぶつかる。吊上げながらあぶみに乗り、やつと乗つ越すと、

その上は十五米の垂壁で、松高テラスに着く。このルートで最も悪いのは、この二つのハングを混えたこの二十三米のピッチである。晝のビケットをかじつてからテラスの中央辺のハングに取付く、アブミを使つて簡単にスラブに出る。更に右にカンテを廻り込むと快適な階段状のテラスに出る。次の第四ピッチは松高の所謂「樺の木のスミス・スラブ」であるが、階段状に並んだハーケンを伝つて簡単に越して這松のテラスに出る。そこが終了点だった。呆けた感覚の中に這い松の香りだけが強烈だった。満足感……そして疲労感……。

今日は明大ルートを下ることにした。二十米ずつ四回のアプザイレンで簡単に下る。帰途C沢で岩なだれを起し危うく埋没しそこなかつたが残念ながら(?)無傷心だった。

八月二十三日 下山

尙四峰正面壁ルートについては、わらじ五号、山岳四六、四七年、紫峰十号及び十一号等参照。

### 谷川岳

山本健一郎、他五名

八月二十一日 土合——一の倉沢二の沢附近——土合

八月二十二日 西黒沢より頂上——土合——帰京

二十一日、一の倉ニルノゼを志すも天気悪く二の沢より引き返す午後雨止み快晴となる。山の家脇のテニスコートで熱戦四時間。西黒沢新道出合にテント。翌日は西黒沢——ガレ沢より谷川岳へ、日曜のこととて大変な入出。

### 谷川岳

中村保、他一名

八月二十三日 雨

東尾根を登るつもりだったが、終日雨。一の倉へ出かけ一の沢を半ば登つて引返す。

### 上高地・蝶ヶ岳

春日井実、鈴木克夫、他二名

九月二十三日——二十七日

台風シーズンのこととて、連日悪天。二十六日は暴風雨の明神池。結局蝶ヶ岳のみでかえる。帰京の車中で青函連絡船洞爺丸の沈没を知つた。(春日井)

### 東丹澤セドの右俣

中村保

九月二十日

ナイゲルで登つた為相当消耗。しかし沢自体も可成り悪い。

### 冬山荷上げ及び偵察(その一)

遠見尾根——鹿島——唐松——黒部

吉田義則、高崎治郎、山本健一郎、南亮進、金沢罔雄

十月一日 遠見小屋及び五竜小屋(白岳)に荷上げすべき冬山食糧を一杯つめこんで新宿発。

十月二日 曇 神城——遠見小屋



朝、下川宅で所用を済まし、真直ぐ白岳までと思つたが小雨あり  
遠見小屋泊り。次の日は朝から雨にて滞在。

十月四日 曇後晴

遠見小屋——五竜小屋——八峰キレット小屋。

キレットには水が無いので五竜小屋で飯を炊き、夕刻遅くキレ  
ト小屋に着く。

十月五日 快晴後曇 八峰キレットの偵察——五竜岳——五竜小屋

(炊飯)——唐松小屋

すばらしい快晴。唐松小屋の水も期待出来ないので、白岳沢から  
水を汲み上げて飯を作り、唐松へ向う。夕刻より悪天の兆。

十月六日 降雪風あり。予定の不帰偵察は取止め、雨の中を祖母谷  
へ下る

十月七日 祖母谷温泉——櫻平——宇奈月。信越線經由で翌朝帰京

(南)

### 春山荷上げ (その一)

中村保、宮川守久、茂木俊明

十月三日 小雨 松本——上高地——明神池養魚場

ホテルにて荷物を整理し、十二時すぎ出発。相変らず雨が降り続  
くので養魚場泊りに決める。

十月四日 晴 養魚場——横尾山荘——涸沢——徳沢——養魚場

横尾山荘にて春山用天幕を置き、荷物を調べる。時間が早いので  
涸沢へ。雪は少くナナカマドが真赤で池のそばの岩に寝そべれば秋  
の空は紺碧。テントがただ一つ張られてあつた。

十月五日 晴 養魚場——瓢箪池——明神東稜——養魚場

カメラを携えて遊びに行く。東稜は途中から引き返す。瓢箪池で  
歌を歌い晝寝などしてのんびりする。夜は明神池で舟遊びと洒落た。  
三日月がきれいに映っていた。

十月六日 雨 雨の為徳本越えをやめバスで下る。(茂木)

### 上高地近邊

金沢園雄、他四名

十月十四日 快晴

バスにて上高地着。前日の新雪で吊尾根は白く光つて美しい。

十月十五日 快晴 西穂独標行き。

十月十六日 快晴 焼岳へ登り夕方のバスにて帰る。

### つづら岩 (岩登り)

市畑進、上原利夫、岡垣治雄

十月十四日 曇

岩についたらすでに正午。日没までたつぷりやる、帰路は馬頭刈  
山の肩から出ている尾根を、ライトもなく全く暗中模索の態で下  
山。(岡垣)

### 尾瀬かう奥日光へ

春日井実、他三名

十月二十二日 沼田——戸倉——富士見峠——檜枝岐

十月二十三日 三条の瀧 三平峠——大清水

十月二十四日 四郎峠——菅沼

十月二十五日 金精峠——湯元

毎日一つずつ計四つの峠を越える。塚本閣治氏ならずとも秋の尾瀬は全くいい。色彩のコントラストこれに勝るものがあるであろうか。(春日井)

### 夜叉神峠

中村保、他一名

十月二十三日 晴後高曇

大菩薩峠へ行く予定だったが塩山を寝過してしまつたので仕方なく夜叉神峠へ行く。早朝甲府で降り芦安までバス。峠の附近は紅葉に包まれ、それに加えて新雪の白峰三山。前山の良さを満喫する。

(中村)

### 冬山荷上げ (その二)

須山修平、宮川次夫、岡垣治雄、宮川守久、大庭将六、上原利夫  
十月二十七日 春山荷上げの为上高地へ行く連中と一緒に夜行準備にて新宿発。

十月二十八日 神城——遠見小屋

下川氏宅に依頼しておいた餅を加えて八貫の荷、登り道五時間かかる。

十月二十九日 小雨後快晴 大遠見まで往復

天候芳しからず、須山、宮川(次)、茂木、宮川(守)、の四人だけ荷物の一部をもつて大遠見まで行き、置いて来る。午後から快晴になつてしまう。

十月三十日 午後より曇り後降雪。

遠見小屋——五竜小屋——遠見小屋

五竜小屋に荷上げを済まし、五竜岳、唐松岳をまわる予定だったが、天候が次第に悪化、稜線では相当な風で黒部の谷は真黒。そのうちにあられまで降り出したので、小屋に荷物を下ろし直ちに引き返す。大遠見の辺から雪が降り出し、七時、遠見小屋に戻つた時は一寸程積つていた。全員小屋の二階のコタツを囲み、雪の山小屋の静かな雰囲気を楽しんだ。

十月三十一日 快晴で八方尾根が真白に輝いている。十二時半小屋を出て神城へ下る。(上原)

### 春山荷上げ(その二)、及び偵察

吉田義則、甘利仁朗、佐藤恭、松尾寛二、山本健一郎、南亮進

十月二十七日 吉田、松尾を除く四名が夜行にて新宿発。

十月二十八日 晴 上高地——徳沢——上高地

上高地についた四名は荷物を持って徳沢まで往復。吉田、松尾は残り荷の整理をなし夜行にて新宿発。

十月二十九日 晴 上高地——徳沢——横尾

十一時全員上高地に落ち合い正午荷物を持つて徳沢へ向う。ここで、集積した荷物の半分をもつて横尾山荘に至り、荷物を置き幕営する。佐藤は徳沢からホテルへ引返し泊る。

十月三十日 晴後雨と雪 徳沢往復——穂高小屋

佐藤は横尾まで保荷し帰京。他は横尾から徳沢を往復。食糧燃料器具を含めて合計九十五貫の春山荷上げを完了。松尾は三十一日

朝帰京。残りの四名は二班に分れ、春山偵察の為涸沢に入る。(吉田)

### 春山偵察(その一)——北尾根

吉田義則、南亮進

十月三十一日 雪 横尾——涸沢小屋

朝横尾でも積雪を見、涸沢は風あり時々ガス、午後早く涸沢小屋着。穂高小屋へ登る甘利、山本と別れる。

十一月一日 晴 涸沢小屋(六、三〇)——五六のホル(八、一〇)——

五峰(八、五五)——四峰(一〇、四五)——三峰(一四、〇〇)——

一前穂頂上(一四、三〇)——岳沢——上高地。

五六のホルへの登りは新雪のラッセルで場所により膝までもぐる。北尾根も新雪直後のこととて部分的にかなり悪く寧ろ冬期の状態に近いものだったが、アイゼンは殆んど使用しなかつた。岳沢森林帯上部にて日没。ホテル着七時。

十一月二日 曇

朝ホテル発。ジープにて松本まで飛ばし十一時の準急で帰京。

(吉田)

### 春山偵察(その二)——穂高小屋よりキレット

甘利仁朗、山本健一郎

十月三十一日 雪 横尾——穂高小屋

十一月一日 晴 穂高小屋(八、〇〇)——北穂小屋(一二、〇〇)——一三、〇〇)——キレット——北穂小屋

涸沢岳の下りは新雪の為かなり悪い。併し昨日に引きかえ、すばらしい天気、鎖場をすぎた後の涸沢槍とのホルまでが最も悪く感じた。春山の為に、ルート図を作り、スケッチ、カメラワーク等に忙しく、丁度四時間かかつて北穂小屋へ着く。ここより山本風邪ぎみで不調の為、甘利のみキレットを偵察し、北穂小屋に泊る。暗くなつてから東薬大の方三名到着、甘利あての電報を受け取る。

十一月二日 曇 北穂小屋——涸沢——横尾——上高地

北穂から南稜の下りはボコボコもぐつて消耗した。二、三度足をとられ、したたかひつくり返つてしまった。横尾で急ぎ帰京する甘利と別れ、ここに張つておいたテントを撤収してホテルに泊る。翌日早朝下山。(山本)

### 大菩薩峠

朝木慶司、他二名

十月十八日 晴 塩山側登山口(八、〇〇)——大菩薩峠——(一

一、〇〇)——丹波(一四、〇〇)——氷川(一八、〇〇)

紅葉には多少早い感じ。人があまり多くなくて気分がいい。氷川へ抜けるには結構歩きごたえがあつた。(朝木)

### 奥秩父縦走

朝木慶司、他二名

十月二十八日 信濃川上——信州峠——大日小屋

十月二十九日 金峰山——大弛小屋

金峰の頂上にて三時間遊ぶ。天候、眺望共に申し分なし。

十月三十日 国師岳——甲武信岳

十月三十一日 十文字峠——梓山——信濃川上 (朝木)

### 冬山偵察 (その二)

遠見尾根より五龍岳・不歸嶮

石原脩、高崎治郎

冬山合宿計画中、一隊は、不歸嶮を越えて白馬岳への縦走を予定し、不歸の偵察は荷上げを兼ねて行うつもりだったが、前二回いづれも悪天候でとり止めてしまったので、多少時機の遅れは冬山の鍛錬にならんかと勇躍出かける。しかし山ははるか予想以上に吾々を鍛えてくれることになってしまった。

十一月十一日 曇時々小雪

神城駅——遠見尾根法政小屋

汽車の窓外に後立山連峰の銀嶺が見え初めた時、我々は意外に雪の多そうなのに思わず顔を見合わせた。部屋宛に、前途多難、よつて帰京遅れむ、と大げさな葉書を出す。下川氏宅より三十分も行かぬうちに雪が降り始め、落葉の上の新雪はよく滑る。尾根伝いの冬道を辿る。遠見小屋附近の積雪は一米近くある。小屋はがらん堂で薪もないので法政ヒュッテに御世話になる。

十一月十二日 快晴

法政小屋(一〇、〇〇)——小遠見(二三、四五)——大遠見(一八、〇〇)——西遠見にビバーク(二二、〇〇)

六時起床、秋の荷上げ品の点検などに時間をとり、出発が遅くなる。天気がよいので新雪がくさつて靴の裏にダンゴがつく。小遠見までのラッセルは秋の二倍も時間をとった。大遠見までは雪はますますもぐり、ワカンを持参しなかつたことを後悔する。進行はますます遅々としてはかどらず十分位毎にラッセルを交代する。荷物は七日分の食糧と器具類で八貫程度。六時前に薄暗くなつたので残飯で腹ごしらえをする。星が満天に輝き、無風状態で山は死んだ様な静けさ。幸い十六夜月が出て明るい。午後九時になつても一向に白岳斜面に出る様子がないのでビバークすることに決する。風が多少出て来たので尾根の窪んだ吹きだまりになつた所を選び、二疊ぐらの広さ、深さ一米位の縦穴をピッケルで掘る。穴の周囲には樅の木の枝を立て、防風壁とした。濡れた手袋靴下を乾かそうと火を焚いたが雪上なのに思つたよりよく燃えた。駅でMが差入れてくれたビスケットが、非常食として大いに役立つ。星空の下、雪上に午後十一時就寝。

十一月十三日 曇時々雪

ビバーク地点(二二、〇〇)——白岳下(一五、〇〇)——白岳(二二、五〇)——五竜小屋(二二、〇〇)

エアマットで腰の冷えは防げたが寒さで時々目が覚めた。「オイ！ ナンチク大変だ」という声に起されたら昨夜の雲一つなかつた空が一朝にして黒雲に覆われて小雪がちらついている。シュラフの上にも二糎程積つている。徹收しようと思つたが飯の用意にしばらく時間をとつていこううちに、雲が切れて来たので暫く様子を見、その結果更に前進することにする。白岳下まで三時間のラッセル。しかしそれにも増して白岳の斜面は雪が深く二米もの新雪を押しまくつての登

りは、結局七時間を費した。稜線は一変してすさまじい風。雪も全然なし。暗闇の中から小屋が浮んで来たときは実に嬉しかった。  
十一月十四日 曇

五竜小屋にて終日沈澱。先月荷上げしておいたものが、心なき者の仕業で少し荒されていた。

十一月十五日 曇

ガス深く沈澱。食糧の関係で明日は下山と決める。午後高崎のみ五竜に登る。濃霧のため視界は二・三十米しかきかぬ。夏道通り登り二時間、下り三十分。

十一月十六日 快晴後吹雪

起床二時半。天候がすばらしい星空なので下山の予定を変えて不帰をラッシュする。

五竜小屋(六、〇〇)——唐松小屋(八、五〇——九、四〇)——  
唐松岳(一〇、〇〇)——二峰の頭(一一、〇〇)——キレットの  
底(一二、三〇)——二峰の頭(二三、〇〇)——唐松岳(一四、  
〇〇)——唐松小屋(一四、一五——一五、〇〇)——五竜小屋  
(一七、三〇)

白岳頂上での素晴らしきモルゲンロート。稜線は雪は殆んど無かつたがアイゼンをつける。唐松小屋は薪がなく、荒されていた。キレットの下りは雪が不安定でアイゼンがきかず時間を食う。二百米ばかり下降した所で少し平になるが、信州側は雪崩の危険があり、黒部側は急傾斜で通れず、リッジを這つて通る。(帰りは信州側を通つた)。一ヶ所だけアプザイレンした。天候があやしくなつて来たので、最低鞍部の様子を確かめてすぐ引き返す。二峰の頭で吹雪き出した。帰りは殆んど休みもしなかつたが小屋については真暗だ

つた。

十一月十七日 晴 五竜小屋(九、四〇)——白岳下(一〇、二〇)——  
大遠見(一二、四〇)——小遠見(一四、三〇)——遠見小屋  
(一五、三〇)

遠見尾根は大部分登りの時の足跡が残っていて楽だった。

十一月十八日 晴 小屋発(九、〇〇)——神城(一一、〇〇)  
雪は殆んど消え失せ、黒土が現われていてアツという間に下る。  
里の近くの小川で汚れを落とし、小春日和の気分を満喫する。(高  
崎)

### 三ツ峠岩登り

吉田義則、高崎治郎、山本健一郎、柴崎新、岡垣治雄、市畑進、  
茂木俊明、加地幸雄

十一月二十一日 曇時々みぞれ

前夜新宿を発ち、午前三時富士吉田着。夜道をバスで御返峠へ。  
三ツ峠口の小屋夜明けまで仮睡する。間もなく雨となる。十時半ご  
ろ頂上着。ガスとみぞれの為小屋に暫く沈澱。午後二時ごろからそ  
ぼ降る雪の中を一般ルート周辺を登り、又同所を懸垂で下る。四季  
楽園に泊る。

十一月二十二日 曇時々雪

この日も雪の中、早朝から夕方まで、岩登基本技術の練習をみつ  
ちり行い、午後六時小沼へ下る。(柴崎)

富士山

石和田四郎、宮川次夫

十一月二十二日 小雨のち曇 新宿——富士吉田——五合目佐藤小屋

二合目附近から雪があつた。小屋は日本山岳会の冬山講習の為混雑していた。

十一月二十三日 晴れ微風 五合目——頂上——帰京

六時半出発。大沢は新雪の為頂上まで相当のラッセル。アイゼンは殆んど必要なかった。御鉢まわりは宮川不調の為石和田一人で行なわれてゐる。所要時間一時間弱。同日夕刻帰京。

五日後にあの大雪崩が出ようとは夢想だにしなかつた。(宮川)

### 富士遭難學生搜索應援行

十二月一日

日本山岳会ルームへ、富士遭難學生の搜索應援を申出たところ、同日夜、依頼があつたので当部より石原、須山、甘利、石和田、佐藤、鈴木の六名が参加する。

十二月二日 曇

富士吉田から馬返しまでバスを利用。午後から東大坂に参加して大沢四合附近の発掘搜索に従事する。

十二月三日 曇のち小雪

大沢六合五勺たりで鉄線による作業を行うも空し。

十二月四日 晴

三大学対策会議で搜索打ち切りと決定す。遭難された方々の冥福を祈りつつ山を下りる。夜帰京。(佐藤)

谷川岳

中村保、各務謙蔵

十二月八日 高曇り

天神尾根——谷川岳——西黒尾根

終日落ちついた高曇りで無風。頂上附近は二尺から三尺の積雪。アイゼンを使用しなかつたので下りは多少苦勞した。(中村)

××××××××××  
冬山合宿  
××××××××××

### 計畫概要

本年度冬山は、穂高偏重を避ける意味もあつて、後立山国境稜線を鹿島鎗・白馬間の縦走を行うことに決定された。即ち全員遠見尾根を経て白岳(五竜)小屋に集結し、それより二パーティーに分れ一班は鹿島鎗を登頂、再び五竜から往路を下山する。他は白岳より唐松岳を経て北へ、白馬岳に至り梅池へ下り、スキー合宿の隊と合流することにした。しかし予想以上の荒天に禍いされて、当初の目的は殆んど達せられる事なく敗退を余儀なくされる結果に終つてしまつた。

近年わが部では春山にその主力を注いで来たので冬山の計画に當つては人員、日数、予算、器具面等に多少の制約を余儀なくされる状態にあつた。それは例えば今合宿における様に天幕を使用せずに小屋を使用したといった所に端的に現われているが、これは、この合宿の失敗の一因ともなつていてと考えられる。冬山の天候と積雪に対処する行動は可能なかぎりの弾力性が必要である。小屋と小屋

との絶対距離(しかも夏山を標準とした)はいかにも行動の弾力性を許さない。春山に中心をおいた上での冬山合宿の形をどの様にもつて行くべきか、それは今後に残された一つの課題であろう。

メンバー

チーフ・リーダー石原脩、石和田四郎、南亮進(食糧係)(以上白馬隊) リーダー吉田義則、佐恭薙(器具係)、宮川次夫、中村保(記録係)、各務謙蔵(以上鹿島隊)

行動記録

十二月十四日 晴後雪

神城(九、四〇)——遠見小屋(一五、〇〇)

大糸南線の車窓から後立山の銀嶺が一望され、冬山には珍しい程の好天気で朝を迎えた。しかし歩き出す頃より次第に風向きが悪くなり神城ゲレンデにさしかかる頃から鉛色の空から雪が舞い始める。しかし一帯に雪が非常に少く、この調子なら二日間で稜線に集結出来るだろうと皆大いに張り切る。

十二月十五日 雪後曇後雪

遠見小屋(八、四〇)——保荷地点(一五、〇〇)——大遠見(一六、三〇)——小屋着(一九、三〇)

天気はおもわしくなかつたが石原、石和田、南、中村の四人は出来るだけ荷を軽くしてこの日のうちに白岳小屋へ入る予定で出発。しかし昨夜来の降雪は二尺に達しラツセルの苦勞おびただしく小遠見まで三時間半を費す。そこからラツセルは深くなる一方で捗らず大遠見山の東端に荷を置き、空身で大遠見までラツセルし、引き返す。残りの三名は保荷地点まで食糧、器具等運ぶ。晝食はコッペ

二箇なるも空腹はげしく、帰路は千鳥足で小屋に着く、後発の吉田はこの日遠見小屋に入る。

十二月十六日 曇後雪

遠見小屋(七、〇〇)——保荷地点(九、三〇)——西遠見(一二、三〇)——五竜小屋(一七、三〇)

佐薙、宮川、中村の三人をラツセル・パーティとして白岳下まで繰り出す。石原、吉田、石和田は前者のラツセルの跡をたどり白岳下まで。そこから先は、頭までもぐるラツセルを続けること三時間半。夕闇と烈風の稜線に辿りつき、五竜小屋に入る。

十二月十七日 曇後雪

夕刻より回復に向い夜は快晴となる。

南、各務 遠見小屋——五竜小屋

吉田、石和田 五竜小屋——保荷地点往復

昨日のラツセルパーティーは、遠見小屋に沈殿、懸念した天候は夕刻より気温もぐつと下り、夜半に入つて快晴となる。足下に里の灯がきらめいている。明日の天気は間違いないし、そう思うと何か一大決心を迫られるような緊張を覚える。

十二月十八日 快晴

遠見小屋(五、一五)——五竜小屋(一一、四〇)

遠見小屋の三人は、三時に起きて外へ出て見ると、星の降る好天気。今日で四日目になるが山は一度も満足に姿を現わさなかつたのだ。快晴に気をよくして早朝遠見小屋を出る。中遠見の辺で御来光を拜む。純白の連嶺の一角を染めたと思う刹那、モルゲン・ロートの大パノラマが眼前に展開された。これこそ造化の神の為し得る最大の秀作ではなからうか。赤々々……吐き出す息までも染めて……

石原、南、各務の三人は保荷の爲上から西遠見を往復する。午後石和、吉田、各務、南は五竜岳へ。予定より二日ばかり遅れて全員荷物共五竜小屋に集結した。

十二月十九日 曇後雪、（これより鹿島隊の記録）

白馬隊、唐松小屋へ向う。

鹿島隊、五竜岳頂上まで往復。

荒天の気配なきにしもあらずだったが、日数の余裕も考え合わせ、白馬隊は唐松へ向う。他は、五竜岳まで行き、荷を置いてかえ。風おさまり静かに雪の降る濃いガスの中、左のリッヅに沿って往復する。

十二月二十日 風雪滞在（五竜小屋）

三時起床、天候を見て再びシユラフにもぐる。食糧も多少のねばりを覚悟して沈澱の日は当然のことながら二食に切りつめる。

十二月二十一日 風雪滞在 夕刻より晴れる

前日に似た一日夕刻よりガスが上つたが風は強い。明日は一挙にアタックを決定される。日数、食糧の都合により全員鹿島登頂は断念せざるを得ない状況となつたので、佐藤、中村の二名をアタックパーティとして軽装で鹿島鎗北峰を踏み、他三名は、荷を持つてキレット小屋でサポートすることになつた。日本海に一線となつてかかっている黒い雲が気にかかる。

十二月二十二日 暴風雪、滞在

三時起床、直ちに出発準備と思う暇もなく、小屋をゆすぶり倒さるばかりの猛風雪。冷いシユラフの中で皆えも言われぬ表情。今日の荒天で鹿島鎗登頂断念を迫られる可能性大となる。この日の風雪は実際すさまじかつた。不安定な小屋であつたら小屋もろ共吹き飛

ばされてしまつたかも知れない。後で聞いたところによれば、この日、暴風雪の西穂稜線で、高校生が天幕ごとさらわれ遭難したのであつた。

十二月二十三日 風雪滞在

昨日よりは稍衰えたが、外は歩くことも容易でない程ものすごい風雪。残念ながら鹿島鎗登頂を断念する。

十二月二十四日 曇一時晴 のち風雪

五竜小屋(九、五〇)——五竜岳(一一、〇〇——一二〇〇)——小屋着(一二、三〇)

風が弱まつたので荷下げに出発。小屋からしばらく登ると、雲が切れはじめ、うすいガスのヴェールを通して望まれる雪煙飛び交う五竜が、いかにもヒマラヤ的相貌を呈して、皆顔をこわばらせつつも歓声をあげる。頂上に立つた頃頂漸く雲も四散して雲海上の晴となる。五竜岳より延びる八峰の岩尾根、そして剣・立山・薬師岳・槍ヶ岳の遠望に一同ベルクハイル。そして鹿島鎗が急流に逆らつて微動だにしない巨艦の如く、又、氷山の如く天空を翻している姿をうらめしく見つめる。

ところがここで吾々は、先日荷上げしておいた筈の食糧の一部が袋ごと吹き飛ばされて無くなつていろのを発見した。連日の猛吹雪とは言え、荷の置き場所をもう少し慎重にすべきであつた。又かかると連日の荒天の中に於て、荷重の軽減よりも、荷物と人間が別れ別れになることは、非常に困つた事態を惹き起す可能性があることを考慮しなければならなかつた。この夜はクリスマススイヴ。赤くカビの生えた餅でも、連日のオジヤよりはましたつた。

十二月二十五日 風雪



下山せんとせしも状態悪く引返す

視界数メートルの吹雪について下山を敢行するも、白岳の下り口でちよつとまごつき、一旦小屋へ引返す。そのうちに唐松小屋に閉ぢ込められていた白馬隊の三人が、五竜小屋へ戻つて来た。午後全員揃つて再び小屋を出る。白岳を下りかけると風下の吹き溜りは殆んど首までもぐり、又新雪雪崩の可能性もあり、下りとは言え、自重して、二時間後再び小屋へ戻る。

十二月二十六日 風雪 五竜小屋(八、三〇)——遠見小屋(一四、〇〇)——神城(一七、〇〇)

前日と同様の天気。しかし白岳の斜面のラッセルは雪がしまつて全然楽になつている。遠見尾根は一部、テントを撤収しているパーティーもあつたが、新たに入山した多くのパーティーによつて誠に賑やかである。村へ下りないうちに人里にいるような錯覚を感じてしまふ程。夕刻五時、神城に着き、十数日振りで本当にうまい水を小川の縁にうつ伏せになつて心ゆくまで飲んだ。帰りの汽車は梅池から下つたスキー合宿の連中と丁度一緒になり翌朝全員無事帰京した。(以上主として鹿島隊の記録・中村記)

### 白馬パーティーの行動

メンバー 石原、石和田、南

十二月二十日 風雪 五竜小屋——唐松小屋

終始濃いガスの中、牛首はリッジ通し登る。荷が大きくザイルの欲しい所だつた。

十二月二十一日 風雪滞在

十二月二十二日 風雪

石原、石和田は若干の荷を持つて不帰の偵察に向う。しかし黒部側からの吹きつけものすごく、視界も利かず、約三時間にて引き返す。

十二月二十三日 風雪滞在

十二月二十四日

前日に同じ。夕、ささやかなクリスマス・イーヴの一ときを過す

十二月二十五日 風雪 唐松小屋——五竜小屋

吹雪について白岳へ退却。視界は極めて狭い。強風の為、牛首のリッジ通しは多少神経を使う。十二時五竜小屋にて鹿島隊と合流する。三名で六日間閉ぢこめられた唐松小屋は割合に居住性よく、かなり愉快に沈殿の日を過した。(白馬隊の行動、南記)

XXXXXXX  
冬期スキー合宿——梅池  
XXXXXXXXXX

参加者 リーダー 須山修平、甘利仁朗、春日井実、吉沢貞一郎、瀬田宏、中村健一、山本健一郎、柴崎新、高橋昌彦、岡垣治雄、上原利夫、宮川守久、市畑進、茂木俊明、加地幸雄、小林博、長田操彦、西海隼雄、朝木慶司、南敬介、板谷昇  
十二月十六日

先発隊、甘利、吉沢、中村(健)

信濃森上——梅池成城ヒニツテ

十二月十七日 須山以下十六名、夜行にて新宿発。

十二月十八日 晴後曇

信濃森上(八、三〇)——成城ヒュッテ(一七、一〇)

例年に比べ積雪量少く目的地までノースキー。

十二月十九日 曇

九時より四時半頃まで練習、ヒュッテ前のゲレンデはブツシュが出ている使用できず。午前中基礎技術の練習、早くも負傷者(捻挫)一名出る。午後は柵池ヒュッテへの途中の緩斜面に出て練習する。

十二月二十日 曇時々晴

二班に分れ、全制動ボーゲンの練習、また一人捻挫。

十二月二十一日 曇

負傷者の他、猛練習にバテ込んだ三名も沈澱、前日と同様、先を急がぬ着実な練習。それでいて怪我人が意外に出る。

十二月二十二日 風吹

昨深更よりの風雪猛烈にしぶき、午前中は特に甚だしかった。そろそろクリスマスチャニアの練習始まるも、午後一時練習打切る。

十二月二十三日 風雪

十二月二十三日 風雪  
明方迄風雪。一時小康。沈澱六名を残してボーゲンの練習。晝近くより風雪再び襲来。積雪量は一米に達す。

十二月二十四日 快晴

六名の沈澱組を残して全員乗鞍岳へ向う。天狗原迄は快適であつたがそれ以上は雪固く風も強烈なので一年を除く五名が頂上へ向う。眺望は余り効かず小蓮華迄しか見えなかつた、気温も低く風も強いので十分間休憩した後下山し、天狗原の広漠と拡がる雪原を下る。夜はなごやかな歌声、トリンケンの香りはクリスマス・ツリーを豪華に装飾した部屋に溢れる。

十二月二十五日 風雪一時曇

昨夜よりの風雪で早一尺の積雪を見る。白岳不帰よりのパーティーは依然現われぬ為多少心配する。皆最後の練習とばかり精を出す。

十二月二十六日 曇

二隊に分れて下山す。郷津宅にて、鹿島・不帰隊情報なし、万一の事を考慮して須山以下四名同氏宅に留り他は信濃森上を五時四五分に出る。神城駅にて不測も白岳隊の七名が乗車。互ひの無事を喜ぶ。午後八時松本着解散。(柴崎)

針葉樹會懇親スキー行 (岩原——石打)

参加者 先輩、高見要、大塚武、佐藤勇、望月敏治、横山皖一、

小泉三好、中村正司、南昌宏、宮川立三

学生、石原脩、山本健一郎、南亮進、瀬田宏、白川隆夫

一月二十九日

夜行列車で先輩九名現役六名、計十五名が無事四ボックスに収められたのは、瀬田さんの奮闘のたまもの。先輩高見さんなかなか御見えにならず、幾度もアナウンスしてもらつたが遂に行方不明。

一月三十日 晴

身分不相応なる岩原スキーロッジに入り込み朝食。スキー場を登りつめ沢を一本横切る。あとは尾根通し三時間足らずで飯士山の肩に到着。しばしの練習。下る程に若干先輩、現役の消耗目立ち、O先輩一人元気に石打へ先頭を切つて……。(山本)

西山スキー場

中村保、他二名

二月二十三日——二十六日

四日間フルに練習雪。質上々とは言えなかつたが、連日天気はよく、上達目ざまし。

### 鹿澤スキー（東工大ヒュッテ）

瀬田宏、山本健一郎、岡垣治雄、加地幸雄、茂木俊明、大庭将六

二月二十三日 晴

新鹿沢ゲレンデで遊ぶ。夕方旧鹿沢工大ヒュッテ入り。

二月二十四日 晴

旧鹿沢ゲレンデで遊ぶ。

二月二十五日 晴

茂木、加地、大庭、鳥居峠を経て下山妙高へ向う、瀬田はこの日鹿沢入り、残留者と共に午後ゲレンデで遊ぶ。

二月二十六日 晴

ヒュッテ発——地蔵峠を経て湯の丸山頂上——ヒュッテ。雪少し午後ヒュッテ発、新鹿沢へ下る。（岡垣）

### 八幡平スキー

鈴木克夫、春日井実、瀬田宏

三月十六日——二十日

第一日 屋敷台——もみ山山荘

第二日 吹雪の為沈黙、スキー練習

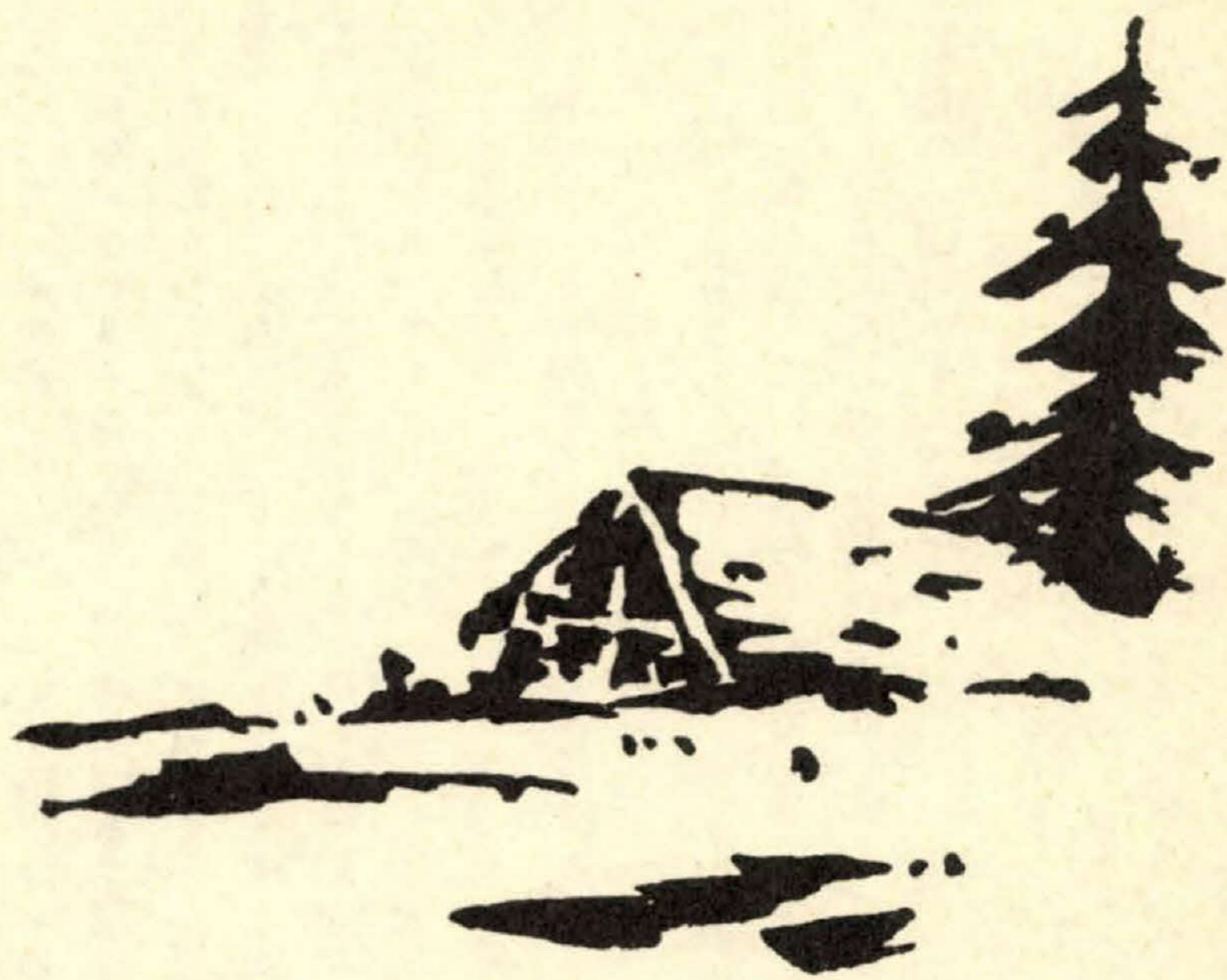
第三日 ——茶臼岳——八幡平——蒸ノ湯

第四日 ——トロッコ——小豆沢

三月でも雪質は粉雪で大変よい。天気さえ良ければ全く危険のない、或いは熟練者にはもの足りないかも知れないコースである。但しこの土地では言葉が全く通じないことを覚悟する必要がある。（春日井）

——昭和二十九年年度一般記録終——





山 小 屋

歓迎登山より歸つて

四月二十六日

岩を一つ一つ跳び渡り、右に左にうぐいすの声を聞いて見上げる新緑と春の空気は甘いミルクの様だし、飛沫を浴びながらよじ登る瀧には、氷の塊をバリバリと噛み砕く清涼味がある。登りつめれば見晴らしはきかぬながら、春の山の最只中に有ることが感じられ、まことに幸福な気持。恋人と黙つて二人並んでいる様な安堵を覚える。薄汚い男ばかりで来ても味気なくならないのは御方々の御人徳にもよろうが、何と云つても春の山の持つ優しくも偉大なる徳のおかげである。今部屋に転がつて書きにくいペンで、しかも天来の悪筆で書いている時も、あの尾根の感激は僕の胸を去らず、美しい木々の面影は恋人のその様に頭一杯に満ちて書く手をにぶらせる。書くならあの山々に letter を書きたい位だ。全く山はいい。これは山岳部生活第一年を終えての心からの感想である。それから、この汚い部屋にゴロゴロしている人間共は又実にいい！ 全くいい！ 大声で泣き出したい位いい！ (Pine)

風薫る—— (部屋にて)

歌声の溶け入り去りて風薫る

X X X

ばあやと猫

最近、家に神妙な、そして愉快なバーヤさんが来てくれた。

House-keeping に追われて悲鳴をあげていた所なので、五十五歳

のバーヤさんが天女のごとく見えた。このバーヤさん、中々信心深く、ここ三年というもの閉めつきりにしておいた仏壇 (一ころその中にねずみが巣を作つてました) をきれいに掃除して、翌朝、「兄さん、オセソコーを上げやしたかいな。」「うん、煙なら台所の七輪のがタント出てますよ」。バーヤさん目ばちくり。

ある日ぼくの机の上にブラ下つている半折の山の写真を持つて来て、深刻な表情で、「兄さん、これどこの山やな。キモチ悪い写真やなと思つてましたんでが、ホレ、兄さん見てごらん、ホーレ。」と指し示す所を見ると「ナ、ねこが居るやろ、ネコが。デツカな猫が、化け猫が居るやろ」。本当！ これには全く驚いた。北穂の涸沢側の岩壁にクツキリとミミもハナも口もあるネコが浮び出ている。「兄さん、ここは、きつとタタリのあるところじゃろもし」。ボクはその猫よりバーさんの方が気味悪くなつて来た。(ムパカバ)

五月八日

梅雨を思わせる様な雨が今日もまた降り続く。又暗くなり、一きわ雨が激しくなつた。ヒーターにかけた水がゴトゴト云い始めた。針葉樹だつたか、会報だつたかで読んだ一句が浮かぶ。

春雨や世帯ずれする部屋かな

まさにこの場の雰囲気ピタリとあてはまる。部屋の机の上にはパンくずや、何やら食物の固体化した奴がこびりついている。世帯ずれとは面白いことを言つたものだ。改作して、

春雨に世帯ずれして部屋かな

としたらどうだろう。(脩)

マチガ澤五月

X X X

万年筆をいじくつて居たら、ふつと東南稜の岩の感触が、指先に戻つて来た。

まばゆいばかりの細い、

途切れ途切れの残雪、

その残雪を結ぶ黒光りする瀧の幾つか。

それ等がゆらゆらと

かげろうの中に浮んでいた。

時々の倉で

ドドーンと雪崩の音が

ひびいていた。

(健一郎)

さても、さても、ものすごき登攀であつた。我等のロック・クラ  
イミング！ 笑う勿れ。

我、平衡感覚に故障ありて、上下前後左右の別判然とせず（思うにポーツとして居つた）。第一ピッチは Yos 殿のトップでぬるぬるしたクロアールをはい上り、第二ピッチで Yos 殿三十分以上の苦闘もむなしく、遂につまつてピナを残して退きし後、小生三半規管の故障をおして出場。Yos 殿苦闘の所にて先ずハンマー一本折る。

何と固き岩よ。とも角もハーケン二本たたいて、その吊上げ、トラバースを完了し、更にピナ一個を使つてようよう最後のハングに至る。約二米の no-hold, no-stance のハング。一本セルフを打つて、越えんとするも、何ともならず。又、吊上げのリスもなく、同じ事ほぼ六回試みて、ようやくにして手あがらず、頭おかしくなる。されど越えられず。ああ、神よ、とバツカスの神に念ずるに、忽ちにして妙案脳中にひらめく。我、直ちにハンマーを肩よりはずし、尻皮の紐をほどきてこれに結び、その一端をザイルに結び、他端のハンマーをヤットばかりに上に投ぐ。四回目、遂にハンマーはハングの上の灌木の上を通つて手元に戻る。されば、これをたぐりてザイルを通し、固定ザイルよろしく、やつさ、やつさとハングをば越す。ああ、バツカスの神、我を愛してかくは益を恵みたり。されど、我はその一ツピチに一時間半を要し、全身これ汗と泥。総身の力つき果てて、これに報いたるなり。

ここ迄読みし人、スポーツの冒瀆と怒る勿れ。皆これバツカスの神のおぼしめしなればなり。かくて、二ピッチ三時間半に亘る苦闘の後、我等二人琴平サマの沢に下りて汗など拭きておりし時、おお見よ。おお……我等のやや先の瀧の下。全裸の女性（ニヨシヨウと読みます）、手を合せて瀧にうたれてありしぞ！ あまりの事に我等両人はつと息をとめ、心臓もとめ、眼のみぱつちりさせて、瞬間化石す。周囲は既に薄暮の気配。ぼうつと霞む梅雨の沢に唯一人、真白き肌を誰恥じず、瀧に打たせてひたすらに、身を浄める女一人。薄闇の中にぽつかりと浮いて白かりき。玉子の如きつやなりき。されど、あまりに清き眺めなりき。しかして、我等をかんいんの気す

ら起させざりき。ただ、あまりの美しき。そしてその淋しき烈しきに打たれたり。鏡花描く世界に似たり。……かくて、うつつならぬ心のまま、我等二人帰途につきたり。薄闇の杉の森の沢身をあとに。一人神に念ずるニヨシヨウをあとに。(Ama)

七月九日 フランス語試験のため、小平に出頭。

試験を忘れ、政治を忘れ、

コーヒを忘れ、見栄を忘れ、

ひたすらに、山を想い、岩を想い、

残雪の冷気を想い、花を愛で、

美しくない彼女の美しい夢でも見て、

天真爛漫に日夜を過せる日々が、

間もなくやつて来る。

白雲を希望の象徴と見、太陽を

美しい青春の情熱と感じ、女性の

中に神経を感じる、山での生活は

何か自分が、廿世紀の人間ではなく

太陽が赤く、オリーブは黄金色に、

輝り映えていた時間の人間に、

なつた様な気がして来る。

己は早く山へ行きたい。

X X X

(Pine)

どうも高山植物の名前が憶えられなくて困る。夏合宿の終り頃には相当程度憶え、天晴れ半人前の植物学者になつたつもりでいるのに、丸一年過ぎてみると、又元の木阿弥になつてゐる。

営林署の奴……夏特有の響きをもつたこの言葉をヒョツと想い出した。今夏の諸兄よ、高山植物に魅せられて追いかけてまわしている内に、緑の腕章をつけた此奴にドヤされぬ様、呉々も気をつけようでは御座らぬか。

三千米近い稜線の岩間に点々と咲きほころぶのをもつてその第一と思うが、群生する彼女等も又大したものである。先ず前者は日本舞踊、後者は日劇ダンシング・チームのライン・ダンスと言うところか。

丁度二千米附近において多く見られる、これ等ライン・ダンス嬢等は誠に体格が良い。高処で憶えた筈の花も、別種かと目を疑う程である。まさに、ミス日本とジエーン・ラッセルとの相異と云えよう。

このライン・ダンスの最も良き劇場は、私の知る範囲では、下又白谷のカール一帯と蝶・大瀧山間であろう。時季が問題であるけれど、まあ七月二〇〜二七日なら間違ひあるまい。それは年によつて幾分かのずれがあるからだ。桜と違い、散り際は余りきれいな代物ではない。ライン・ダンス嬢も、井戸端会議長位になると余り変



りないわけだ。

まあ、営林署の役人と、高山峰（こんなの居るかどうか知らんが、高山か深山をつけておふば間違いなからう）に、鼻をやられぬ様注意して花を楽しむことだ。平地の花より金がかからなくてよい。(Is.)

× × ×

### 懇親スキースケッチ

「上野ステイション」――

七時、八時、学生数名集つて、ポツポツ語るに先輩一人も現れず。九時……九時半、若手のOBさつそうと勇姿を現わす。スチールストックをさげるもの数名……、バンドのやけにそつくり返つたしろものを持ち来るもの……、スピーカーが呼んでいる。「針葉樹会の〇〇さん、ウグイス谷駅側入口へ来て下さい。」学生の気苦労此の辺から始まる。

「銀嶺号」――

アイスクリー！ お嬢さんがやつて来る。国鉄さんの経営のうまさに一驚。――

「岩原スキーロッジ」――

ガラでもない所へ入りこんで学生は勿論、若手の先輩連ヨソユキの顔していり。トイレがあちら式でとまどつた連中も何人かいた事だろう。山キジならなれている人だがね。最低の豚汁なるもの注文。

「登行」――

若手先輩の奇声を久し振りに拝聴。南のトップを進む姿が印象的で素晴らしい。

「稜線でのスキー練習」――

〇〇が転んだら□□が又転び、そしたら△△が笑つた途端、ひつくり返つた！

「下降」――

ヒューヒュー云い乍ら降りる老人連中。「もう懇親スキーなんかツ」と思つてるかどうか。M中村さん「いや早、よく懇親出来ました」と。(Seil)



# 部誌



自 昭和二十八年四月  
至 昭和三十年三月

## 昭和二十八年年度

### 部員

三年 石原 脩 (代表)

勝田有恒 (マネージャー)

須山修平 (器具)

奥野巖根

二年 甘利仁朗 (器具)

南竹治郎

松尾寛二 (図書兼記録)

春日井 実 (図書兼記録)

鈴木克夫

宮川次夫

吉沢貞一郎

栗屋三郎

中村健一

瀬田 宏

一年 山本健一郎

中村 保

各務謙蔵

大沢伴治

白川隆夫

鹿俣謙一

吉田義則

佐藤 恭

佐藤 博

石和田四郎

中村幸正

榎沢幸泰

尾身幸次

南 亮進

柴崎 新

金沢 囿雄

### 新學年初顔合せの會

四月十三日 於国立部室

新入部員募集計画について。

### 新入部員歓迎会の件

十八日(土)午後三時より、夕食を共に。

### 歓迎登山の件

候補地として、奥多摩、日原ヒュッア、獅子口小屋。丹沢、富士見小屋。中央沿線では、大菩薩、乾徳、甘利山等が挙げられる。

期日 四月二十五日(土) 二十六日(日) 一日半又は二日行程。

### 四月十五日

小平にて部員募集のオリエンテーション行わる。

春山で焼けたそのままの真黒顔を臆面もなく、石原が壇上に立つて名演説を一席。終つて中庭で部員募集を行う。新入部員十二名を獲得す。

### 四月十六日

国立もすでに葉桜の候となつた。部室周辺の木々も弱々しいが、美しい緑の芽を出して、数ヶ月去つていた光線を右に左に張り出して吸つている。早いものだ。此れと同じ状態の中に身を置くのは三度目になる。最初はおずおずと此の部屋に始めて案内された時だつた。明後日、同様の気持を抱いて、不可思議な伝統と新天地への入口をくぐる者が十数人居る。彼等もあの時の私と同様、天井の無い、黒っぽい此の山小屋に戸惑し、疊の上に座つた自分の身体をもてあますに違いない。二度目、其れは希望と活気に満ちていた。又始めて此の部の一員として自覚し、出発せんとする刹那であつた。又一年が過ぎた。私が *top* から *last* に退く時が来た様だ。皆の話を只だまつて聞いていると、頼もしさがますます私の触感にコッソと当り、安心感が全身をめぐる。だが一人一

人を熟視すると心の一角から不安の層雲が拡がり出すのをどうする事も出来ぬ。先日、昨年にも増した入部希望者を迎えたが、小平に於ける二年部員の立場は如何に重要なものであろうか。実際に於て一年と最も親密となり最も大きな影響を与えるものではなからうか。一年の時はかたまつて行動していた者が二年になると三人又は二人、一人と別々に行動せねばならぬ。指導的地位に立たされた為の変化である。そこで私は個人個人の力量を非常に注意深く見る必要が出て来た訳である。私が多少不安な気持ちに追われた事も判るであろう。同じ体臭の爲極く自然に、衆々と山に溶け込んで登つて行く人間に早くなつて貰いたいと云うのが私の結論とならうか。春夏秋冬、そして岩壁、沢、尾根道、ヤブの中と総てに溶け込める者が理想であるがその中の一つでも良い、其の内の一つでも達成した時、その人間は部史上の尊敬すべき先輩と肩を並べる事が出来るのではなからうか。(石原)

### 新入部員歓迎會

四月十八日(土) 於部室

出席者 石原、勝田、鹿俣、渋谷、白川、須山、奥野、鈴木、春日井、吉田、中村(Y)、松尾、甘利、佐藤、栗屋。新入部員南、柴崎、山本、大沢 他五名

### 定期部員集會

四月二十日 於部室 出席者十七名

歓迎登山の行先を日原小川谷に決定。

二十五日(土)午後一時半部室に集合。

同日は日原ヒュッテ泊り(一泊)

新入生に持参品の注意あり。

五月連休山行予定

上高地 石原、勝田、甘利

富士山一泊乃至二泊 吉田、南竹

### 新入部員歓迎山行

四月二十五日日原ヒッテ泊り、二十六日小川谷から滝上谷へ。

参加者 石原以下二十一名、うち新入部員八名。

### 横山先輩訪問さる 四月二十五日

十時三十分来訪。丁度歓迎登山に行つたらしく誰にも会えず残念。久しぶりに山小屋に泊る。相変わらず異様な香りがただよっているが此処に一年半近く住んでいたのだから我ながら感心する。山に行きたいが身体のコンディションがベストでないのだからなにか実行出来ぬ。暇のある連中は山の話など持つて遊びに来て欲しい。Nもようやく仕事に慣れたので訪問されても大丈夫だ。

(東京海上 横山)

### 中村先輩訪問さる (四月二十六日)

歓迎登山に昨日出かけたとのこと、お羨しい限り。ともあれ元気な皆さんの文章を読んでみると我がことのように嬉しい。新人の方々も多く見えたとのこと、是非顔を見たいものである。若き時代は二度と来ないと云う事は実に切実な話である。思う存分青春

の実を味わつていただきたい。学生時代にやつて来た熱とファイトは社会生活に於ては益々力強い骨柱となつて役立ちそうだ。小生もあまり山に登れなかつた方だがファイトと自信に關しては他の誰にも負けないつもり。今年こそ山岳部を楽しめるものにすると同時に、更に充実させて戴きたい。

会社というけむ臭い所に居ると岳生さん達が出来るだけ岳臭を匂わせてくれることに憧れるらしい。僕もその一人。学校でもさぼつて色々と話しを聞かせに来て戴きたい。何よりも楽しみにしている。

小生これからも会社の山岳部をきたえ直すつもり。まあ皆、元気で張切ろう。若き日を悔ゆるなかれ。

(M・NAKAMURA)

### 南先輩訪問さる (五月十日)

久しぶりに部室に泊る。やはり帰つて来れる部屋のあることは有難い。

部も新入生が多勢入つて、一層賑やかなになる事だろうが、又それなりに上級部員の悩みも多かろう。だが少しづつ良くなつて行けばいいのだからじつくりやつてくれ。

### 定期部員集会

五月十一日 於部室 出席者二十四名

夏山パンフレット作成し、計画の概要が説明される。

### 谷川岳合宿 (五月二十一—二十三日)

石原、渋谷以下二十名。二日間雨にたたかれ、所期の成果挙げ得ず。

### 針葉樹会

六月十八日 於協和会館虎の間

出席者 中川孫一、近藤恒雄、増山清太郎、望月達夫、森脇芳之、榎本直司、大塚武、小林茂雄、伯耆豊次、樋口洪、関恒義、石井左右平、伊藤恙生、小泉三好、横山皖一、望月敏治、中村正司、南昌宏、他に部員五名

### 映寫会行わる(六月二十六日)

於国立部室 出席者伊藤先輩他部員九名、それに太田先生と御家族。

エテさんの八ミリを持つて来て昭和十年、十二年頃の合宿生活を鑑賞する。部室も多少キレイになつたが活動(映画!)をやるには適していない様だ。ギョーちゃん可さんにつれられて観に来たが随分大きくなつていて、全くギョツである。蒸し暑い夜である。上高地あたりをごろつきたい気がそぞろに起きる。

(HIBOU)

### 六月三十日

この所寄附問題並びにテントの件で先週は授業に出たのは火曜日のみと云つた有様。過労なる事は身を以つて感じ居り候……

その甲斐あつてか昨日八重洲口高橋にてテント(ウイムパー六、七人用内張付)が出来上つて、小生と石原とで、担いで来た。東京駅をカツギ屋 *like* な恰好はどう見ても余り良いものではな

かつたが、とにかく一大懸案たるテントが出来たので一安心した金は払つたかつて? まあ御想像にまかせよう。(A・K)

### 夏山合宿

八月十六日 劔沢合宿と槍への縦走(七・一五—八・一)石原以下二十二名参加

久し振りに部室のとびらをたたく。たいたつて中に誰がいるわけじやなし、馬鹿な奴だよオレは。いろいろな事情でこの数ヶ月間山を離れてしまつたことは実に申訳ないことでありました。これからは一つふんどしをしめなおして、あらんかぎり山に登る覚悟でやんす。どうか仲間の諸兄よ。この馬鹿な、だが愛すべき一人の山男のカムバックに期待してくれ。(K. Sanagi)

### 針葉樹会例会

九月十七日 於如水会館矢野記念館

出席者 中川孫一、増山清太郎、森脇芳之、佐々木誠、大塚武宮城恭一、佐野茂雄、鈴木肇、清水一郎、石井左右平、佐藤勇、望月敏治、横山皖一、小泉三好、渋谷一郎、中村正司、河野重栄  
南昌宏、部員五名

夏山報告及び冬、春の計画発表など。

### 九月三十日

石原、白川の二名、春山用(第一回)荷上げと同偵察の為上高地出発する。

### 定期部員集会

十月十二日 石原以下十三名出席

一、岩登りトレーニングについて。

二、富士強化合宿計画について。十一月下旬、富士六合目附近に幕営して、雪上技術の基礎訓練、耐寒訓練を行う。

三、冬期スキー合宿計画について。出発を十二月十八日、二十日より五日間樽池生活と決定す。

四、今後の春山用荷上げについて。上高地ホテルまでの本格的荷上げを今月末に行う。

十月十三日

J・A・C 学生部懇談会に石原が出席、終戦後の部活動についての報告をまとめて出す。

十月二十九日

春山荷上げのため、勝田以下五名上高地へ。

月見の宴

十一月三日 於部室

出席者 中川孫一、村尾金二、五十嵐教馬、近藤恒雄、伊藤恙生、望月敏治、横山皖一、中村正司、部員は石原以下十九名

月のない御月見宴ではあつたが、例年のごとく老若相交々楽しい一ときを過ごす。中でも近藤先輩より、部員が会社を訪問の際は、おすしを御馳走して下さるといふ約束をいただき、今日一番の拾いもの一同大喜び。

宴には参加されなかつたが、右のほか川村、佐藤、久保、山崎の各先輩も部室に見えられた。

野球大会(十一月九日)

部員間の相互交流を目的として、小平にて前期対後期の野球大会を行う。嘗つての名ピッチャーも年老いては如何せん。若いものに花をもたせてやつた。

定期部員集會 十九名出席

一、富士合宿について詳細な打ち合わせと注意あり。

二、本年の冬山研究テーマを次の通り決定す。

雪洞について(報告予定者、甘利)。凍傷について(中村、佐藤)。その他の冬山の危険について(佐藤)。

富士山強化合宿

十一月二十七—三十日 参加者 石原、吉田、甘利、南竹、佐藤、松尾、石和田、南、各務

スキー合宿最終打合會

十二月十七日

合宿本部を北区王子二ノ二 白川隆夫方とする。

スキー合宿本隊出發

十二月十八日 参加者 石原、勝田、佐藤、南竹、甘利、瀬田吉沢、宮川、柴崎

春山合宿打合會

三月十一日 出席者 石原、勝田、須山、白川、甘利、佐藤、吉田、松尾、山本、南 出発を十五日に延期することに決す。

## 春山合宿最終打合せ

三月十四日 合宿参加者全員出席

半年にも亘る春山の準備……愈々出発の日が到来した。貴重なメンバーの欠員、プランの組換え等によつて合宿そのものも、所期の形より幾分弱体化してしまつた事は否定できない。しかし、今我々の前にあるもの、それに向つて邁進しよう。我々がこの合宿プランの過程に於て経験し得た最大のファイトを以て。(吉田)

## 春山合宿出発

三月十五日 二二時一五分新宿出発

# 昭和二十九年

## 本年度部員及び役員

四年Ⅱ石原脩(チーフリーダー)、勝田有恒(マネージャー)、須山修平、白川隆夫、奥野巖根、鹿俣謙一

三年Ⅱ吉田義則(サブリーダー)、高崎(旧姓南竹)治郎(サブマネージャー)、甘利仁朗(器具)、佐薙恭(図書)、松尾寛二(記録)、宮川次夫、石和田四郎、鈴木克夫、吉沢貞一郎、春日井実、瀬田宏、中村健一

二年Ⅱ山本健一郎(器具)、柴崎新(記録)、各務謙蔵、南亮進(前期会計係)、中村保、金沢罔雄、中村幸正

一年Ⅱ岡垣治雄、宮川守久、上原利夫、茂木俊明、朝木慶司、長田操彦、小林博、大庭将六、市畑進、加地幸雄、西海隼雄、板谷昇、南敬介、村上光義、二階堂信一。

## 第一回部員集会

四月十三日 国立部室

出席者 石原、勝田、白川、甘利、佐薙、吉田、松尾、吉沢、南

新入部員募集に際し二十名を目標とする。新入部員歓迎コンパを四月十九日(月)三時より国立で行う。歓迎登山目的地は入笠山。針葉樹又は年報編纂の件については、須山の東京を待つ。

本年度合宿地候補

夏 涸沢、奥又白の二班。縦走は三パーティ位に分れるのではないか。

冬 後立山、鹿島槍近辺が有力である。

春 穂高。

## 新入部員募集

四月十七日 小平分校々庭

分校講堂におけるオリエンテーションに石原が立つ。入部希望者二十二名に達する。

## 新入部員歓迎コンパ

四月十九日 国立部室(参加者)三十二名

歓迎登山(入笠山)は、四月二十四日夜新宿発とする。費用は五百円。

本年度役員決定を石原より発表される。

## 新入部員歓迎登山



四月二十四、五日 入笠山。(参加者) 三十二名。内新部員十五名。

### 臨時集會

四月二十七日 国立部室

(出席者) 石原、勝田、吉田、甘利、松尾、佐薙、高崎、南、山本、各務、宮川(守)、上原、小林、市畑

連休山行相談。鹿島槍四名、五竜五名、丹沢二名、上高地二名

### 谷川合宿

五月三十、三十一日

(参加者) 石原以下十五名。

一年部員の技術訓練及び合宿経験を積み上げてゆくことを目的とする。

### 定期部員集會

六月七日 国立部室

(出席者) 石原、勝田、須山、白川、佐薙、高崎、松尾、春日井、吉田、山本、南、上原、宮川(守)、村上、岡垣

夏山合宿計画 係決定、器具Ⅱ松尾、中村(T) 食糧Ⅱ宮川(次)、南 医療Ⅱ石和田

合宿の栞(1) を作製し、全部員に配布すること。これには行動予定、日時、装備、注意書き等、山岳部歌曲集、部員住所録を入れる。

### 本年度第一回針葉樹會

六月十日 於如水會館日本間 後六時—九時半

(出席者) 會員Ⅱ近藤恒雄、増山清太郎、大塚武、宮城恭一、清水一郎、久保孝一郎、川村喜作、小林茂雄、樋口洪、望月敏治、小林広、小泉三好、横山皖一、中村正司、南昌宏、原田一郎、荒砥通虎の諸氏

部員Ⅱ石原、勝田、須山、白川、吉田、高崎、南

本年度会費の件は昨年同様一人壹千式百円とし、太田先生御見舞金一口二百円と共に集めることになる。

昨年度決算報告と本年度予算報告。昨年度冬よりの山行報告。年報発行については、針葉樹會報に載せることに変更される。其他幹事委任の変更等。

### 小平部室開きコンパ

六月十一日 小平部室

(出席者) 中村讚治先輩、石原、勝田、須山、高崎、甘利、佐薙、吉田、松尾、福田、南、山本、中村(T)、柴崎、上原、宮川(守)、村上、茂木、板谷、西海、二階堂、長田、小林、岡垣、高島、市畑

今度、小平分校にも部室が出来た。場所は食堂裏の二階で、一時寮であつた十疊敷の部屋。

### 六月十五日

針葉樹會費集金に關し、先輩宛發送する書類を作製。これを近日中に發送して集金をはじめ。書類内容は、昨年度針葉樹會費

決算報告。今年度部予算案、針葉樹会費集金の趣意書、太田先生御見舞金徴収に関する趣意書。

### 定期部員集会

六月二十一日 国立部室

(出席者) 石原、勝田、須山、白川、佐藤、高崎、甘利、吉田、石和田、松尾、中村(K)、宮川(次)、吉沢、山本、南、中村(T)、金沢、上原、宮川(守)、村上、二階堂、茂木、朝木、長田、小林、板谷、岡垣、市畑

夏山合宿の参加者を確定。合宿費千七百円は二十八日迄に納入する。なお、奥又白隊、濁沢先発隊のメンバーを決定。

### 定期部員集会

六月二十八日 国立部室

(出席者) 石原、勝田、須山、鹿俣、高崎、佐藤、甘利、松尾、吉田、宮川(次)、山本、南、中村(T)、柴崎、上原、宮川(守)、板谷、朝木、小林、長田、村上、茂木、岡垣

夏用新テント五張が出来上った。五四―Aから五四―E迄、A、Dはオレンジ色でよく目立つ。A・Bが七・八人用、C、Eは五・六人用。合宿費徴収。器具、食糧の報告と配分。

### 夏山合宿打合せ会

七月十一日 国立部室

(出席者) 石原、勝田、須山、白川、吉田、甘利、佐藤、松尾、高崎、宮川(次)、吉沢、山本、南、中村(T)、上原、宮川(守)、

茂木、朝木、板谷、岡垣、市畑、長田、金沢、大庭  
濁沢先発隊は、高崎で米を受け取る為上野より信越線經由で行くことに決まる。

梅雨あけが遅れる関係上出発日を延期する。  
奥又、濁沢先発両隊 十二日↓十五日。  
濁沢本隊 十六日↓十八日。

### 夏山合宿出発

七月十五日 新宿より奥又白隊七名。上野より濁沢先発隊七名  
七月十八日 新宿より濁沢本隊十一名。

### 部員總會

十月十八日 国立部室

(出席者) 石原、吉田、高崎、甘利、佐藤、宮川(次)、山本、各務、南、中村(T)、上原、宮川(守)、小林、市畑、茂木、村上、春日井、大庭

勝田は療養のため帰省し、休学することになった。  
冬山、春山の荷上げと偵察内定。月見の宴の通知。荷上げ後の予定として、十一月二日迄に部室の大掃除をする。十一月中に岩登りの練習を適当な所で行う。  
新入部員 加地幸雄(一年)

### 月見の宴

十一月三日 国立部室

(来訪者) 五十嵐数馬、近藤恒雄、増山清太郎、鈴木英雄(御

家族一同)、小林重吉、森脇芳之(御家族一同)、大塚武(御家族一同)、久保孝一郎、川村喜作、原田豊、鈴木肇、関恒義、大島理則、伊藤恙生、笠原広信、小林広、横山皖一、中村正司、荒砥通虎の諸氏

### 臨時集會

十一月二十四日 国立部室

(出席者) 石原、吉田、高崎、瀬田、山本、南、各務、柴崎、上原、宮川(守)、茂木、大庭、長田、小林、板谷、岡垣、南(敬)先輩との日原懇親会を十二月二・三日と内定されたが、詳細は十一月二十六日の針葉樹会で決定される。

合宿の栞(II) 配布。内容は、冬山、スキー、春山の合宿計画と装備一覽及び注意書き。会計報告、十月迄の個人及び部の山行記録抄。

冬山研究会II凍傷・凍死及び雪崩について。報告者 南、山本今後、合宿の為のトレーニングを行うこと。

### 本年度第二回針葉樹会

十一月二十六日 於如水会館日本間 後六時—九時

(出席者) 会員II中川孫一、増山清太郎、森脇芳之、大塚武、久保孝一郎、石井左右平、伊藤恙生、大島理則、横山皖一、小泉三好、中村正司、高橋尙好の諸氏 部員II石原、須山、白川、吉田、高崎、山本、中村(T)、宮川、上原

夏以降の山行報告、冬山、春山計画発表。

日原懇親会は大先輩の都合によりとり止めとなる。しかし、一

月に懇親スキーをしようとの案が出て、岩原—石打のコースが内定した。

### 定期部員集會

十一月二十九日 国立部室

(出席者) 石原、須山、鹿俣、吉田、甘利、宮川(次)、佐藤、春日井、高崎、吉沢、松尾、石和田、中村(Y)、中村(K)、瀬田南、山本、中村(保)、上原、岡垣、宮川(守)、西海、板谷、朝木南(敬)、加地、茂木、長田、小林、市畑

冬合宿、スキー合宿の器具調査

冬山研究会II雪洞及び雪崩(特に今回の富士における遭難の原因について) 報告者 石原

### 臨時召集

十二月一日 国立部室

(出席者) 石原、須山、吉田、佐藤、高崎、鈴木、春日井、宮川(次)、瀬田、石和田、松尾、山本、南、宮川(守)、岡垣、小林長田

富士遭難救援について。日本山岳会ルームへ佐藤が行く。午後六時、正式に参加要請があり、当部から石原、須山、佐藤、鈴木石和田、甘利の六名が今夜出発することとする。居残りの方で、器具、食糧(四日分)の買い集め等を行い、一人百円ずつ派遣費用としてカンパする。

新宿発二十三時五十五分の列車にて出発。JAC学生部の第三陣として約三十名。遭難校以外では、中央大、東経大、電通大、

一橋大等である。

### 冬山合宿出発

十二月十三日 二十二時十五分新宿発  
石原以下七名は多数に見送られて元気よく出発した。吉田のみ十四日に発発。

### スキー合宿出発

十二月十五日 先発隊甘利以下三名新宿発  
十二月十七日 本隊須山以下十七名新宿発

### 冬山合宿、スキー合宿反省会

一月十七日

冬山合宿については、日数と食糧計画、行動予定、器具、部員の統制等の反省があり、スキー合宿については、コーチャー、事故（捻挫等）の原因、部員の統制、場所の選定等について反省がなされた。

### 本年度第三回針葉樹会

一月二十二日 於如水会館

(出席者) 会員 中川孫一、高見要、堀岡清、大塚武、石井左  
右平、伊藤恙生、横山皖一の諸氏

部員 石原、須山、吉田、山本、南

懇親スキー(岩原・石打)は一月二十九日(土)上野発と決つた。

### 懇親スキー

一月二十九・三十日

(参加者) 先輩 高見要、大塚武、望月敏治、横山皖一、小泉  
三好、中村正司、南昌宏、宮川立三 学生 石原、白川、瀬田、  
山本、南

### 卒業部員送別会

三月五日 国立部室

(出席者) 卒業生 石原脩、白川隆夫、須山修平  
吉田、佐藤、松尾、高崎、宮川(次)、春日井、鈴木、瀬田、中村  
(Y)、中村(T)、南、山本、柴崎、岡垣、朝木、加地、茂木、大  
庭、市畑、上原

### 春山打合せ会

三月三・六・九・十一・十二日

前期(一・二年)の試験は二月中に終わったのだが、後期(三・四年)は試験中の事ゆえ、全員仲々揃わない。結局、出発せまつてあわてて打合せをやつた。

### 春山合宿出発

三月十三日 本隊吉田以下十名新宿発  
三月十五日 後発隊佐藤以下三名新宿発

◇ ◇ ◇

昭和三十年度メモ

部長

太田可夫先生

チーフ・リーダー

吉田義則(代表)

リーダー

甘利仁朗

〃

佐薙恭

〃

宮川次夫

〃

松尾寛二

マネージャー

高崎治郎

〃

柴崎新

サブ・リーダー

山本健一郎

器具係

中村保

図書係

上原利夫

記録係

五月二十七—九日 谷川岳合宿 三十二名 内先輩二名 参加

六月十五日 針葉樹会例会 於如水会館

七月十五日—二十五日 劔沢合宿(三十三名)

七月二十六日—八月一日 夏山縦走

A 劔—薬師—槍ヶ岳(十四名)

B 劔—針ノ木—鹿島鎗—白馬岳(十一名)

十一月三日—六日 創立八十周年記念一橋祭に山岳写真展を催す

(三十四番教室)

十一月三日 月見の宴 於国立部室

十一月二十三—六日 富士、三ツ峠強化合宿(十二名)

十二月九日 針葉樹会忘年会 部長太田先生、卒業生三十八名、

学生十八名出席

十二月十三日—二十五日 冬山合宿 天狗尾根より鹿島鎗北壁

(ピークリッジP<sub>1</sub>) 登攀(七名)

十二月十四日—二十五日 スキー合宿 於樽池、四名白馬岳登頂

(十名)

編輯後記

『復刊針葉樹』への道は意外に遠かつた。二十九年度初頭に持ち出された『年報』発行の件がお流れになつて、積み上げられた原稿は部室の書棚に埃を被つて呻吟すること一年有余。本年度に入つてからも、愈々『針葉樹十一號』の線が確定して、六月から本格的に始めた筈の編輯の仕事も、なかなか思うように進まず、とうとう原稿をかかえたまま年を越すところまで来てしつた。ともあれ、十五年以上陽の目を見なかつた十一號がここに發刊されることとなつたことは、山岳部を愛するすべての人にとつて大きな喜びであると信ずる。

針葉樹復刊にからんでとかく問題になつたことは、十號との間の長い記録的プランクをどうするかということであつた。わが山岳部の殆んど半生に當るこの間の動きが、何らかの形で記録に止めらるべきことは當然要望されるところであつたが、限られた条件の中で、ともかくも『復刊』といふところまでやつたこととて辿りついたことの『十一號』に於いては、その要望に全面的に沿い得なかつたことは残念であつた。わずかに『十號以後の歩み』としてその間の部の動きの概要を伝える一稿を加えることが出来、それによつて曲りなりも、十號とのつなぎの役割を果し得たかと思う。

長らく空席だつた山岳部長に、太田可夫先生を正式にお迎え出来たことは我々の大きな喜びである。昨年、重病の床に臥された後でもあつて見れば、再び元氣になられた先生に、しかも山岳部長として、引き続き御指導を仰ぐことができるのはこの上ない幸わせである。今までとて、實質的な部長先生として種々御面倒を見ていただいていたことではあるが、今後も山岳部の健全な發展への御力添えを心から御願ひ申し上げたい。

われわれの部報の形式として如何なるものが最上であるか等の問

題については、我々として更に考えるべき點が多いことと思う。それに關しては本號はあくまで一つの試みにすぎない。これも今後徐々に改善されて、部活動の内容の充實と共に、立派な『針葉樹』が作られて行くことを期待して止まない。われわれが、かかる部報を持ち、それを立派なものにして行こうということは、結局自分たちの山登りを、自分たちの山岳部を、より充實した、より内容あるものにして行こうという意志に外ならないであらう。

終りに、多忙な時間を割いて本號の爲に原稿を御寄せ下され、或いは編輯、印刷等について種々御配慮を賜わつた先輩諸氏に深く感謝し、わが山岳部の發展を祈つて擱筆する。  
(吉田)

編集委員

吉田義則 佐藤 恭 甘利仁朗  
上原利夫 茂木明俊

昭和三十年十二月二十五日印刷  
昭和三十年十二月三十一日發行

編輯兼 發行者 東京都豊島区千早町二ノ一一(佐野方)  
吉 田 義 則

印刷者 東京都千代田區飯田町一ノ二二  
横 山 重 喜

No. 印刷所 東京都千代田區飯田橋一ノ二二  
明光印刷出版株式會社

發行所 東京都北多摩郡国立町 一橋大学内  
一 橋 山 岳 部

電話 国立五七番(呼出)  
振替東京 九五八〇一番

Special  
Climbing & Skiing  
Boots Handmade  
by  
Takahashi  
of  
Japan



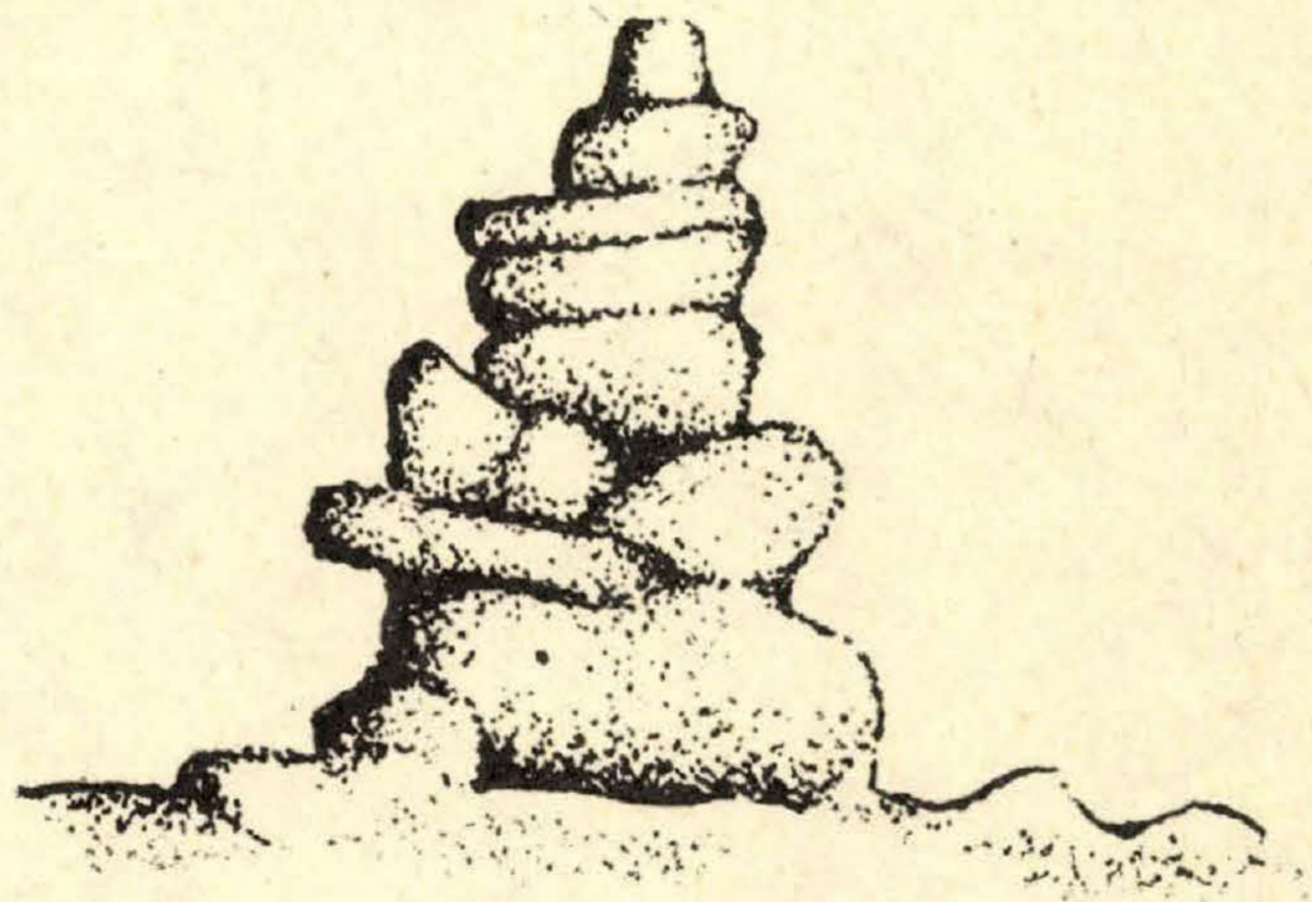
Mountaineering  
and  
Ski

Shop

山友社 **たかはし**

東京都新宿区三栄町3 (35)1912  
東京都中央区八重州2-5 (27)1560

岳人喫茶



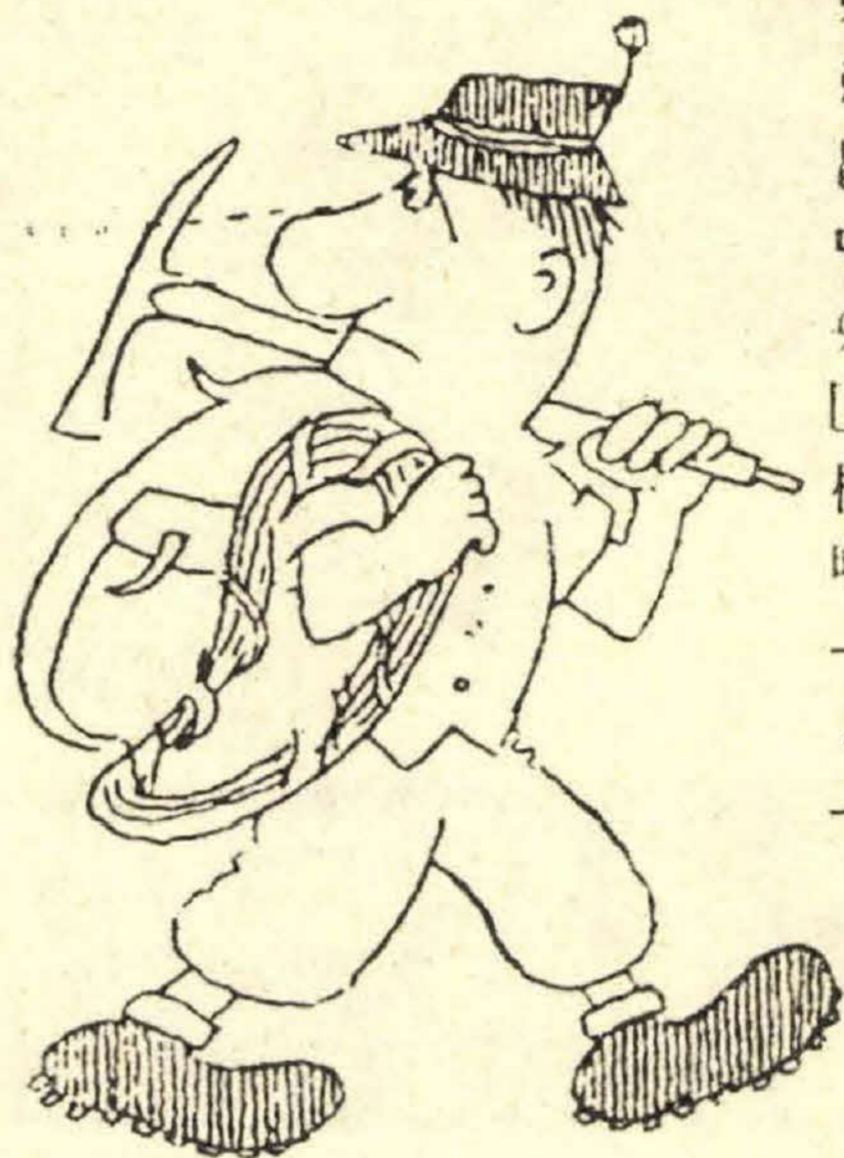
新宿 ケルン

# 山とスキー用具 せんもん 秀山荘

プライス・リスト進呈

tel. (56) 1861

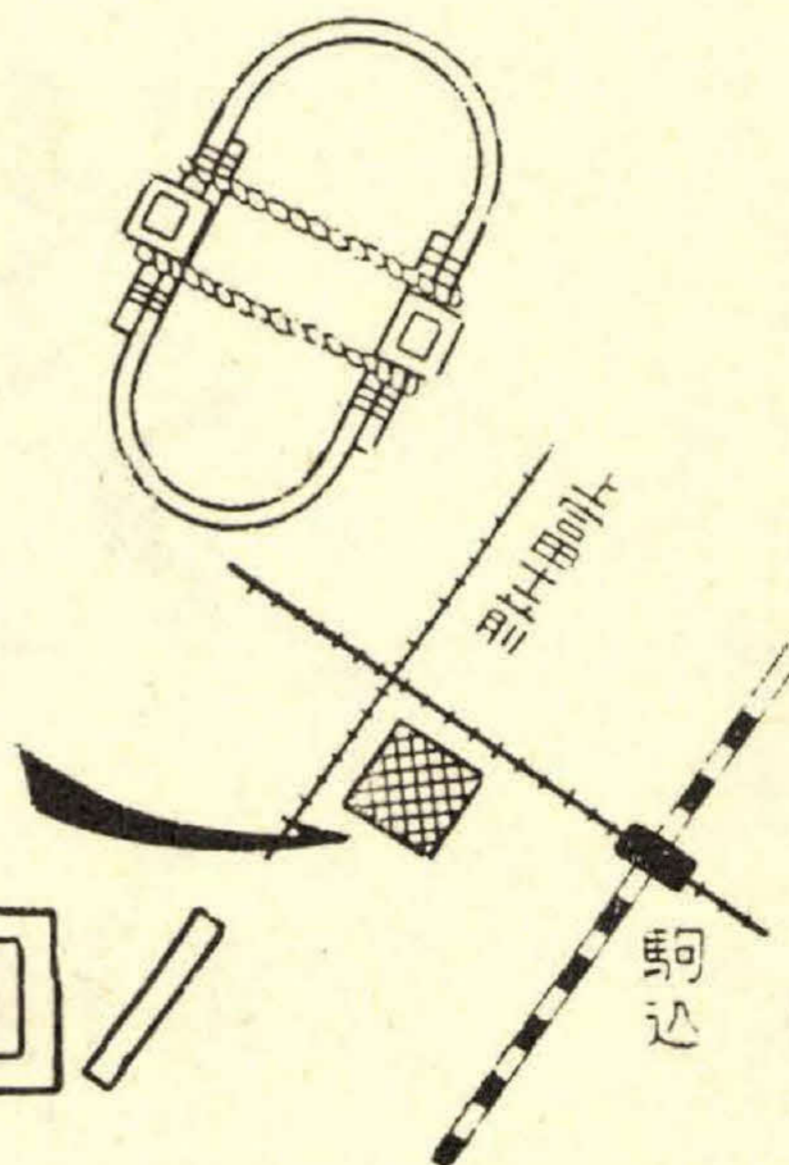
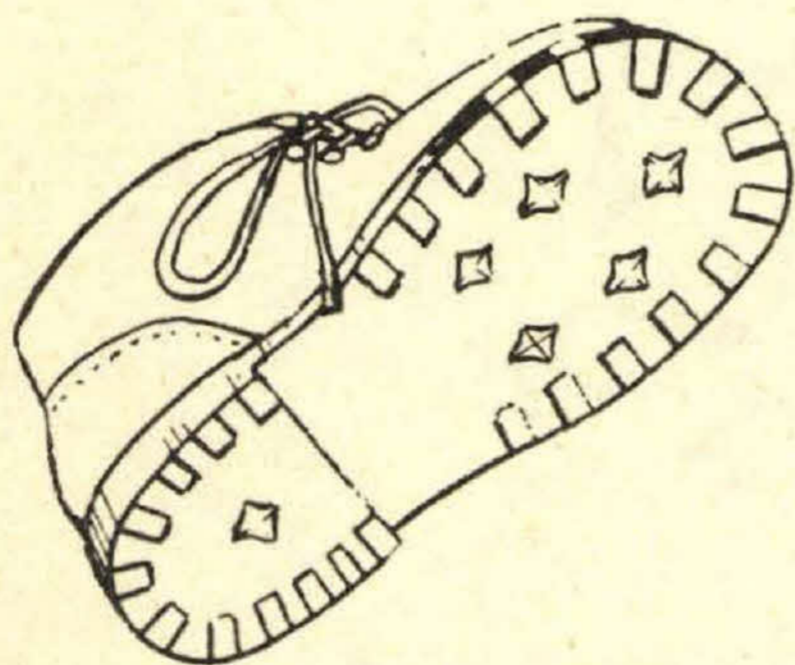
東京都中央区横町一ノ一



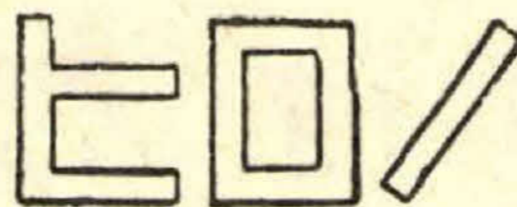
似て  
非なり

技術と伝統を誇る

## 登山とスキー靴専門店



文京区駒込上富士前10  
交叉点際



駒込



用具は是非堅實なものを  
御揃え下さい



登山とスキー

イフタ

東京 中央区日本橋江戸橋一丁目 TEL(27) 7686



# 志賀高原

スキーバス、湯田中發一志賀高原  
ゆき

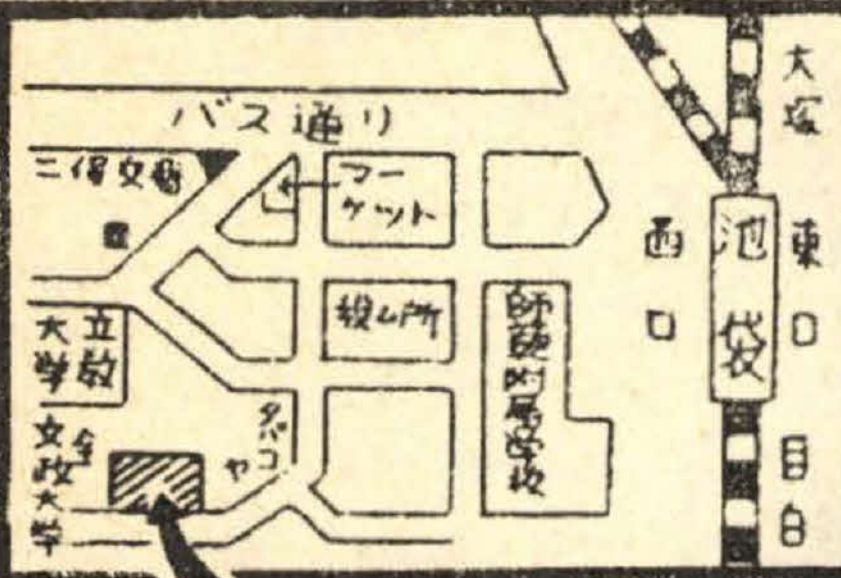
8.20 9.00 10.10 11.00 12.40 14.20  
15.10 16.20 17.30 18.10

丸池スキーリフト第一 270m 第二 150m 完備

お泊りは (電鉄直営)

丸池スキーハウス 500 円から

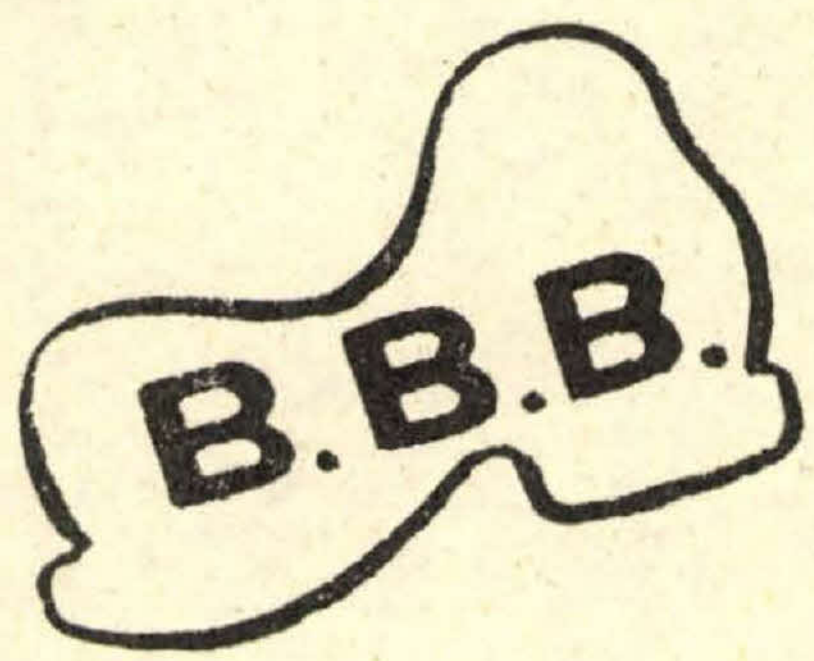
長野電鉄 TEL 3197  
3198  
7447



# 靴一スキー 靴登山

# ツカザワ

東京都豊島区池袋三の二二八一  
電話  
店 池袋(97) 二二三二二  
自宅落合(95) 四一一二二



カタログ進呈

## 呼吸器科

# 療養所 鈴木 治療人 法

院長 銀木 哲夫

顧問 池田 三雄

鎌倉市本腰越七八九 電話藤澤4019番

(鎌倉七里ヶ浜海岸)

1. 本書は、東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第1号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。
2. 本書の第1号～第6号は近藤恒雄氏所蔵本に、第7号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。
3. 復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

## 『針 葉 樹』第11号 復刻

---

昭和60年7月25日発行

復刻版  
発行者 針 葉 樹 会

編纂担当  
責任者 佐 藤 久 尚  
世田谷区船橋5-30-10

印刷所 (株) 平 文 社  
豊島区南大塚2-35-7

---



# 登山とスキーの

## 日本最古の 専門店

# 好日山荘



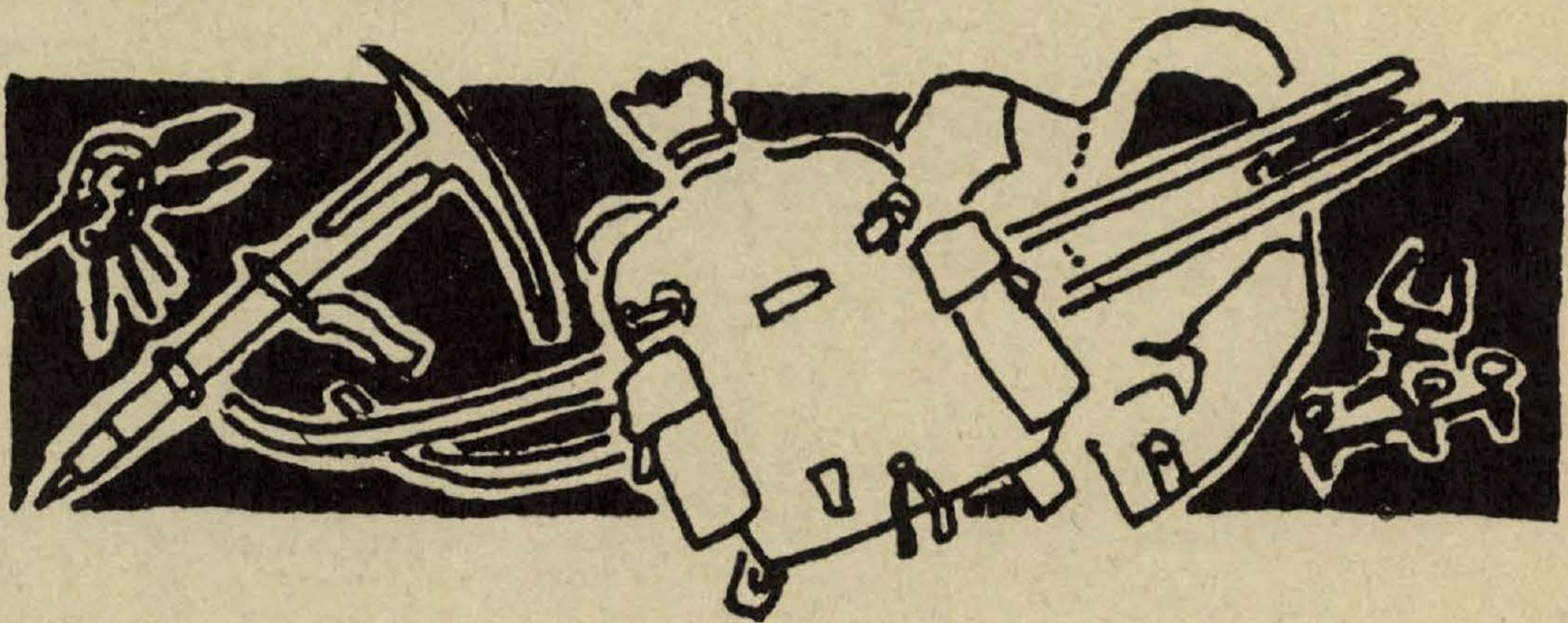
東京店 海野治良  
東京都中央区銀座西2~5  
電話 (56) 3 6 0 0  
振替東京 113657

大阪店 西岡一雄  
大阪市北区堂ビル前  
協和ビル三階  
電話 (45) 7 7 4 5  
振替大阪 68763

神戸店 鳥田直之介  
神戸市庄田区三宮1~32  
電話 (2) 5 9 5 1  
振替神戸 21352

### 片桐のキスリング型ルックサック

其の他一流登山，スキー用品取揃へ皆様の御来店をお待ち致して居ります



東京都文京区湯島天神町3の19

片桐盛之助

TEL 下谷 (83) 1794

